

真・恋姫†夢想～双魔
の狩人～

D—ケンタ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何の運命か、そのハンターは三国志を元とする、恋姫の世界へと迷い込んだ。

乱世の続く群雄割拠の地にて、彼は何を思い、何をなすのか……。

恋姫とモンハンのクロスSSです。

のんびり更新しますが、それでもいいよって方、良ければ見て行ってください！よろしくお願ひします！

目次

第一章 狩人、乱世へ

吹雪を討つもの	1
三姉妹との出会い	7
見知らぬ土地	18
旅路	28
別れ、そして次の街へ	40
陳留での出会い	50
曹操	60
しじまの向こう	71
霞龍	85
報いる一撃	93
狩りが終われば……	118

農場を整えよう

陳留の日常くその一く

陳留の日常くその二く

第二章 因縁、動き出す時代

黄巾党

相對、感じる者

雷電

白き靈獸

農場を整えよう	126
陳留の日常くその一く	143
陳留の日常くその二く	152
第二章 因縁、動き出す時代	
黄巾党	166
相對、感じる者	175
雷電	187
白き靈獸	196

第一章 狩人、乱世へ

吹雪を討つもの

氷雪に覆われた極寒の山岳。その頂は猛吹雪が吹き荒び、獣一匹の姿も見えない。

しかし“それ”は、吹き荒れる暴風や凍りつくような空気をものともせず、そこに鎮座していた。

体表面は鋼のような黒銀色の光沢を放ち、背中から巨大な翼を生やし、強靱な四肢で降り積もった雪を踏みしめるその強大な存在の名は、『鋼龍クシャルダオラ』。古龍という自然界における絶対的な強者であり、天候を操り、風を纏うその姿から、『風翔龍』の異名を持つ。

その眼前に、人影が一つ、相対するように立っていた。吹雪に覆われた中でも、その全身を包む砂漠色の重厚な鎧はその者の存在感を失わせることなく、更に身の丈を越えるほどもある大剣を両手で構えている。全身を鎧で覆い、その顔も確認できないが、体格からして男であることが分かる。その構える大剣の切っ先を向ける先は、鋼龍クシャルダオラ。

不意に、鋼龍が動いた。前肢を地から離し、翼を広げるとけたたましい咆哮が雪山に

響き渡る。その衝撃は周囲に舞い吹雪く雪を吹き飛ばし、同時に風を纏ったことによりぼっかりとした空間が作られた。男は咄嗟に大剣の腹を正面に構えて咆哮の衝撃を防ぐ。しかし完全には防ぎきれず、後方に飛ばされる。

体勢を崩した男目掛け、鋼龍はその四肢をもつて雪原を駆ける。男はなんとか体勢を整えると、ギリギリで横方向に転がって躲す。

素早く起き上がると接近し、その両手で構えた大剣を鋼龍へと振り下ろす。

ガキンツ。分厚く重厚な大剣は、めり込みはしたものの、堅牢な鱗や殻に阻まれ、鋼龍の肉を断つまではいかない。再び大剣を振るおうとした時、鋼龍が振り向きざまに前肢を振るってきたが、男はその下を潜るように転がり、お返しとばかりに後肢に大剣を横風ぎに叩きつける。またもや甲高い音をたてて弾かれ、その表面に傷をつけ鱗を飛ばしただけに終わったが、着実にダメージを与えている。

鋼龍は煩わしく思ったのか、背中の翼を広げ羽ばたかせると、その巨体を宙へと浮かした。纏っている風と合わせて、凄まじい風圧が男を襲うが、男は怯む様子も見せず、大剣を振りかぶると、空中にいる鋼龍の腹部めがけ勢いよく振り下ろした。高低差があったため、切っ先しか当たらず、鋼龍は空中を翔て男との距離を開けると、大きく口を開き、凄まじい風圧を伴う空気の塊、ブレスを吐き出した。男は避けるのが間に合わないかと悟ると、大剣の腹を正面に構えて防ぐが、その衝撃はとてつもなく、大きく後ろに飛

ばされてしまう。

その隙に鋼龍が滑空して迫るが、男はギリギリで転がり、躲しながら大剣を納刀。立て直すためか鋼龍の後側に向かつて走り出すが、鋼龍はその重量からは想像もつかない俊敏性で男の正面に回り込み、空中から尻尾を振るう。避けるのも間に合わず、鞭のように振るわれた尻尾に弾き飛ばされた男の身体は雪上を転がる。起き上がろうとした瞬間、鋼龍と眼が合った。鋼龍は再び大きく空気を取り込み先程と同じようにブレスを放とうとする。

その瞬間、男はその手から何かを放り、ソレは鋼龍の眼前まで達すると、焼き付かんなばかりの閃光が走った。

まともに閃光を見てしまい、眼が焼き付き視界を奪われた鋼龍はブレスを放つことなく、驚きのあまり翼と風のコントロールを失い、その巨体を雪上に墜落させた。混乱からすぐに起き上がることが出来ず、四肢をもがらせることしか出来ない。

そんな状態の鋼龍に近づいた男は、背中に背負った大剣を抜刀と同時に振りかぶり、力を溜める。限界まで張り詰めた弓の弦のように、ギリギリと身体を絞り、それに呼応するかの様に、大剣の刃が開き、中心から橙が掛かった深紅のラインが輝く。溜めた力が最高点に達したとき、力を解放。勢いよく大剣を振り下ろす。狙いは頭部、生物共通の弱点であるその箇所に向かい、強大で強烈な一撃をぶちかます。

バギンツ

先程までの弾かれた音とは明らかに違う音が雪山に響く。振り下ろした大剣は、狙い通り鋼龍の側頭部へと命中し、その堅牢な体表に罅を走らせ、頭部後方へ生えた角は、その根本からへし折られていた。

その痛みによつてか、鋼龍は更に激しくもがき、それを見た男は慎重に一旦距離をとる。鋼龍はようやく身体を起こすも、未だ視界が戻らないのか、闇雲に前肢を振り回し、尻尾を地面に叩きつける。

男はその隙に鋼龍から距離をとり、腰のポーチから砥石を取り出すと、注意は鋼龍に向けたまま、大剣を研ぎ始める。刀身が鋭さを取り戻したとき、鋼龍が吐き出したブレスが男の近くを通り抜け、後ろの山壁へと着弾。表面の雪だけでなく、中の岩までも砕く威力に、男は顔をしかめる。

男が大剣を構え直したと同時に、鋼龍も視界が戻ったのか、男を睨み付けると鋭い咆哮を上げ、再びその身を宙へと舞い上がらせると、男目掛けてその巨体を滑空させる。

男はそれを避けようとするでもなく、構えた大剣を振りかぶり、先程と同じように力を溜める。

圧倒的な大質量で轢き潰さんとする鋼龍に対し、男はその鋼龍を叩き落とさんと、振りかぶった大剣を振り下ろした。

正面からぶつかり合う両者。衝突するまでの僅かな時間が、男には永遠にも感じられた。

そして、ついに大剣の刃と鋼龍の頭部が接触。瞬間、男の手にはとてつもない負荷と衝撃が走り、ビキビキと筋繊維が軋む音が体の中を駆け、直接脳内に響いたように感じた。

それでも男は大剣をその手から落とすことなく、万力の如く力を込め、鋼龍の頭部へと押し込む。

ビキリ。と音を立てて大剣が命中した個所から鋼龍の頭部に罅が入り、殻が欠け鱗と血が周囲へと飛び散っていく。

しかし、男が与えたダメージはそれだけで終わり、鋼龍の勢いに押され、軽々と吹き飛ばされ後方の山壁へと叩きつけられた。男の口からは血が溢れ、砂漠色の鎧を赤に染め上げる。

満身創痍の男に対し、鋼龍は自身もダメージを負いながらも、悠然と宙に体を浮かせ、止めと言わんばかりに空気を体内に取り込んでいく。

何とかして逃げようとするが、喰らったダメージが大きすぎて、男の身体はまったく動かない。内臓が傷ついているのか、呼吸をする度に鈍い痛みが走り、口内に鉄の味が充満していく。男はギリりと軋む音がするほど歯を食いしばり、目の前の鋼龍を睨み付

ける。最期の瞬間まで、その闘志を燃やさんとするために。

そして、鋼龍がブレスを吐こうとした瞬間、男の目の前は白く塗りつぶされた。

——鋼龍は知らなかった。自然界に生きた存在であるため、砕けた山壁から出てきたそれが何であるかを。

——男は気付かなかった。山壁に叩きつけられた瞬間、鋼龍のブレスで砕かれた箇所から出てきたそれに触れていたことを。

——鋼龍が男に止めを刺そうとした瞬間、それは眩いばかりの光を放ち、彼らの姿は、光の中へと消えていった。

……光が収まると、そこには苛烈な戦闘の跡はあれど、勝者の姿も、敗者の姿も見あたらなかった。

三姉妹との出会い

「今日も人、集まらなかつたねー」

「もおー！何でみんな聴いていつてくれないのよー！」

街外れの川原、そこにかかる橋の上に、少女の叫びが虚しく響く。

「仕方ないわよ。私達、全くの無名なんだし。地道に続けていくしかないわ」

「ぶー。あーあ、何かいい方法ないかしら？」

橋の上には少女が三人。傍には楽器など、彼女らの荷物と思しき物が置かれている。

「とりあえず、宿に戻ろう？お姉ちゃん疲れちゃったー」

「ちいもお腹空いたー」

時刻は夕暮れ。太陽は西へ傾き、赤く染まった空も段々と暗くなつていく。

「そうね。一旦宿に戻つてから——？」

ふと少女の一人が、川辺に何か流れ着いているのを発見する。辺りに光源が少なく、太陽も落ちてしまつていたためよく見えないが、目を凝らすとソレは人のようなものであると分かる。ようなというのは、ソレの半身が未だ川に浸かつていたため全貌が分からないのと、しかしそのシルエツトは人の上半身そのものであることから、彼女に

そう思わせた。

「どうしたの人和ちゃん？」

「天和姉さん、ちい姉さん、あそこ見て」

「なにになに？」

その少女に言われて、二人は指された方向を見る。

「アレって……もしかして人？」

「倒れたまま動かないけど……もしかして死んでる?!」

「分からないけど、とりあえず行ってみましょう」

三人は置いていた荷物を背負うと、急ぎ足でその現場に向かう。

そして、人影の側まで近づき、先程はぼんやりとしか確認できなかった姿がはつきりと分かるようになると、少女達はその異様な姿に驚愕した。

「な、何よこれ……?」

少女の一人がそう溢したのも無理はない。倒れているのは、確かに遠目では人間にも見えたが、実際その姿は全然違うものであった。

見ただけで堅牢と分かる重厚な装甲で身を包み、その色は人肌ではなく、まるで砂のような色。それだけでも異常だが、特筆すべきはその巨大な角。それも真っ直ぐではなくねじれるように生えているため、表面はその捻れによりどこか不気味な模様をしてい

る。

「も、もしかしてえ……人じゃなくて、化け物？」

「し、死んでるわよね？」

「姉さん達落ち着いて。……確認してみる」

彼女は距離を保ったまま、近くにあった石を手に取ると、未だ横たわったまま動かないそれに向かい、放り投げる。

カツン。と軽い音をたてて石は弾かれる。ソレは身動きすら身動きすらせず、沈黙を保ったまま。

今度は一回り大きい石を手にとり、同じように放り投げる。先程よりは重い音たてたが、ソレは動く気配を見せない。

「……大丈夫みたい」

「よ、よかった……」

「も、もう。脅かさないでよね！」

安全であると分かると、緊張の糸が切れたのか、一人はその場に座り込み、一人はフンツとそっぽを向く。

「でも、本当に何なのかしら？ 鎧のようにも見えるけど……」

注意深く観察するが、近づくのは危険なため、遠巻きにしか見れず、分かった事とい

えば、関節部など明らかに質感が違ふところが存在するということだけ。

近くにあつた木の棒を手に、意を決して近づき、突いたりしてみるも、専門家ではない彼女には、それが何であるか理解できない。

「うーん……やっぱ人間ね」

「化け物じゃないの？」

「うん。留め具のようなものもあるし、これは恐らく鎧ね」

「鎧い？こんな奇抜な鎧を使つてるなんて、どこの兵よ？」

「もしかしたら山賊かもしれないわね、この人」

「さ、山賊ー!?」

少女の一人が発した推測の言葉に、二人は再び驚きの声をあげる。

そのまま一人は観察を続け、その様子を見てた少女は慌てて声をかける。

「危ないよお人和ちゃん……」

「大丈夫、さつきからピクリとも動かないし。それに、もし山賊だしたら金目の物を持つてるかもしれないし」

「た、確かにそうかも……」

「ちよ、ちよつと人和ちゃん！泥棒はダメだよお！」

少女が今やつてることを止めさせようと注意するも、少女はその手を止めない。

「大丈夫よ天和姉さん。山賊の持ち物なら、どうせ盗んだものだろうし」

「そうかもしれないけど」

「それに、明日からの生活どうするの？このままじゃ、私たちいつか餓え死ぬわよ」

「うう〜……」

二人が口論を始めた時、もう一人の少女は何の気なしに周囲を見渡し、その視界に入った何かに気づいた。

「ん？」

それは少し離れた所に落ちており、大きさは彼女の身の丈を大きく越えるほどに巨大であった。

そんなものに何故気がつかなかったかという、辺りが暗くなってきたことに加え、その色合い自体が黒を基調としていた為、見付けにくかったのだ。

「何これ？」

彼女はその物体に近づくと、表面をペタペタと触りだした。

よく観察すると、先端は鋭く、根本には柄のようなものがあることに気づく。

「何だろう？鉄でできてる訳じゃないのに、まるで剣みたいな……天和姉さん、人和、ちよつと来て！」

彼女は二人を呼ぶと、自分が見つけた物体を見せる。

「なあに、これ〜?」

「分かんない。なんか剣みたいな形してるけど」

「それにしても大きすぎるような気がする……」

初めに見つけた彼女は柄のような部分を掴むと、その巨大な剣のようなものを持ち上げようとした。

「お、重っ!?!全然動かないんだけど!」

「それはそうよ。こんな大きなもの、ちい姉さんが持ち上げられるわけないじゃない」

「でもこれ、なんでここにあるんだろう?もしかして、あの人の持ち物だったりして〜」

少女の一人がそう言ったとき、後方からジャリ……と音が鳴った。

その音に三人はビクリと体を強張らせ、恐る恐ると音のした方を振り向く。

「ひいっ……!?!」

ゆらり、とまるで幽鬼の様に、先程まで倒れ伏していた人物が立ち上がろうとしていた。

川に浸かっていた下半身を引き揚げ、片膝をつきながら上体を起こそうとする。

「さ、さつきまで動いてなかったのに……」

「い、生きていたの……?」

「あわわわ……」

驚きのあまり腰を抜かしてしまったのか、三人は逃げる事が出来ず、身を寄せあつて震えることしかできずにいた。

ズチャリ……。立てた膝に手をつき、身体を起こして立ち上がろうとした瞬間。

「ガフツ……！」

血を吐き出し、それにより力が抜けたのか、バランスを崩し地面に片手をつく。

そしてもう片方の手で腰の辺りをまさぐると、何やら筒のようなものを取り出した。

しかし、やはり力が入ってないのか、取り出した筒を落としてしまい、落ちた筒は地面を転がる。

拾おうと手を伸ばすが、またも大きく咳き込み、そのまま地面に倒れ伏す。

「ゴフツガホツ!!……うう」

這いずつて筒に向かうが、無情にも筒は離れるように転がっていく。

もはやそこまで這っていく体力もないのか、動きを止めてしまう。

このまま力尽きるのも時間の問題。そう思われた時。

「あ、あの……これ……」

その声に顔を上げると、少女が手を差し伸べており、その手には先程落とした筒を持っている。

「ちよつと天和姉さん!」

「危ないわよ!？」

「だってこの人、凄く苦しそうだよ?」

「確かにそう見えるけど、襲ってきたらどうすんのよ!？」

「大丈夫だよ。たぶんだけどこの人、悪い人じゃないと思うから」

そう言つて少女は更に近づいてしゃがみ、その手に持った筒をその人物の手に握らせた。

「はい、どうぞー」

「——う……………あ……………」

その人物は筒を渡した少女に暫し視線を向け、蚊の鳴くような声で何やら呟いた後、呻き声をあげながらも身体を起こして片膝をつき、手渡された筒の蓋を開けるとその中身を一気に呷る。その様子を、少女たちは静かに見守る。

そして、中身を全て飲み干すと、そのボロボロであつた身体に生気が蘇っていた。

「つあ、ハア……………ハア……………」

「だ、大丈夫?」

「……………あ、ああ。すまない……………助かった」

「よかつたあ」

声からして男性であることが分かるが、今の彼女達には些細な問題であつた。

復活した様子に、手渡した少女は安堵の溜息を漏らす。残りの二人は未だ警戒の目で彼を見ていた。

そして、男は膝に手をつきながら立ち上がり、辺りを見回すと、二人の方へゆっくりと歩きだした。

「ここ、ここちに来るー!?」

「あつ、まだ動いちゃだめだよーっ!」

二人は恐怖のせい、逃げようとせずにそこに立ったままでいた。そして、男はその二人の横を素通りすると、先程の剣の近くで止まる。そして、その柄を掴んで持ち上げると、その背中に背負った。

「あ、あれを軽々と……」

「すーい……」

「行かない、と……っ!」

男は再び辺りを注意深く見回すと、驚きのあまり声を失った。その視界に映るのは、先程まで自分がいた場所とはあまりにもかけ離れた光景であった。

「ここは……うまさか、奴のプレスで……ぐっ——!」

未だダメージが抜けきらないのか、男はバランスを崩し、またも地面に片膝をつく。すかさず少女は駆け寄り、心配そうに声をかける。

「だ、大丈夫？すごい怪我してるんでしょ？よかったら、私たちの宿で休んでいかない？」

「ちよ、ちよっと姉さん!？」

「何言ってるのよ!？」

突然の提案に、二人の少女は驚きの声を上げて駆け寄る。

「ちいちゃんも人和ちゃんも、いいよね？」

「いやよ！何でこんな怪しい男を宿に連れて帰らなきゃいけないのよ!？」

「もし乱暴でもされたらどうするの?」

「大丈夫だよー。この人はそんな事する人じゃないよー」

暫く口論していた三人だったが、結局折れたのは二人の方だった。

「あーもう分かったわよ!一晩だけだからね!」

「本当、天和姉さんたら……」

二人はほとほと呆れた様子だったが、その少女は気にしていないのか、笑顔で男の方に振り替えると、再び誘いをかける。

「……いい、のか?」

「うん!困った時はお互い様だよー」

その言葉を聞き、男はしばし沈黙した後、立ち上がり少女に返答する。

「すまない……世話になる」

「うん！じゃあ早速行こう。しゅっぱーっ！」

そう言うのと少女は男の手を引き、宿に向かつて歩き出す。二人の少女もその後について歩いて行く。

「そういえば、まだ名前言ってなかったねー」

道すがら、少女はそう言って彼に自身の名を伝える。

「私は張角、旅芸人をしてるんだー。二人は妹の——」

「張宝よ。アンタ、変なことしたら許さないからねー！」

「……張梁」

最初に名乗った少女——張角に続き、二人も彼へ自身の名を名乗る。

「……俺は」

そして、男も自身が何者かを、彼女たちへと伝える。

「俺はザイユ。ハンターだ」

見知らぬ土地

宿に着いた後、ザイユは備え付けの椅子に腰かけ、防具の留め具を外しながら、道中の事を思い出していた。

(見たことのない街並み、そして聞いたことのない国……)

宿に来るまで、張角、張宝、張梁の三人からこの場所について色々話を聞き、ザイユは一つの結論を出した。ちなみにその三人は、ザイユを宿に連れてきた後、食事へ出かけた。張角はザイユのことが気になったが、本人から促され、二人とともに宿を出た。

(どうやらかなり遠いところまで流されたようだ……)

ザイユの最後の記憶は、雪山の頂上近くの狩り場にて、対峙していたあるモンスターがブレスを放つ直前で途切れている。

そこで気を失い、ブレスによつて雪山から川へと落ち、そのまま流されたのだろうと推測した。

それにしてもダメージが少ないことに違和感を覚えたが、あの三人が応急手当てでもしてくれたのだろうと、あまり気には止めなかった。

「よ……っと」

まずは頭の防具を外し、膝の上に置く。首を捻ると、ゴキゴキと音が鳴ったが特に問題はない。

次に腕、胴と、上半身の防具を外していき、その下の筋骨隆々の肉体が露わとなる。

(楽になった……怪我の具合は……)

落ち着いたところで、自身のダメージを確認していく。まずは両腕。血管が浮き出ている逞しい両腕だが、その表面には亀裂のような傷ができており、一部の血管が破裂したのか赤黒く染まっている。傷は既に塞がっているため、動かす分には問題ないが、力は強く入れられない。

続いて胴。肋骨が折れ、内臓が傷ついているのか、回復薬のおかげでマシにはなっているが、呼吸をする度にまだ若干の痛みはある。

(頑丈なディアブロX装備でもこれか……)

ザイユは椅子から立ち上がり、腰、足の防具をも外していき、同じようにダメージを確認する。

脚の方は大したことなく、骨折はしていないみたいだが、両足も腕と同じような傷と赤黒い色合いになっていた。

(いつものことか……とりあえず、道具のチェックを)

「ただい——きやあつ!!」

声のした方を見ると、部屋の扉が開けられており、そこには食事から戻った張宝が立っており、その後ろには張角、張梁の姿もある。

「あああ、アンタ!?!何て格好してるのよ!?!」

「す、すまない……」

よく見ると三人とも顔を赤くしている。確かに今のザイユの格好は防具の下に着けるインナー一丁であり、若い女性に見せる格好ではない。

「さっさと着替えてよね!!」

そう言うのと張宝は扉を閉め、ザイユは出来る限り急いで脚と腰の防具を付ける。

「……もういいぞ」

それを聞いた張宝は、扉を少しだけ開けて確認する。大丈夫だと思ったのか、扉を完全に開けて他の二人とともに部屋に入る。

「もう、ホントにびっくりしたじゃない!」

「今の格好もあれだけど……」

「……すまない」

もといいた所ではインナーだけです。す者も多かったため、感覚が麻痺していたかもしれない、ザイユが反省していると、自身をじつと見ている視線に気づいた。

「じく……」

「……どうした？」

いつの間にか近くに来ていた張角がザイユの顔を覗き込むように見ていた。

「顔が隠れてたから分からなかったけど、ザイユさんって結構カッコいいなー、と思つてー」

「?そうか？」

張角の発言に、ザイユは首をかしげ、張宝と張梁は呆れた顔でため息をついていた。

「……それで、傷の具合はどうなの？」

「ああ。一応塞がってはいる。あとは休めば治るだろう」

「よかったあ〜」

張梁の一応ともいえる心配の言葉に、大事無いと返答する。確かに流血などはしていないが、しかしその見た目は前述の通り痛々しく、張宝なんかはそれを確認してしまったのを後悔したほどだ。

（休めば治るって、どんな体してんのよ……）

「ザイユさんは、これからどうするのー？」

「……さあな。どこか落ち着ける場所で、またハンター稼業でもやるさ」

「ねえ、気になってただけ、そのはんだあ? って何をするのよ」

丁度いいとばかりに張宝は疑問を口にする。ザイユは一瞬首をかしげるも、質問に答える。

「まあ、依頼を受けてモンスターを狩ったり、採集に行ったりと色々だな」

「もんすたあが何かは分からないけど、つまり便利屋って事ね」

「……まあ、な」

あながち間違ってもないため、否定できずに肯定する。そして、何故ハンターやモンスターのことを知らないのか、といった疑問がザイユの頭に浮かんだ。

（まあ、地域も違えば、呼び方やなんやら違うだろうしな）

と、一人結論を出して納得した。意外にも細かいことは気にしない性格らしい。

「君たちはどうするんだ？ 旅芸人と言っていたが、他の街へ行くのか？」

「そうね、明日の朝にはここを発つわ」

「きみたちだけでか？ 危険じゃないのか？」

「確かに危険だけど、もう隊商に乗せてもらおうお金もないからね」

世知辛い世の中であるりそれを聞いたザイユは、彼女達に一つの提案を出した。

「なら、次の街まで俺が護衛をしよう」

「えっ！」

「いいのー？」

「ああ。助けてもらった礼もまだだしな」

張角はその提案を素直に喜んだが、他の二人は少し困惑気味だ。

（ど、どうするのよ人和？ あんなのについて来られたら、ますます人が来なくなるんじゃない……）

（そうかもしれないわね……でももし賊とかに襲われたら危険だし……）

「よろしくねザイユさんー」

「ああ」

二人の心配をよそに、既に話は終わってしまったている。

その後、流石に同じ部屋で寝るのは憚られたのか、ザイユは部屋の外で眠り、張宝と張梁の二人は姉を説得するのを諦め、早めに床についた。

「ザイユさん、準備できたー？」

「ああ。大丈夫だ」

翌朝、ザイユは自身の装備を軽く点検してから身につけていき、張角に呼ばれた時には昨日三人と出会ったときと同じように全身を重厚な防具に身を包み、背に大剣を背負っていた。

「相変わらず凄い格好よね、それ」

「化け物に間違われなければいいけど」

「よし、それじゃあ、次の街にしゅっぱーつ!」

懸念する妹二人をよそに、張角は高らかに号令をかけ、四人は街を発つ。

◇

道中、ザイユは三人からこの地域について更に詳しく話を聞いた。しかし、聞き慣れない言葉が多く、完全には理解できなかった。

(要約すると、この地域は村や狩り場等は国が管理し、ギルドは存在してないってことか……)

どれだけ遠いところに来てしまったんだ。そう胸の内のため息をつく。

しかも複数ある国は一枚岩ではないらしく、よく旅人や商隊を狙い、山賊等が出没するなど、危険が絶えないらしい。その事にザイユは更のため息をつく。

「あーもう! 何でこんな道通らないといけないのよ!」

「しょうがないじゃない。地図によるとこの森を通るのが近道なんだから」

四人は今、森の中の道とは言えない道を歩いている。ザイユは慣れているからいいものの、慣れていない三人は辛そうだ。

「ねえ、一回休もう? お姉ちゃん疲れたー」

「もう、天和姉さん我慢して」

「バツサリと休憩の要求を切り捨てる張梁。確かに早めに森を抜けなければ危険ではあるが……。」

「……む？」

その時、ザイユの第六感が何かを捉えた。視線は茂みの先、そこには何もいないように見える。

「?どうしたの？」

「……下がっている」

三人を自身の後ろへと促した、次の瞬間！

「ブルルルルウウ」

「「ひいっ——!?!」」

(……ブルフアング、か?)

茂みから立派な牙を生やしたイノシシが出てきたのだ。それは目に見えて興奮しており、今にも襲い掛かってきそうだ。

「い、イノシシ……」

「あ、アンタ!早く何とかしなさいよ!!」

「ああ……任せろ」

チャキ。ザイユは大剣の柄を握ると、身体を半身に開く。

「ブモオオオオツ!!」

「「き、来たあー!?!」」

雄叫びを上げてイノシシは四人に向かって突進する。張角たちは腰を抜かしたのか座り込み、ザイユはまだ大剣を抜かずにいる。そして、あと僅かで接触する……その瞬間!

「フンツー!」

ズダンツ!!

ザイユは背中から大剣を一気に振り抜き、突進するイノシシ目掛け振り下ろした。あわやイノシシは衝撃によりその身体を地面に沈めるように潰され、中心から押し斬られて真っ二つとなった。

「……終わったぞ」

「え、もう?」

「ああ……さて」

ザイユは大剣をしまうと、腰から小ぶりの刃物——剥ぎ取り用ナイフを取り出し、イノシシの死骸に近づくとその身の解体を始めた。

「うふ……!」

「……天和姉さんは、見ない方がいいわ」

「なになにー？なんで目隠しするのー？」

その様子に二人は吐き気を覚え、唯一張梁に目隠しされた天和だけが無事だった。

その後、疲弊した三人は休息をとることにし、落ち着けるところまで移動した。ザイユは解体した素材と肉を腰の道具入れ——アイテムポーチに入れ、三人の後ろをついて行く。

旅路

「……」

次の街へと向かう旅路、その途中で休憩をとった四人。しかし、休憩に入る前の出来事——突然襲つて来たイノシシをザイユが狩り、その場でやった解体の様子を見せた
いか、張宝と張梁の二人はズーンと擬音が付きそうなほど気分を落としていた、

一方で張角は、目隠しをされたおかげで見えなかつたため結構元氣である

「……」グルグル

「いい匂い〜」

その張本人のザイユはというと、地面に設置した装置——肉焼きセットで、先程剥ぎ取つたイノシシの肉を焼いていた。張角は隣でその様子を見ている。

「……出来たぞ」

「わーい！ いただきまーす！」

こんがりと焼けた肉を受け取つた張角はそれにかぶりつくつと、その味に満面の笑みとなつた。

「おいしーいー！」

「そうか、よかった」

「ちいちゃん人と人和ちゃんも食べよー」

「い、いや……」

「私たちは」

その続きを言おうとした瞬間……

グウウ

「……」

中々に大きめな腹の虫の鳴き声が鳴った。

「……待ってろ。今焼く」

「お、お願いします……」

「うーん、おいしー♪」

その後、焼き立ての肉汁滴るこんがり肉を食べた二人は、さつきまでの雰囲気は嘘のように元気になった。

何も味付けをしていない、料理とは呼べないものではあるが、三人の空腹を満たすには十分である。

「あー美味しかったー♪」

「お肉なんて久しぶりに食べたわね」

「ホントねー……あ、あの」

「ん?」

「……ありがと、ね」

張宝がザイユに礼を言った。出会った時からずっと不信感を持っていたためか、どこかつんけんしていた張宝であるが、イノシシの件と食事の件で少しは認めていいか、という気持ちになったのだ。

「……そうね。さつきも、猪から助けてくれて、ありがとう」

「ちいちゃん、人和ちゃん……」

「気にするな。ハンターとして当然のことをしただけだ」

そう言って彼は自分の作業——アイテムポーチの整理に戻る。整理のため、中の物を一旦外に出していたのだが、その中の一つが張宝の目にとまった。

「ねえ、これ何?」

「ソレか?ただの回復笛だ」

そう、それは狩りの時、仲間の回復などに使う道具、回復笛である。ザイユは最初これを見たとき、一人で狩りに行ったのに何故入っていたのかと内心疑問に思ったが、すぐにボックスにしまうのを忘れた事を思い出して、一人納得した。

ザイユにとってはその程度のものだったが、彼女たちは別の印象をもったらしい。

「笛？アンタ笛吹けるの？」

「ああ。一応な」

「ここでザイユが言っている笛は、狩りの道具としての笛や、狩猟笛と呼ばれる武器のことであつて、楽器の笛ではないのだが……。」

「ちよつと吹いてみてよ」

「む？いやそれは」

「お姉ちゃんも聴いてみたいな」

張宝のお願いに張角ものつてきた。別に吹いてもいいのだが、回復笛は楽器ではないため、二人が望むような演奏はできない。どうしたものかと考えるが、二人が期待している目で見ており、しかもよく見れば張梁まで見ているため、断ることができない。

「……分かった。だが期待はするなよ」

「やったー！」

「い　いから早く！」

「はあ……」

ザイユは回復笛の手に取り、口に咥えると息を吹き入れて音を鳴らす。

単調な音色であつたが、回復笛の性質ゆえか、その音は優しくその場を包み込む。

「…………ふう。満足したか？」

「なんだかー……」

「癒される音だったわね……」

「意外ね」

心なしか癒された気分になった三人。それもそのはず、この回復笛はその名の通り、吹いた音を聴いた者を回復させる。しかしそれを知らない三人は、単調で武骨な音色であるのに何故かいい音色であると感じたのだ。

すると不意に張角が立ち上がって言った。

「よし！ちいちゃん、人和ちゃん、歌おう！」

「姉さん？」

「いきなり何？」

突然の提案に困惑する二人。

「だって、ザイユさんの演奏を聴いて、なんだか歌いたくなっちゃったんだもん」

「だからってそんな急に」

「いいわね！よし！張り切って歌うわよー！」

「ちい姉さんまで……」

既に二人は自分の楽器をとりだし、歌う準備を始めている。

「……歌か……」

その様子を見ていたザイユがポツリと呟いた。

「……そうだな。俺も、君たちの歌を聴いてみたい」

「ザイユさんもこう言ってるし、ね？」

「もう、分かったわよ」

観念したのか張梁も楽器をとる。その間、ザイユは念のために周囲の気配を探る。

……今のところ危険な気配はない。そうしている間に準備を終えたのか、三人はそれぞれの楽器を手に歌う準備を整えていた。

「それじゃあ、いっくよー！」

「おー！」

「まあ、やるからには本気で、ね」

三人の演奏と歌が始まる。ザイユが知っている歌とはまた違ったものであるが、その歌はザイユの心に染み渡り、体の奥から元気が出てくるような歌であった。

まるで、かつてドンドルマのアリーナで聴いた、ある歌姫の歌のようだと、彼女たちの歌を聴きながらザイユはそう思った。

「……いい歌だな」

気づけば時を忘れるほど聴き入ってしまう程に、ザイユは彼女たちの歌に魅了されていた。

そして、歌が終わったと同時に、ザイユは自然と両手を叩き合わせ、三人に拍手を送った。

「ありがとう。いい歌を聴かせてもらったよ」

率直に自分たちの歌を誉められた三人は、互いに顔を見合わせると、互いに手を合わせて喜んだ。

「「やったー!!」」

無邪気に喜ぶ三人の様子につられてか、ザイユも喜ばしい気持ちになり、自然と笑みを作っていた。

そしてひとしきり喜んだ後、張宝が真剣な顔でザイユに尋ねた

「ねえ……私たち、大陸一の歌手になれると思う?」

その問いかけに、ザイユは率直に、彼女らの歌を聴いて思った事を伝える。

「……君たちの歌を聞いているとき、以前聴いた歌姫の歌を思い出した」

「歌姫……」

ザイユは三人に視線を向けてから、更に続けて答える。

「……君たちなら、きつとなれるさ」

その言葉を聞いて、三人は更に、跳び跳ねるように喜んだ。

(……そんなに嬉しいのか?)

しかしよく考えてみれば、彼女たちはずっと泣かず飛ばずだったのである。故にこうして素直に褒められれば、その喜びは大きいのだろう。そう考えていると、張角が近くまで来てザイユに話しかけた。

「ねえねえ、よかつたら次の街でザイユさんも一緒に演奏しよー?」

「俺がか?」

何とも突飛な提案に目を白黒させていると、張宝がそれにつてきた。

「それいいわね! アンタ目立つし、物珍しさお客さん出来てくれるかも!」

「悪い考えではないわね。切っ掛けは何であれ、まず私たちの歌を聴いてもらわないと」

意外にも張梁も乗り気である。

「張角、何を言ってるんだ? 二人も悪ふざけが」

「そうだー。ザイユさん、これからは天和てんほうって真名まなで呼んでー」

咎めようとするもそれさえも遮られてしまう。もはや止まらないらしい。

「真名?」

「アンタにならないか。私は地和ちまう、真名を預けるんだからちゃんとやってもらうわよ?」

「まあ、姉さんたちがいいなら。人和れんほうよ。改めてよろしくね」

疑問を挟む余地もなく、矢継ぎ早に言われて、流石のザイユもたじろぐ。

「ま、待ってくれ。真名とは何だ?」

「そういえば、ザイユさんかなり遠くから来たんだっけ。真名っていうのはね、簡単に言うて親しい間柄の人にか呼ばせない名前のことよ」

「そんな大事な名前を、俺に教えていいの？」

率直な疑問である。自分みたいな昨日会ったばかりの人間に、教えるようなものではないと思われたからだ。

「大丈夫だよ。だってザイユさん、いい人だし」

「そういう問題か？」

「私たちが大丈夫って言ってるんだから、気にしないでいいの！」

そう言われては納得するしかない。結局は教えるかどうかなんて本人が決めること、本人がいいと思ったのなら、それでいいのだろう。

「……分かった。信頼の証と思って受け取っておこう……ありがとう」

何やらむず痒いが、それはそれとして嬉しいものである。

「だが生憎、俺には真名はない。その風習自体無かったからな。代わりに——」

「「？」」

そう言つてザイユは自身の腰に着けてあるアイテムポーチの中を少し探ると、何かを取り出した。

「これを君たちにやろう。ちょうど三枚ある」

「何これ？」

「きれ〜」

「何かの工芸品……？」

三人に手渡されたのは、薄く平べったい、金属のようなもので出来た物だった。

「鋼龍の鱗だ。真名の代わりと言っては何だがな」

「こーりゆう？」

「加工もしてないただの鱗だが、お守りにでもしてくれ」

渡された鱗をまじまじと見やる三人。しかし、ザイユは内心で三人に謝罪していた。実はその鱗、状態は奇跡的にいいものの戦闘によつて剥がれ落ちたのを拾ったものであり、真名の代わりに渡すというのは気が引けたのだが、しかしそんなザイユの心配をよそに、三人はその美しさと物珍しさからか喜んでいた。

「ありがとうーザイユさん」

「こんなものしかなくてすまん、張か……おっと、天和、だったな」

「ううん、そんなことないよー。大切にするねー」

ザイユは申し訳なさそうにそう言うが、張角——天和は笑顔でそう返す。どうやら素直にザイユからの送られたものに喜んでるようだ。

そして、張宝——地和と張梁——人和もザイユに礼を言う。

「そうそう。言っておくけど、後で返させて言っても遅いからね?」

「鋼でできた鱗なんて、洛陽の市でも見ないわよ。ありがとう、ザイユさん」

「地和、人和……そうか、なら、よかった」

自身の心配が杞憂に終わったことよってか、三人の笑顔を見たことよってか、その防具の下で、ザイユは自然と笑顔を作っていた。

その後、予定よりも時間が経ってるのに人和が気付き、四人は休憩を切り上げてその場を発ち、旅路を再開した。目的の街までは、まだ遠い。

◇

——ある日を境に、泰山の周辺から獣の一切が消え、それと同時に謎の咆哮が響き渡るようになる。民衆の間では、天変地異の前触れだ、化け物が泰山を支配した、天から龍が降り立った等の噂話が広がり、太守が調査を向かわせても、何の成果も得られずに終わる。

—— いったいこの地に何が起こっているのか……真相は未だ、誰にもわからない。

泰山の山頂。基本的に人が踏み入れることのないその地にて、ソレは目覚めた。

ソレは身体に備えたその四肢でもって、ギシリと金属が擦れ合う様な音を立てて、横たえていたその巨体を起こす。そして、背中の翼を広げて羽ばたき、空中へと舞い上がる。その体表は黒銀色の鱗や殻で覆われ、太陽の光を反射して光沢を放つ。

宙へと舞い上がったソレは、その巨体を空中に止まらせると、その頭部を掲げ、天へと咆哮を放つ。

同時に山頂に暴風が巻き起こり、いつの間にかソレは天を翔け、その場から姿を消していた。

鋼龍クシャルダオラ。三国の地に、嵐が吹き荒れる。

別れ、そして次の街へ

「やーだー！ザイユさんも一緒に行くのー！」

「……むう」

とある街にて、天和はザイユの腕を掴んで何やら喚いていた。

「天和姉さんわがまま言わないで」

「だってー……」

人 and がたしなめようとしているが、天和はブーツと頬を膨らませる。そもそも何故こんなことになったか。

「仕方ないだろう。賊と疑われている俺が一緒では、君たちの活動の邪魔になる」

「でもー……」

そう。原因はザイユのこの格好。初見では化け物にしか見えない見た目に加え、どう見ても正規品ではない大剣。これでは怪しまれても仕方ない。

「心配するな。今生の別れと言うわけではないし、お互い生きていれば、また会えるさ」

「……本当に、また会える？」

「ああ。約束だ」

「——うん！」

その言葉を聞いて、天和は漸くザイユの腕を離し、目元を拭うと、ザイユに向かっていつもの天真爛漫な笑顔を見せた。

「じゃあそれまで、私たちももつと有名になつておかないと。ザイユさんがどこにいても、私たちの事が分かるように、ね」

「ああ、君たちなら大丈夫だ。応援してるぞ」

そう言つて天和の頭を撫でる。防具越しではあつたが、天和は心地良さそうに目を細める。

「もうちよつと一緒にいたかつたけど、まあ、仕方ないわよね」

「地和か」

「みてなさい。次会うときは、あんたが吃驚するほどの大人気歌手になつてやるんだからー！」

「ああ、楽しみにしてるぞ」

地和も当初に比べて随分と打ち解けたようだ。ザイユのお陰で、安全にこの街まで来れたし、道中の食事もしっかりと確保できた。

だからといって落ち込まず、これからのやる気に変えるのは、地和の強い上昇志向故だろう。

「それで、ザイユさんはこれからどうするの？」

「そうだな……陳留とかいう街に行ってみるつもりだ」

「そう……短い間だったけど、あなたのお陰で色々助かったわ。ありがとう」

「気にするな。こつちこそ、色々助けてもらったからな」

この地域のことについては、ほとんど人知から教わった。風習や地理など、一般常識を知らぬ状態では、今後のハンター稼業に障る故。

人知は頭もよく、意外に交渉事に向いていそうだとザイユはそんな印象を持っていた。試しに肉焼きをやらせてみたら、すぐにタイミングを覚えたということもあつた。もつとも、姉二人を上手く制御できれば、の話だが……まあ問題はなだらう。

「さて、あんまり話しては惜しくなる。俺はもう行くでしょう……またな、三人とも」

そう言ってザイユは三人に背を向けて歩き出す。

「また会おうねーザイユさんー！」

「アンタも私たちと同じくらい名をあげるときなさいよねー！」

「いつかまた、私たちの歌を聴きに来てね」

三姉妹の言葉に対し、ザイユは振り返らず、手を挙げて応える。

目指すは陳留。その地ではいったいどんな出来事がザイユを待ち受けているのだろ

うか。

◇

日も暮れた頃、ザイユは森の中で焚き火の用意をしていた。流石にすぐには到着できないため、この地で夜営をするようだ。

焚き火がつくと、ザイユはお馴染みの肉焼きセットを取り出し、生肉をセットする。天和たちとの旅路で狩りとった肉だが、日にちが経つるにも関わらず腐っていない。ポーチに入れておけば何故か肉も魚も新鮮な状態で保たれ、焼いた食料は湯気が出る出来立てのまま。どういう技術なのか不明ではあるが、ザイユは龍人族の謎技術だろうと、特段気にしていない。

「……むっ？」

なにかが近づいてくる。気配がした方向に視線を向け、いつでも動けるよう身構える。

「ぐうるうう……」

「……アオアシラ、に似てるな。この地域での変異種か？」

現れたのは、この地域においてクマと呼ばれる生物。ザイユはこのモンスターについて自身の記憶と照らし合わせた結果、以前行ったユクモ村というところで狩ったモンスターと似たようなのだろうと結論付けた。似ているが体色が青でなく黒である等、細部

が違う。

「肉の臭いにつられたか……仕方ない」

「ぐおおあああ!!」

立ち上がり威嚇するクマに対し、ザイユは得物の柄に手をかける。そして、大きく降られた前足を躲し、一気に抜刀。その大質量を振り下ろす。

ボギンツ!

振り下ろされた一撃は、容易くクマの骨を砕き、肉を叩き潰し、体を引き裂く。

「……脆いな」

先日のイノシシもそうであったが、ザイユが知っているモンスターに比べて異様に脆い。サイズからして小型、中型モンスターであるから、仕方ないかと、ザイユは結論付けて、剥ぎ取りを開始する。

「……?」

しかし次の瞬間、ザイユの周囲に異変が起こった。

「霧……?」

近くの木々すら見えなくなるほどの濃霧が辺り一帯を包み込んだ。霧が発生する、それ自体は自然現象のためおかしくはない。しかし、確かに今は夜であるが、霧が発生するほど気温が低いわけでも、この場所が湿度の高い場所な訳でもない。

にも関わらず、視界が塞がれるほどの濃霧が、この森に発生している。まるで何かを覆い隠すように。再び大剣を構え、周囲を警戒する。

「……っ!？」

咄嗟にその場から飛び退く。それと同時に、先程までザイユが立っていたところを何かが通過した。

それが飛んできたと思われる方を向き、感覚を澄ませる……しかし。

(何だ……気配はするが、霧のせいで姿が見えん……)

謎の襲撃者に対して警戒するが、姿が見えないため何をすることもできない。

その襲撃者も、それ以降何をしてくることもなく、いつしか濃霧は晴れ、森の景色は元に戻っていた。

只一つ、何かが通ったような跡を除いて……。

「これは……」

その跡を調べるが、巨大な何かということしか分からない。追跡しようとも思ったが、既に辺りは暗く、深追いは危険であると判断し、野営地へと戻ることにした。

「……あつ?」

訂正、変わったところがある一つ。

ザイユが先程狩ったクマの亡骸がなくなっていたのだ。しかも肉焼きセットの肉ま

でも。

「……………寝よう」

獲物と食料を奪われたザイユは、何だかやるせない気持ちになり、ふて寝した。

◇

「あれが……………陳留か」

あの日から暫く、ザイユは森を抜け、街道を通り、ついに目的地である陳留を視界に収めれるところまで到達した。

「今度は入れるといいが……………」

前回は賊の疑いをかけられたため街に入れなかったが、陳留は大きい街で、治安もいと聞いていたため、恐らく大丈夫だろうと考えてはいたが、やはり不安にはなる。さて、どうなることか……………。

—

—

—

その心配も杞憂であり、ザイユは無事に陳留の街に入れた。街の入り口を警備していた衛兵に怪しまれはしたものの、何とか入れてくれた。

ザイユはその衛兵に内心で感謝しながら、街の様子を見て回る。活気があり、中々に

発展しているようだ。

「さて、どうするか。ギルドはないらしいが、それに準じた組織はあるのか……」

と考えていたところに、腹の虫が鳴き声をあげた。

「……酒場でも探すか」

しかし、ザイユはこの地域の金は持っていない。ゼニーはあるが、恐らく使えないだろう。実際、天和たちに見せたとき、ゼニー硬貨が金だと分からなかった。

「まあ、なんとかなるか」

そう思いザイユは店を探すため街の中を歩く。道中、街の人から奇異なものを見る目で見られたが、全く気にせず歩を進める。

そしてある程度歩いたとき、何やら美味そうな匂いがザイユの鼻をくすぐった。匂いがした方を見てみると、一件の建物が眼に入った。どうやらあそこは食事処を営んでいるようだ。

「あそこにするか……」

ザイユは店へと歩を進め、戸口を潜ると、よりいっそう美味しそうな匂いがザイユの空腹を刺激する。

「いらっしや——ヒイツ!？」

入った途端、店員と思しき女性がザイユを見て悲鳴をあげた。無理もないだろう。

パツと見化け物にしか見えない鎧、さらに身の丈以上の大剣を背負っているのだ。そんな人物が入店してきたら何事かと思うだろう。

「落ち着いてくれ。俺はただ食事に——」

「失礼する、この近くに怪しい者がいると通報が……」

その声に反応してザイユが振り向くと、新たに入店してきた人物と目が合った。

空色の髪に青色の服、目つきや表情から理知的な印象が伝わる女性がそこに立っていた。得物だろうか、細身の弓を携えていることから、この街のハンター的な人物か、自警団か何かの人だろうとザイユは認識した。

「……成る程、確かに奇妙な格好をしているな。とりあえず大人しくついて来てくれるか？」

「……分かった」

「話が早くて助かる。私も手荒なことはしたくないからな」

面倒だ、そう思いながらもザイユは彼女の指示に従う。それに、この地域でハンター家業をするための足掛かりが分かるかもしれない、という考えもあった。

◇

近頃近隣の森や沼地等で、隊商が襲われ食料等が盗まれるという事件が多発していた。しかも、人員への被害は無く、物資だけが盗まれるという。

当事者である商人の話では、いつの間にか濃い霧に包まれ、何か飛んできたような音が聞こえ、その後に霧が晴れると、物資だけがなくなっていた。賊に盗まれたにしては綺麗すぎる……。辺りを探索すると、何か巨大な足跡が見つかったという。商人達は、これは化け物の仕業だと、すぐさま近くの街へと逃げ込み、その地の太守へと訴えた。訴えを聞いた太守は部隊を派遣するも、痕跡は確かにあるが、その正体と思われるものは何も見つからず、更には商人たちと同じように霧に包まれ、荷物を盗まれてしまった。その際隊員たちから、何かが横切った、ギョロリとした目玉が見えた、などの証言があつたものの、成果無しに終わった。

それ以降も謎の盗難事件は発生し、幾度となく討伐任務が組まれるも、その全てが無駄足に終わり、太守は部隊の派遣を止め、商人たちはその地を避けるようになり、いつしかその地は、『霧隠しの土地』として、民衆の間に広まった。

神隠しの正体が何であるか、それは未だに分かっていない……。

「カロロロ……」

陳留での出会い

「それで、貴様は一体何者だ？名は？」

あの後、ザイユは女性——夏侯淵に役所らしきところに連行され、尋問を受けることとなった。

「……ザイユだ。ハンターをやっている」

「はんだあ？よく分からんが、賊ではないのだな？」

「当たり前だ」

それほどまでに怪しいのだろうか？ザイユは内心自身の装備に疑問を持った。G級に上がってから作ったお気に入りの防具だが、頼もしさやカツコよさはあっても、怪しまれる要素などない。それがザイユの自己分析の結果だ。

「そうは言っても、だ。その恰好では説得力がないぞ」

「……すまないな。遠くの村から来たもんで、この辺の常識に疎いんだ」

「遠くの村？どこ出身なんだ？」

「フラヒヤ山脈近くの、ポツケ村だ」

大陸の北部に位置する、一年中雪におおわれた山岳地帯。その地にも多くのモンス

ターが生息し、同時に人々も村を作り住み着いている。

ポツケ村は、フラヒヤ山脈付近にありながら温泉が湧いており、比較的住みやすい温暖な気候を保っている村である。その温泉は、ユクモ村程ではないにしても有名であり、それ目当てで来る観光客もいるくらいだ。

しかしその地名、村名を出しても夏侯淵は首を捻るばかり。

「知らぬ地名だな。デタラメを言っているわけではあるまいな？」

「当たり前だ……と言いたいが、信用に足る材料がないから……ギルドカードならあるが……」

「一応見せてもらっても？」

「ああ……これだ」

ザイユはポーチからギルドカードを取りだし、夏侯淵へと手渡す。彼女はそれをまじまじと見やるが、やはり分からないのか、眉をひそめている。

「知らない文字だな。そちらの特有のものか？」

「恐らくな。少なくとも俺は今まで、その文字が大陸共通だと思っていた」

「成る程……確かに、嘘は言っていないようだな」

じつ……とザイユの目を見て、夏侯淵はそう判断を下す。その言葉を聞いて、ザイユは重い溜め息を漏らす。

「信じてもらえたか……」

「目を見れば分かる。まあ、問題を起こさない限りは大丈夫だろう」

「そうか……」

ようやく釈放である。しかし、以外にも話が分かる人物だったことで、ザイユは彼女、夏侯淵に対していい印象を抱いていた。

「俺の無知のせいで迷惑をかけてしまったな」

「いや、こちらこそすまなかつた。ところで話は変わるが、そんな遠い村から何をしに来たんだ？」

尤もな質問だ。彼女からしてみれば、名も知らぬ程に遠い村から、態々自分たちの街へと来た者の目的が気になるのは至極当然と言えるだろう。

「実を言えば、この地域に来たのは事故みたいなものだな、これといった目的はない」
「では、これからどうするつもりだ？」

「ハンターとして活動したいが、どこで許可をもらえばいいのか分からん。よければ、どこで許可をもらえるか教えてくれないか？」

「さつきも言ってたが、そのハンターというのは？」

「分かりやすく言えば、依頼を受けて狩猟などを行う仕事だ」

実際にはモンスターの討伐、捕獲の他に、薬草などの採取、モンスターの卵や鉱石の

運搬などがある。依頼があれば何でもするのがハンターであるが、その依頼の中には貴族や王国の第三王女からのものもあつたりする。……内容は大抵碌でもないが。

「大層な得物を携えているが、それは狩猟の為の物か」

近くの壁に立て掛けてあるザイユの大剣を指さし夏侯淵が問う。実はこの大剣、連行した後に兵が取り上げようとしたのだが、あまりの重量に複数人がかりでも持ち運ぶことができず、仕方なく立て掛けてあるという訳だ。その中心線からは今も紅く光を放っている。

「そうだ」

「ふむ……弓矢ではなく、大剣で狩りを行うとは聞いたことがないが……」

「弓も使えんことはないが、コイツの方が性に合ってるもんでな」

「成程……狩猟の許可を得たいんだったな。それなら、うちの文官に話をしてみよう」

「すまない、助かる」

それから少しばかり話をして、ザイユは夏侯淵と共に、ハンター活動の許可をもらいに文官のもとへ向かうことになった。そしてその道中……。

「秋蘭！ 賊を捕まえたと聞いたが、ソイツか？」

何やら勢いのある感じの女性と遭遇。ザイユは直感で悟った。これは面倒なことになる、と。

「姉者か。いや、こやつは——」

「ふむ、話に聞いた通り、随分と奇つ怪な恰好だな」

「……言っておくが、俺は賊ではない」

予想の通りに面倒なことになった。会ったばかりだが、大人しく話し合うようなタイプではないだろうと、ザイユは思った。

「嘘をつくな。その様な風体で、賊でない筈がないだろう」

「姉者、彼の言っていることは本当だ。確かに怪しい恰好だが……」

夏侯淵も怪しさという点では同意するが、彼女はザイユが賊ではないと知っている。先程この女性を姉と呼んだことから、二人は姉妹なのだろう。妹の話であれば聞いてくれるかもしれない。

「む、そうなのか？まあ、秋蘭が言うならそうなのだろうな」

「……誤解は解けたか？」

「ああ。しかし、大層な得物だな。賊ではないとすると、どこかの武官か？」

「ハンターだ。軍人ではない」

ハンターという聞いたことのない単語に女性は首をかしげる。やはりこの地域ではハンターは存在していないのだろうか。

ザイユがそう考えている間に、夏侯淵が彼女に耳打ちして、ハンターがどういうモノ

なのか、先程のザイユの説明をそのまま伝える。

「成程狩猟か……しかし、狩りをするのにそのような鎧と大剣はむしろ邪魔ではないか？」

「いや、俺がいたところでは、このくらいは装備じゃないとまともに狩れん。そもそもこの装備も、狩ったモンスター素材で作ったものだ」

「お主のいた村はいつたいどんな所なんだ？」

尤もな疑問である。夏侯淵は改めて彼の装備を見やる。金属でも皮でもない素材で出来ていると思われる砂色の外装。上半身の装備にはねじれの入った剛角が付いており、見るものを威圧する。背負った大剣は彼女たちどころか、ザイユの身長を超えるほどに大きく、その重量は見た目通りの重さで、訓練された兵ですら持ち上げることはできない。そのような得物で、一体どのように狩りを行うのだろうか？夏侯淵は疑問に思った。そして彼女も……。

「そこまで言うのなら、その腕前を見せてもらおうか」

「………何？」

◇

ザイユが連れてこられたのは、ハンター稼業の許可を得る為の文官のところではなく、官舎の中にある広場、練兵場であった。

何故この場所に連れてこられたのか。ザイユの力量が如何様なものか興味を持った、夏侯淵の姉である女性——夏侯惇に半ば無理やり連れてこられたのだ。そして何故か、訓練用と思しき直剣を構えている夏侯惇と相対している。

「……何故だ」

この夏侯惇という女性は、どうやらかなりの戦闘狂の様で、道中夏侯淵も「また姉者の悪い癖が……」と呟いていた。面倒くさいと思いつつも、逆らうとさらに面倒だと思いい、大人しくついてきたら、この状況になったという訳だ。

「さあ、さっさと得物を抜け！」

(……無茶を言う)

剣を抜いている夏侯惇に対し、ザイユは未だ大剣を納刀したまま無手で立っていた。「俺の大剣はモンスターを狩るための物だ。人に向ける物じゃない」

ザイユが携えている大剣は、モンスタアの硬い甲殻や鱗、分厚い肉を断ち切るための武器だ。その破壊力は今夏侯惇が構えている直剣の比ではない。故に人に絶対に向けてはいけないのである。まあ、中には悪ふざけで大剣やハンマーで他のハンターを打ち上げたり、剥ぎ取り中のハンターの邪魔をしたりするが、あくまで悪ふざけの反中であり、それで危害を加えることはない。

しかし、そんな事情を知らない彼女にとっては、ただの言い訳にしか聞こえなかった

のか、夏侯惇は明らかにいらだったような表情をしていた。

「ええいつまだるっこしい！いいからさっさと抜けっ！」

「……いや、だから俺は人は斬らんと——」

「なら、此方から行くぞ!!」

そういう放つや否や、夏侯惇は一気に距離を詰め、手に持った直剣を振り下ろす。ザイユはそれを見ても大剣を抜かず、ただ防ぐように片腕を上げた。

その様子を見ていた夏侯淵は驚き、つい声をあげそうになった。訓練用に刃が潰れているとはいえ、金属製の直剣をそのまま受けては危険である。いくらザイユが鎧に身を包んでいるとしても、夏侯惇の膂力で直剣を叩きつけられては只では済まない。そう思っていた。

直後、金属の甲高い音ではなく、鈍い音が練兵場に響く。

「——っ?!」

「……」

「何っ?!」

しかし大方の予想に反して、受けたザイユの腕はビクともせず、振り下ろされた直剣を受け止めた。しかも逆に、叩きつけられた直剣の方に罅が走る始末。

(堅牢な鎧と思っていたが、これ程とは……さらに驚くべきは、姉者の力で叩きつけられ

でも身じろぎ一つせぬ強靱な体幹！」

（な、なんだ今の感触は……本当に鎧なのか、これは!?それにこの感覚、まるであの怪物のような——）

「……ほう、意外に力あるな」

素直に夏侯惇を称賛するザイユ。その言葉に偽りは無いのだが、挑発と受け取ったのか、夏侯惇は再び剣を振るう。

しかし、その悉くがザイユの鎧に弾かれ、中までダメージが通らないどころか、その鎧に傷一つつけられない。最終的に直剣に入った罅が広がり、中程から折れてしまった。

「まさか、姉者があそこまで攻めあぐねるとは……」

「ハア……ハア……」

「……満足したか？」

「ッ！まだだっ!!」

その一言にさらに夏侯惇は激怒した。必ずやこの傲岸不遜な輩を叩きのめさんと決意した。夏侯惇には彼の事情などは分からぬ。けれども侮られているということに關しては人一倍敏感であった。折れてしまった直剣を投げ捨てると、本来の得物と思しき幅広の刀を構え、再びザイユに跳びかかる。

もはや力量を見るといふ当初の目的も忘れ、ただ眼前の敵を叩きのめすことだけを考えている夏侯惇を危険と感じたのか、夏侯淵が止めに入ろうとする。

「春蘭、何をやっているのかしら」

しかし止めたのは夏侯淵でない、さりとてザイユでも、ましてや夏侯惇ではない、第三者の声。その声を聞いた瞬間、夏侯惇はぴたりと動きを止め、その声の方を向いた。

「か、華琳様っ!？」

「秋蘭、説明してくれる?」

「はっ…実は——」

夏侯淵が声の主である女性に、今の状況やそれに至る経緯を説明する。

ザイユはその女性を見る。小さいが、不思議とオーラを感じる、そのような印象を抱いた。

しかし、女性について考えたのはそれだけで、ザイユの頭の中はすぐに別のことを考え出した。

(……そういえば、何も食ってなかったな)

ひそかに腹の虫を鳴らして、後でこんがり肉でも食おうか、そうザイユは思った。食事をとるには、まだ時間が掛かりそうである。

曹操

「ザイユ。この曹孟徳に仕えなさい」

「……」

何故だ。ザイユの心境はこの状況に陥った疑問で一杯であった。

本当に、何故このような展開になったのか。時は暫く前に遡る。

◇

夏侯惇との手合わせを止めた少女に夏侯淵が説明を終えると、少女は何故かザイユの近くに来て、観察するようにザイユを見た。

「成程、確かに中々の強者のようね」

触れもせず、動きを全部見た訳ではないのに少女はザイユにそう言い放った。その際、何故か夏侯惇に睨まれたが、ザイユは気付かず、ただ眼前の少女に視線を向けていた。

髪の毛は金色で、両サイドをロールで纏めている。背丈は小さいものの、そのオーラはまさしく上に立つものの風格を現し、対格差のあるザイユに対しても物怖じしていない。

「あなた、狩猟の許可が欲しいんですけどね」

「ああ」

「いいわ。許可してあげる」

あつさり。目の前の少女はそうあつさりと言い放つ。その言葉にザイユだけでなく、夏侯淵、夏侯惇の二人も驚いている。

「ただし条件があるわ」

そううまい話など転がってはいない。しかし、これをこなせばハンターとして活動できるのだ。G級まで進んだザイユにとって、こう言った条件の有無など関係ない。

「……分かった。で、条件とは？」

「そうね……ここじゃなんだし、場所を移しましょう。二人も付いてきなさい」

「はっ！」

そう言つて歩き出した少女に続き、ザイユもその場を離れる。

暫くすると、ドンドルマの大老殿のようなところに到着した。奥には流石に人間サイズなもの、玉座があり、先程の少女が座しており、傍らには夏侯淵、夏侯惇の二人が立っている。

(結構偉い人物だったのか……)

人は見かけによらないというが、これはよらなすぎだろう。ザイユは心の中でツッコ

んだ。

「さてザイユとやら、狩猟の許可を得たいということは、それなりに腕に自信があるのかしらっ？」

「まあな」

先も言ったが、ザイユはG級ハンターと呼ばれる、ハンターズギルドが定める最高ランクのハンターであり、その実力は確かなもので疑う余地はない。

「なら、まずはその腕を見せてもらおうかしら」

そう言つて、彼女は夏侯淵へと目配せすると、代わつて夏侯淵が語りだした。

「近頃当家の領内で、旅の商人が襲われ、積荷を奪われるという事件が多発している。被害に遭つた者の話では、いつの間にか濃い霧に包まれ、霧が晴れると積み荷がなくなり、辺りを探してみると、まるで化け物が通つたような痕跡が見つかったらしい」

(……霧？それに化け物だと?)

その言葉に、ザイユは何か引つ掛かりを感じた。ザイユ自身、この街に来る途中の森で霧に包まれ、食糧などを盗まれている。

その際辺りを散策したところ、同じように巨大なモンスターの痕跡を発見したのだ。

「真偽はともかく、我々も部隊を派遣したのだが、成果はあげられず、逆に荷物を盗まれる始末……その際、隊員たちが化け物の姿を見たというが、霧の中であつたため、どこ

まで本当か」

「いや、あれは紛れもなく化け物だ！」

突如夏侯惇が声をあげた。夏侯淵が制止しようとするも、構わず続ける。

「あの時、私は確かに見た……霧の中で蠢く、巨大な化け物の姿を。頭に生えた一本の角、ギョロリと突き出た目玉、背中には大きな翼が生え、その体表は毒々しい紫色をしていた。霧の中に浮き出た奴の眼に睨まれた時、情けない話だが私は体が竦み、斬り付けることはおろか、逃げることもできなかつた。しかし、奴は私を一瞥しただけで、再びその姿を霧の中へと溶け込ませて消えていった……」

夏侯惇が語ったその化け物の特徴に、ザイユは憶えがあつた。かつて、自身も何度も煮え湯を飲まされた、古の龍に属するモンスター……確実とは言えないが、ほぼ間違いないと確信していた。

「しかし、次に相まみえた時は、必ずやこの夏侯惇元讓が討ち取つてみせ——」
「やめておけ」

夏侯惇の口上を遮つたザイユの一言に場は騒然となり、みるみると夏侯惇の顔が怒気を帯びていく。

「貴様、どういう意味だ」

「そのままの意味だ。お前の装備では、死に行くようなものだ。ましてや相手がアレ

ならぬ」

「何だと——っ！」

ザイユの物言いは夏侯惇の逆鱗に触れたようで、彼女の怒りは沸点に達したが、玉座に座っている少女がそれを止めた。

「待ちなさい春蘭。ザイユ、その言い方から察するに、もしかして化け物の正体を知っているのかしら？」

「ああ。推測だが、話を聞くにその化け物とやらは、俺がいた地方で古龍と呼ばれている種のモンスターだ」

「古龍……？」

聞きなれない単語に彼女たちは全員首をかしげるが、ザイユは更に続ける。

「古き龍と書いて古龍。生態系の頂点に君臨し、その力は自然災害そのもの。ある学者は、古龍とは自然の脅威であり、自然の一部であり、自然そのものだと言っている」

「そんな存在が……まるで神ね……」

自分たちの想像を越えた存在がいたことに言葉を失う少女たち。

「今回出たのは、その中でも面倒な能力をもつ古龍だ」

一呼吸を置いて、ザイユはその古龍の名を、彼女たちに告げる。

「霞龍才オナズチ。擬態能力を持ち、その姿を自由自在に消せる、厄介な古龍だ」

霞龍。ザイユのいた地方でも、目撃例が少なく、古龍の中でも研究が進んでない個体である。一説では霧を自在に操るとも、擬態ではなく透明化しているとも言われている。

「だが、オオナズチは古龍種の中でも温厚な性格でな、此方から手を出さない限り襲われることはない」

「だからといって、このまま放置しておくわけにもいかないわ」

少女の言うとおりである。確かに今は旅の商人の積み荷が盗られているだけだが、いつオオナズチが気紛れを起こし、街へと襲撃してくるか分からない。そうなれば、碌な防衛設備のないこの街では一堪りもない。

「しかしお主、その古龍について随分詳しいが、もしかや戦ったことがあるのか？」

不意に夏侯淵が、ザイユに向かってそう尋ねた。夏侯淵自身、訊いててありないと内心では思っている。ザイユの話が本当であれば、それほどの化け物に立ち向かうことなど考えられることではない。

「ああ。撃退しただけだな」

しかしザイユは何の気なしにそう言い放った。

「き、貴様！ デタラメを言うな！」

「待ちなさい春蘭。ザイユ、今言ったことは本当かしら？」

「ああ」

ザイユの言葉に信じられないといった表情の夏侯惇。それもその筈、自惚れでなく、自分の武勇に自信がある自分でさえあの化け物——霞龍を前にしたとき、本能が恐れを抱き、まるで蛇に睨まれた蛙のように身動きが取れなかつたのだ。それなのにこの男、ザイユは過去に霞龍と戦い、あまつさえ撃退したというのだ。彼女からしてみれば、到底信じられることではないのだろう。

「その時はどうやって撃退したか、詳しく教えてもらえらる？」

「そう難しい話ではない。動きをよく観察し、道具を使い、コイツを叩き込む。何度もな」

そう言つてザイユは背中の大剣を指す。確かにそれほどの大剣であれば、叩き込めればダメージを与えることはできるだろう。しかし、それには相応の危険が付きまとう。そのうえ高重量の装備をしていては動きも制限されてしまう。ザイユは簡単に言つたが、それがいかに大変なことか。

「それだけ？他に策はないの？罨を使うとか」

「古龍種に罨は効かない。奴らの知能はモンスターとは思えないほど高いからな、罨を張ればすぐに感づかれる」

バツサリと言う。閃光玉であれば効果はあるのだが、シビレ罨は体質なのか効果がな

く、落とし穴は見破られて回避される。故にハンターはその動きを観察し、隙を見つけて少しずつダメージを与えていくしか方法が無いのである。

その情報に少女がさらに考え込んでいると、ザイユが不意に少女に尋ねた。

「そういえば、条件というのは何だったんだ？……まあ、想像はつくが」

「……ええ。あなたが考えてる通りよ。その古龍とやらを討伐させようと思っていたのだけれど、まさかそれほどの化け物だったなんてね……」

「……そうか」

そう言うときザイユは踵を返し、部屋の入出口へと向かう。少女はどこへ行くのかを問うが、ザイユは何気なく、当然であるかのように言い放つ。

「オオナズチを撃退すればいいんだろう」

「まさか、一人で行くつもりか!？」

「安心しろ、こういうのは慣れてる」

夏侯淵が驚愕しながら訊くものの、ザイユはまたも何の気なしにそう答えた。あの化け物、古龍相手に一人で挑むという自殺行為としか思えない行動に、全員が信じられないと言った表情をする。

「ま、待て!」

「何だ?」

「私も同行する。貴様一人に行かせては、この夏侯惇元讓の名折れ……華琳様、是非とも私に行かせてください！」

少女に向かい頭を下げ懇願する夏侯惇だが、正直に言つて少女は迷つていた。先程のザイユの話が本当なら、ここで夏侯惇に許可を出すということは、彼女を死地へと向かわせることとなる。チラつとザイユに視線を向けるが、彼も首を横に振っている。

「さつきも言つたが、止めておけ。古龍が相手では、俺も守りながら戦う様な余裕はない」

「貴様に守つてもらつてもらうつもりはない！それに、これは私の誇りの問題だ！」

誇り。そう言われては、ザイユも強くは言えない。本来なら、誇りよりも命を大事にしろと言いたいが、ハンターの中にも誇りを大事にする者もいる為、その気持ちは十分に理解していた。

これ以上は言つても無駄と思ひ、ザイユは少女の方を向き、今度は縦に首を振る。

「……分かつたわ。春蘭、ザイユとともに、その古龍とやらを撃退しなさい」

「華琳様……！」

「ただし……どんなに無様でも、必ず生きて帰つてきなさい……いいわね」

「はいっ！この夏侯惇元讓、必ずやご期待に添えてみせます!!」

少女の言葉に、夏侯惇は跪いて応える。少女はザイユに向け、申し訳なさそうな視線

を向けるが、ザイユは気にするなと片手をあげて返す。

「華琳様、私にも同行の許可を。いざという時、姉者を止める者がいなくてはなりませんから」

「秋蘭、流石の私も引き際くらいは弁えて——」

「そうね。お願いできるかしら」

「華琳様っ!？」

夏侯淵も参加することになったが、夏侯惇の時と比べ、ザイユは逆に安心していった。というのも、夏侯惇は熱くなりやすい性格らしく、狩りで大事な引き際を見誤いかねん。しかし、冷静な夏侯淵ならその辺を見誤うことはないだろうと考えた。それに、どうやら夏侯淵の得物は弓矢らしく、その辺もザイユにとっては後方からの援護があるという点で安心できる要因となった。

「ではザイユ、改めて曹操孟徳が命じるわ。我が領内を荒らす、古龍とやらを撃退しなさい。見事成し遂げた暁には、領内での狩猟を許可するわ」

「……了解した。安心しろ、依頼はこなす」

「……頼むわね」

その言葉には、ただ古龍の撃退ではなく、同行する二人を無事に返して欲しいという願いも込められていることを、ザイユは感じていた。

G級へと上り詰めたハンターが、流れ着いた土地で最初に挑むは霧の如く姿を消す古龍、霞龍オオナズチ。決してたやすい相手ではなく、油断は即時に死を招く。

同行するは魏の”猛将”夏侯惇と”知将”夏侯淵。優れた武を誇る二人だが、果たして古の龍に通じるのか。

これは、外史と呼ばれる世界に迷い込んだ一人の狩人と、乱世を生きる少女たちとの出会い、そして……因縁の物語である。

しじまの向こう

鬱蒼とした森の中、草木をかき分けながら進む人影が三人。女性二人と、男性一人の一党だ。女性二人は軽装だが、先頭を歩く男性は周囲から浮くような色合いの鎧に身を包み、辺りを見回し、時折採取をしながら進んでいった。

「先程から野草やキノコを採っているが、食料は用意してきただろうか？」

その光景を見ていた、一振りの刀を手にした女性——夏侯惇は、彼に向かってそう尋ねた。

「いや、街で回復薬などを調達できなかったからな。同種かは分からないが、調合用の素材を確保している」

「薬であれば、多少は用意しているが」

そう言つて弓を携えた女性——夏侯淵は、自身の腰に下げている巾着袋を指した。

「それでは不十分だ。戦闘中、オオナズチに盗まれる可能性がある。過剰なくらいでちよūdい」

「成程。しかし、そのような野草やキノコが、本当に薬になるのか？」

「試してみないと分からないが、俺の地方のと同種だった場合、このようになる」

先頭を歩いていた男——ザイユは腰のポーチを探つて筒を取り出すと、蓋を取つて中身を彼女たちに見せる。

「この液体が薬なのか？」

「ああ。効果はいま一つだが、即効性が高い。数は少ないが、二人にも渡しておこう」

ザイユはポーチから更に回復薬の入った筒を二つ取り出し、二人に手渡した。しかし、知らぬ薬をいきなり信用はできないのだろう、夏侯惇は受け取りを渋っていたが、夏侯淵に説得されたことで渋々ながらも受け取つた。

（しかし、こんな街の近くの森にオオナズチが出没するとはな）

通常、古龍種は滅多に人前に姿を現すことはない。特にオオナズチは古龍種の中でも比較的温厚な古龍であるため、このような人里近くで目撃されたことはザイユの記憶では一度もない。いくら温厚とはいえ、いつ気紛れを起こして街へと襲撃して来るか分からない。

その為、今回街の太守である少女——曹操から話を聞いた時、一も二もなくその依頼を受けたのだ。本来であれば、古龍に対して確かな実力者複数人で挑むべきであるものの、ザイユもG級ハンターの一人、大人数での撃退戦は勿論、単身での戦闘も何度かこなしている。討ち倒したことこそないが、古龍種相手の立ち回り方ならば心得ている。

今回のオオナズチの撃退を請け負ってすぐ、ザイユは道具の調達などの準備に取り掛かったが、ここで一つ問題が生じた。街の道具屋や薬屋では、ザイユの求めるアイテムが置いてなかったのだ。傷薬や解毒に使える薬草、漢方薬等はあるにはあったのだが、ザイユの知っている物と違うこともあり、仕方なくフィールドで素材を調達することになったという訳だ。しかしフィールドに出ても、似ているのは見つかったも同じ物は未だに見つけられずにいた。回復薬などはアイテムポーチの中にある程度は入っているものの数が少なく、このままでは心許ない。

少なくとも、解毒草だけでも採取したいところだが、中々上手くいかないもので、それらしき野草やキノコが数種見つけただけに終わった。

（一応、調合用のアオキノコが僅かだが残ってはいるが……仕方ない。ぶつつけ本番を試すしかないか）

ザイユとて、道具を使わずに古龍と戦える程凄まじい実力を持っているわけではない。古龍の動きをよく観察し、適切なタイミングでアイテムを使い、隙を見て斬撃を叩き込む。そうやって彼は戦ってきた。故にこの状況は芳しくないと、内心で不安を感じていながらも、依頼の目的である古龍、オオナズチを探して歩を進めていた。

「……………」

ふと、何かに気づいたのか、ザイユは足を止め、後続の二人を手で制した。

「どうした？」

「足跡だ。形状からして、オオナズチのものではないが……」

ザイユが見つけたのは、何かしらの生物の足跡。地面への沈み具合やその形はオオナズチとは別の生物のもの。それだけであれば何も珍しくはないのだが、ザイユが感じた不自然なものは、視線を向けた先にあった。

「……途中で途切れているな」

「土質が固くて残らなかったのか、或いは……」

「オオナズチに襲われたか、だ」

この状況に、三人は周囲の警戒を強める。ザイユは感覚を済ませながら、途切れている足跡、さらに周囲の植物を調べた。

「……夏侯淵、一つ確認したいんだが」

「……何だ」

「確か、襲われた時は濃い霧が発生したと言っていたな」

「ああ。それがどうかしたか？」

「……葉が僅かだが湿っている。まだ近くにいるかもしれない」

その言葉に夏侯惇と夏侯淵の二人は身を強張らせた。

感覚を研ぎ澄ませて警戒しているのに、姿はおろか、気配すらも感じ取れない。そん

な存在が、自分たちの近くにいるかもしれないのだ、無理もない。

「二度ここから離れよう。まだ道具も情報も十分ではない」

「だが、逆に考えればこれは好機だ。奴は自在に姿を消す……であれば、ここで奴を見つけたら叩くべきだ！」

以前の雪辱を晴らさんと、夏侯惇はザイユの提案に反論した。確かに、オオナズチは霞龍の異名通り、その姿を目撃すること事態が難しい。夏侯惇の言うことも一理ある。しかし、それは事前準備が十分なされた場合であり、今の準備不足の状態では、たとえば見つけたとして、まともに戦うことはできない。

「姉者、ここはザイユ殿の言う通りにした方がいい。それにもうすぐ日も落ちる、一度夜営し、万全の状態で挑んだ方が確実というものだ」

「むう……確かにそうだな。惜しいが、ここは一旦退こう」

夏侯淵に説得され、夏侯惇も元来た道に戻る為に踵を返す。ザイユは殿を務め、来たときと同じように野草やキノコを採取しながら二人の後ろを歩いていった。

◇

すつかり日も落ちた頃、森の外で夜営についた三人は、消耗した体力を回復させるために食事をとっていた。

夏侯淵と夏侯惇は用意した携行食を食べていたが、ザイユがポーチからこんがり肉を

取り出し食べ始めると、夏侯惇から妙な視線を感じ、仕方なくザイユはポーチから生肉と肉焼きセツトを取り出し、焼き立てのこんがり肉を夏侯惇へと渡した。

何やら言い訳のようなことを言いながら受け取った夏侯惇は、まるでハンターさながらの食いつぷりでこんがり肉を平らげた。夏侯淵にも渡したが、こちらは対照的に上品さすら感じられたというのに、姉妹でこうも違うのか。ザイユはそう思わずにはいられなかった。

食後は各自、翌日に向けて己の得物の手入れや、道具の確認などをして過ごし、ザイユは採取したアイテムの効果などを調べていた。もしこれがザイユの知っている物と同じであれば、オオナズチとの戦いが大分楽になる。しかし……。

「……ダメか」

悲しいかな、採取した野草とキノコを調査しても回復薬や解毒薬にはならず、薬効があつたとしても僅かであつたりと、求める結果にはならなかった。

(なら、手持ちの素材を栽培などして増やすしかないが……)

街の道具屋やフィールドで手に入らない以上、今ある手持ちを増やすしかない。しかし、ポーチの中身をチェックした後、ザイユは重い溜め息を漏らした。

(薬草、アオキノコが3。ハチミツは街で見かけたが、金がない。光蟲は閃光玉を分解すればいいが、残りの閃光玉は3つ。雄玉が2に雌玉が1……繁殖のことを考えれば、1

つしか使えない、か……厳しい戦いになりそうだ)

ただでさえアイテムが足りないのに、栽培や繁殖用に残さねばならない為、使える個数は更に限られる。

本来古龍と戦うには入念な準備が必要であり、それがないまま狩りに赴くことは無謀としか言えない。

(だが……それでもやるしかない)

そう、かなり厳しい状況だが、それでもやるしかないのだ。もしかしたら、増えるのを待っている間にオオナズチが街へと襲撃してきたら、出なくていい被害が出てしまう。それはなんとしても避けなくてはならない。

ふと、付いて来た二人に視線を向ける。古龍の脅威への認識や、実力はともかくとして、二人の街を守ろうとする気持ちはザイユへと十分に伝わっていた。

曹操から頼まれた通り、二人を無事に帰還させるためにも、経験のある自分が体を張らなくてはならない。

ザイユは気を引き締め、いざというときにすぐ使えるよう、ポーチ内のアイテムの位置を調整し、己の得物である大剣を砥石で研いで整備した。

◇ その後は交代で見張りをしながら眠りにつき、明日の狩りへと備えた。

日が昇り、朝を迎えた三人は早速昨日の場所へ行き、その周辺を探索した。すると明らかに気色の違う痕跡が見つかり、念のためにザイユが調べた結果、オオナズチの痕跡であると確定した。それは森の奥へと続いており、一行はとりあえずその痕跡をたどり、森の奥へと進んでいった。

「ところでザイユ殿、あの化け物……オオナズチといったか？姿を消す奴相手に、どのように戦うのだ？」

「そうだな……奴は確かに姿を消せるが、それも絶対なものではない」

夏侯淵の問いに、ザイユは己の知るオオナズチの情報を答えていく。

「煙を焚いて姿を浮かび上がらせる、大きな音を立てて驚かせるなど方法はあるが、一番は角と尻尾を斬り落とすことだ。そうすれば奴は姿を消せなくなる」

「何故だ？」

「詳しくは知らん。研究者は、古龍種はその二つの器官で能力を制御していると言っているがな」

「成程な……」

「だが、あ奴の角や尾など、斬り落とせるのか？」

ザイユの言ったことに夏侯惇は疑問を抱き訪ねる。確かに、古龍種の部位を破壊することは難易度が高いが、ザイユは何の気無しにさらに答える。

「問題ない。斬り続ければいつか落とせる」

「簡単に言ってくれるな……」

その後も二人の問いにザイユが答えながら、三人は探索を続ける。

暫くすると、森の中の開けた場所に到達した。

「……ダメだな。痕跡が潰れている、これでは詳しいことは分からん」

「手詰まりか……」

録な手懸かりもなく、どうやって探すべきか思案する。とりあえず、手分けしてこの場所を調べることにした三人だが、あまり良い成果はあげられなかった。

「ザイユ殿、何か見つかったか?！」

「いや……」

「姉者、そちらは?！」

「今調べている!」

そう、何も見つからなかったのだ。これだけ開けた場所なのに、争った痕跡も、食事の跡も、何もなかった。

しかし、その事が逆にザイユを不信がらせた。

(何だ、嫌な予感がする……)

「あつ!？」

ザイユが不信感を持ったと同時に、離れたところを調査していた夏侯惇が声をあげた。

「どうした姉者？」

「い、いや、何かにぶつかつ、て……？」

そうは言うが、今現在夏侯惇の前どころか周囲には何の障害物もない。

「？何もないぞ」

「い、いや確かに何かが……」

しかしいくら見ても何もない。夏侯惇は周囲に視線を向けるも、やはり何もない。

その時、ザイユと夏侯淵は目撃した。夏侯惇が最初に言つてた方向、夏侯惇のすぐ近くの空間が一瞬だが歪んだのを。

「——つ!?そこから離れろ!!」

ザイユが叫んだと同時に、それは姿を現した。

「——なっ……!!?」

何時からいたのか。いつの間にこんな近くまで接近したのか。いや違う……それは、ずっとそこにいたのだ。

毒々しい紫色の外皮や鱗で全身を覆い、頭部には突き出たような一本角、背中には一對の翼を生やし、その巨体を強靱な四肢で支えている——霞龍オオナズチは、三人を

気にも留めず、最初から只そこに佇んでいただけだ。

ギョロりと、オオナズチの眼が夏侯惇を捉えた。その時夏侯惇は、まるで金縛りにあつたように、身動き一つとれなかつた。

夏侯淵も同じだった。動けなかつた夏侯淵は、生きながらへビにのまれるカエルの気持を理解したと思つた！

「カロロロ」

「ひっ——!?!」

「——っ！姉者っ!?!」

オオナズチが動いた。ゆっくりと、緩慢とさえ思える動きでその巨体を夏侯惇の方に向け、前足を上げた。この後に起こることは、想像に難くない。

しかし、夏侯惇は今だ動けなかつた。眼前まで迫つた死の恐怖に、体が竦んでしまつていた。

夏侯淵は距離が離れていたこともあり、何とか気を戻したものの、時既に遅し。今から弓に矢を番え射つたとしても、その矢が届く前に上げられた前足が振り下ろされ、夏侯惇を物言わぬ肉片へと変えることだろう。

だからといって動かないわけにはいかない。

(頼む、間に合つてくれっ！)

流れるように矢を取り出して弓を構え、弦を引き絞る。当たらなくてもいい、少しでも注意をそらせれば。しかし、流石の洗練された動きであったものの、それでも時間が僅かだが足りない。

無情かな、夏侯淵が矢を放つより一瞬早く、オオナズチの前肢が振り下ろされた。

「姉者——!!?」

夏侯淵は叫んだ。しかし、それでオオナズチが動きを止めるわけがなく、数瞬の後振り下ろされた前肢は夏侯惇を直撃するだろう。

万事休す……かに思われた。

「フンッ!」

「うぐっ!?!」

夏侯淵が弓を構えるより前、オオナズチが前肢を上げるより前に動いた者がいた。

「ザイユ殿っ!?!」

オオナズチが姿を現し、その眼が夏侯惇を捉えた時、危険を察知したザイユはいち早く夏侯惇の元へと駆け出し、そして今、夏侯惇を抱き抱えるようにして強引にオオナズチの前から助け出した。勢い余って地面を転がったが、最悪の事態だけは免れた。

「大丈夫か!?!」

「あ、ああ……」

「ならいい」

返事を聞いてすぐ、ザイユは身を翻してオオナズチに向かい合う。オオナズチは再び姿を消すこともなく、只観察でもするかのようには視線だけを向けていた。

「姉者無事かつ!?!」

急いで駆け寄ってきた夏侯淵が息せき切らしながらも姉の身を案ずる。妹の姿を見たことで落ち着いたのか、夏侯惇の緊張が少し和らいだようだ。

「し、秋蘭……ああ、私としたことが……」

「一度下がり、態勢を立て直そう。ザイユ殿!」

「いや、俺は残ろう。奴を留めておかねばならないからな」

二人の方を振り返らずにそう言ったザイユの意識は、何をされても反応できるようなオオナズチに向けられている。オオナズチもザイユの纏う雰囲気を感じ取ったのか、唸るような声をあげて威嚇している。

ザイユは背負った大剣の柄に手を掛け、一気に駆け出した。

「ザイユ殿つ!?!」

夏侯淵の制止する声も聞かず、ザイユはオオナズチに肉薄する。迎撃のため、再びオオナズチが前肢を振り下ろすのと、ザイユが背負った大剣を振り抜いたのはほぼ同時。

激しく衝突する音が周囲へと響く。

古龍とハンター……狩るか狩られるかの戦いが、始まる。

霞龍

突如出現したオオナズチにより、態勢を崩した夏侯惇に肩を借しながら、夏侯淵はオオナズチから距離を離すため森の中を進んでいた。

「ここまで来れば、一先ず安心だろう」

「——秋蘭、離してくれ……一人で歩ける」

それは、普段の彼女の性格からは想像もつかないほど弱々しい声であった。

「そ、そうか。私は先にザイユ殿の支援に戻るが、姉者は無理せず、暫し休んでいてくれ」
そう言つて夏侯淵は来た道に戻つていった。こうしている間にも、ザイユは一人オオナズチと対峙しているのだ。戦力になるかどうか分からないが、一人より二人の方が幾分戦いやすい筈である。

「……秋蘭、私は……」

夏侯惇は近くの木に寄り掛かると力無げに座り込み、夏侯淵が戦いに戻つて行くのを、虚ろな眼で見つめていた。

◇

「フンッ!!」

渾身の力を込めて、大剣を振るう。後肢に命中したそれは、ガインツと音をたて、その表皮にめり込みはしたものの、切り裂くまでとはいかない。

「ギャアオツ！」

「くっ!？」

煩わしそうにオオナズチが前肢を振るうが、ザイユは転がるようにして避け、続けて横殴り気味に大剣を叩き込む。が、やはり致命的なダメージにはならず、オオナズチはその幅広の尾をザイユ目掛け叩き付ける。飛び込むようにして回避するも、その隙にオオナズチにバツクジャンプをされ距離をとられてしまう。

「シユアツ！」

倒れたザイユ目掛け、オオナズチはその舌をムチのようにしならせて叩き付ける。

「うおっ!？」

地面を転がって躲しながら立ち上がるも、続いて横風ぎに振るわれた舌は回避が間に合わず、大剣の腹を盾にして防ぐが、見た目以上にその威力は強く、大きく後退させられてしまう。

しかし、大きく距離が空いたことで、今度は逆にザイユの方に余裕ができ、その隙にザイユはポーチの中身を確認すると、ホツと溜め息をつく。

(危なかった……余分に焼いていてよかった)

戻ったオオナズチの舌先を見ると、こんがり肉がくつついており、オオナズチはそれを容易く飲み込む。

オオナズチは舌攻撃の際、アイテムを盗む習性がある。特に食料を盗む傾向があるため、ザイユは対策として昨晚肉を焼いた際に、多めに焼いておいたのだ。

ザイユは納刀し、オオナズチの側面に回り込むように駆け出す。しかしオオナズチは、その鎌首をもたげるとザイユ目掛けガス状のブレスを吐き出す。

「チイツ!」

地面を転がって躲すが、起き上がった瞬間オオナズチが地面を這うようにして、その巨体に似合わぬスピードで突進してきた。

「ぬおっ!」

咄嗟に大剣の腹で受けるものの、またも大きく撥ね飛ばされてしまう。

ザイユは素早く大剣を再び納刀して接近するが、次の瞬間オオナズチはその姿を消してしまった。

すぐさま抜刀して切りかかるが、手応えはなく、既にそこにオオナズチはいない。

「厄介な……」

周囲の気配を探るが、元々オオナズチの気配は察知しづらい上、森のざわめきや風の音に邪魔をされ、詳しい位置が分からない。足跡を辿ろうにも、この場所の土は踏み固

められており、それも難しい。

「何処だ……?」

大剣を構えたまま周囲を警戒するザイユ。その背後の空間が揺らめき、オオナズチが姿を現した。しかし、ザイユはまだそのことに気づいていない。悠々とオオナズチはザイユへと狙いを定め、その舌を伸ばした。

しかしその瞬間！オオナズチの眼前を一本の矢が通過し、それに驚いたオオナズチは舌を引つ込め、呻き声をあげながら僅かに後退した。

「ザイユ殿っ！無事かつ!」

「夏侯淵か、助かった」

ザイユは夏侯淵の方を振り向かず礼を言い、すぐさまオオナズチに向き直る。だがオオナズチは、視線を体ごと矢が来た方向——夏侯淵に向けるとまたも姿を消す。

「フンッ!!」

しかし姿を消した瞬間、接近したザイユが振るった大剣が、オオナズチの体を打つ。だがやはり固い皮に阻まれ弾かれる。

それを意に介さず、オオナズチは、一瞬だけ姿を現すと夏侯淵に向けて口から、緑色の液体を吐き出した。

「くっ!」

距離が開いていたため難なく回避するも、着弾した液体は周囲へと跳ね、その僅かな飛沫まではさしもの夏侯淵も避けきれずに当たってしまった。

「な、何——?!」

「気を付けろ！喰らうと防具を溶かされる、その軽装では一溜まりもないぞー！」

事実、飛沫が当たった装束や胸当てなどの防具は若干であるが溶けており、その下の地肌があらわになる。幸いにも肌までは達していないようではあるが、これでは只でさえ低い防御力がさらに下がってしまい、下手したら掠っただけでも命取りになりかねない。

「くっ……厄介なっ！」

次にオオナズチは夏侯淵へ向かい、その巨体を突進させ、迎撃のため夏侯淵は矢を放つが、その硬い表皮に弾かれてしまう。更に意外にも俊敏なオオナズチの動きに危うく轢かれそうになり、飛び込むようにしてギリギリで回避する。

「どおらあつー！」

追走したザイユが後肢に向かって大剣を振り下ろす。比較的皮の薄いところに当たり、食い込んだ刃は後肢の皮を破り、肉を裂いて鮮血が吹き出す。

が、しかしそれだけでは怯みもせず、オオナズチは前足ごと上体を起き上がらせる。その動作を見たザイユは夏侯淵へ向かって叫んだ。

「下がれっ!」

「っ!」

直後オオナズチはその翼をはばたかせ、空中へと飛び上がると同時に周囲へと紫の色味がかった煙を噴射した。

「吸うなっ、毒ガスだ!」

オオナズチが出す毒は特殊な神経毒であり、吸い込んだ相手の五感を鈍らせる作用がある。寸前に夏侯淵は飛び退いて回避し、ザイユは大剣を盾にして防いだため無事であるが、もし吸い込めばその毒が二人の身体を蝕み、さらに厳しい戦いとなっただろう。

オオナズチは着地すると同時に姿を消し、夏侯淵が矢を放ち、ザイユが斬りかかるもすでにそこから動いており、見失ってしまう。

「くっ!?! いったい何処に……!」

そう呟いた夏侯淵の後ろ、一瞬空間が歪み前足を振り上げたオオナズチが出現、夏侯淵へと振り下ろすが間一髪割り込んだザイユが大剣で受け止める。

その後ろから夏侯淵がオオナズチの眼球目掛け矢を放つ。見上げるほどの巨体とはいえ、小さく、自在に動く眼球にあてるのは至難の技だが、そこは流石の腕前、放たれた矢は吸い込まれるようにオオナズチの右眼球に飛んでいく。

その矢はオオナズチが身を振ったことで簡単に外てしまうが、夏侯淵は二射、三射と

続けて矢を放つ。

流石に堪らないと感じたのか、オオナズチは後ろに大きく跳躍し、二人から距離をとる。

「すまない、当てられなかった」

「いや、いい腕だ。引き続き援護を頼む」

「ああ、任せろ！」

そのやり取りの後、再びザイユが駆け出した瞬間、オオナズチがまたもやブレスを放出した。

「また毒か?!」

「いや、これは……」

オオナズチが出したのは毒ではない。自身の擬態能力を向上させるため、体内の水分で作り出した、霧のブレスである。放出された霧はあつという間に広がり、ここら一帯を完全に覆ってしまった。

「しまった——!?!」

「これでは、オオナズチの位置が分からん……」

完全に消えてしまったオオナズチ。オオナズチが自ら霧を放出するのは、食事のため労せず獲物を取る時。そして、効率的に敵を排除するため。それは、まるで人間が虫を

払うのと同じように、ザイユと夏侯淵の二人に対して敵意を見せなかったのが、ここからは“敵”として認識し、本気で排除しに来るということを意味していた。

二人は背中合わせの体勢になり、いつ襲ってくるとも知らないオオナズチを警戒する。

「集中しろ……起こりを見逃すな」

「分かっているさ……ザイユ殿、いざという時は、私が囨に」

「夏侯淵」

夏侯淵の提案を遮って、ザイユはさらに続ける。

「背中は任せた。無事に、街へ帰るぞ」

「……ああ、そうだな。ザイユ殿も、しっかりと私の背中を護ってくれよ？」

「当然だ」

顔を合わせぬまま、お互いを信頼する言葉を言いあう二人。しかし危機はすぐ側まで接近していた。

「カロロロ……」

怒りにより、口からガスを漏れ出させたオオナズチのギョロリと動く眼が狙いを定めたのは、果たしてどちらか。

まだ戦いは始まったばかり……。

報いる一撃

「ぐうあつ!？」

「ザイユ殿っ!?くっ、そこかー!」

ザイユが衝撃により飛ばされ、夏侯淵が矢を放つ。射った先には、オオナズチがその特徴的な舌を口内へと戻し、再びその姿を消そうとしていた。寸前に夏侯淵の矢が届くも、角度が悪く弾かれてしまう。

「また消えたか……ザイユ殿、大事ないか?!」

「なんとかな……だが、このままでは時間の問題だ。どうにかしなくては……!」

二人は姿を消したオオナズチに強襲され、それを凌いで反撃、その繰り返しをずっと続けている。しかし、決定打といえるものは与えれず、次第に消耗していった。

「尾を切断できれば……!」

龍属性の武器がないため、角の破壊はできない。透明化を何とかするためには尻尾を狙うしかないのだ。

「だが、その隙すらも見せてくれんぞ……!」

「音爆弾でもあれば……くそっ!」

無い物ねだりをしてもし方がない。今ある物で何とかするしかないのだが、そもそも所持しているアイテムの総数自体が初めから少ないのだ。

だが、厳しい戦いになることはザイユも覚悟の上。しかしそれでも、アイテムをねだらずにはいられない。これが他種のモンスターであれば何とかできた。ザイユにはそれが可能な技量と経験がある。しかし今対峙しているのは古龍。どれだけ技量があり、どれだけ経験を積もうとも、半端な準備では立ち向かうこと自体が考えられない。

だがそれでも、ザイユは一步も退かない。背負った大剣の柄を握って駆け出し、その勢いも乗せて一気に抜刀、目の前の空間を切り裂く。

一見何もない空間だが、ザイユが完全に振り抜く前に、途中で衝突した音をたて大剣が止まる。するとその衝撃に怯んだのか、オオナズチが痛みに苦しむ鳴き声をあげながらその姿を現した。

走り出す前、一瞬この空間が歪んだのを、ザイユは見逃さなかったのだ。

「ウオオオオツ!!」

そのまま二撃、三撃と大剣を叩き付ける。硬い表皮に阻まれるものの、着実にダメージは蓄積している。

「ギャアツ！」

振り払うように前肢を叩き付ける。ザイユはそれを転がって躲すが、連続して振り下

ろされた反対の肢は避けれず、大剣を盾にして防ぐ。

「うぐつ!？」

ビキビキと、筋繊維の軋む音が、ザイユの体を駆け抜ける。直撃は防げても、ダメージを無効に出来るわけではない。殺しきれなかった衝撃が、ザイユにダメージを与えていく。

「はあああつ!!」

だがザイユは一人ではない。オオナズチの側面方向、ザイユから見て右手の方向から夏侯淵が矢を放ち援護する。飛んできた矢を躲すため身を振るが、その隙にザイユは脱出。オオナズチの側面に回り後肢を攻める。

夏侯淵が放つ矢は対人戦しか想定していないため、モンスター、それも古龍を相手にするには威力が不十分だ。しかし、飛んでいった矢はそのほとんどが表皮ではなく、オオナズチの顔面、ギョロリと飛び出た眼球の近くに命中している。確かにオオナズチの身体は強靱な表皮で守られてはいるが、一部の部位はその限りではない、つまりは弱点が存在する。特に眼球に食らえば、幾らオオナズチといえども一溜まりもない。

夏侯淵自身、自分の矢が効かないことぐらい、とうに理解している。しかし、だからといって彼女は目の脅威に背を向けるつもりはない。主の期待に応えるため、街を、民を護るためにも……そして何より、武人たる己の誇りのためにも、前を向き渾身の力

で矢を放ち続ける。元々の力量の高さもあるが、何より一瞬も気の抜けないこの状況が、夏侯淵の集中力を限界突破させており、それによりの小さいオオナズチの眼球付近に連続して狙いをつけるという離れ技を見せている。

「クアアツ!!」

「避けるおっ!!」

「っ!?!」

しかし、当然というべきか、夏侯淵の矢を煩わしく思ったのか、オオナズチは夏侯淵へ向けて舌を伸ばし振るう。

飛び退くように回避するが、着地の瞬間、身軽な夏侯淵といえども僅かに動きが止まる。そこを狙われた。

「がはっ!?!」

「夏侯淵っ!?!」

驚異の跳躍力で飛び掛かったオオナズチに轢かれ、夏侯淵の身体が宙を舞う。

地面を大きく転がり、木にぶつかることで漸く止まったが当然、その大質量による衝撃は凄まじく、すぐには立ち上がれない程のダメージを負ってしまった。

「あぐう……骨、が……」

「回復薬を飲め、早く!!」

夏侯淵に追撃させないよう、ザイユがオオナズチに斬りかかりながら叫ぶ。

その声を聞いて夏侯淵は腰の袋から昨日ザイユからもらった回復薬を取り出し、中身を飲み干す。

すると完全ではないが、痛みが引いていき、動けるくらいには回復した。

「うぐっ、はあ、はあ……」

「無理するな、一度退け！」

「いや、大丈夫だ……まだ、弓は引ける！」

軋む身体に渴を入れ、再びオオナズチに向かい渾身の力で弦を引く。

「——っ!? くっ……」

ドロリと、額から流れた血が眼に入り、視界が滲みうまく狙いをつけられなくなってしまう。

「ぐうおおおっ!!」

オオナズチは既に夏侯淵を驚異とみなしてないのか、より一撃の重さのあるザイユを標的に定めている。姿を消し、攪乱してくるオオナズチに大剣を巧みに振るい応戦するも、徐々に押し込まれていく。

「くそっ……一瞬でも、動きが止まってくれば……」

そうなれば、夏侯淵の技量であれば視界が悪い状態でも狙い放つことはできる。しか

しオオナズチはまるで子供が玩具で遊ぶようにザイユをいたぶっている。当然、狙いをつけることもままならず、下手に射ればザイユに当たってしまいかもしれないという、なんとも歯痒い状況だ。ザイユもそれを察して動きを止めようと四肢を狙って斬りつけるが、効果は薄い。

そしてモンスターは、人間の思い通りになつてはくれない。ザイユが大剣を振るつた瞬間、オオナズチは後方に飛び退き、舌を伸ばして横風ぎに振るい、ザイユの身体が跳ねた。

「ザイユ殿っ!？」

悠長に狙いをつけてる時間はない。

命中すればいい、気を引けさえすればいいと、弦から指を離す。

張りつめた弦は勢いよく戻り、発射された矢は風を斬り、空気を引き裂きながら飛んでいく。

その一矢は、手負いになり、極限の状態だったからこそ放てた、非力な人間が自然の化身である古龍に報いる一矢であった。更に後方から吹いてきた風に乗る、矢は更にスピードを増していく。

命中すれば、確実にオオナズチの表皮に突き刺さる。そのような確信さえ抱く程。

「——ああ……」

しかし無情かな。矢が当たる寸前、オオナズチはその両翼を大きく羽ばたかせて宙に浮き、夏侯淵の渾身の矢は外れてしまった。

その光景を見た夏侯淵は、力が抜け落ちたようにその場に崩れ落ちた。やはり先程のダメージが尾を引いているのだろう。

ザイユも体勢を立て直すのが、今までのダメージの蓄積があり、すぐには動けない。

そんな状況で、オオナズチは悠然と歩を進める。その先には、力を使い果たし動けないままの夏侯淵が。

「ま、待て——ぐッ!?!」

ダメージのせいかわ、古傷が開いたのか、動こうとしたザイユの身体に激痛が走る。

「く……そおっ!」

このままでは間に合わない。そう悟ったザイユは腰のポーチに手を伸ばし、中からこぶし大の玉を取り出す。

だがしかし! 振りかぶった瞬間、ピキリ、と筋が断裂するかのような音がザイユの耳を貫き、玉は手から零れ落ちてしまった。

「……んな、時に……!?!」

その間にも、オオナズチは夏侯淵へと接近し、ついには目の前まで到達してしまった。

「あ……ああ……」

「逃げろお——っ夏侯淵っ!!」

しかし、オオナズチの双眸に睨まれた夏侯淵はその身を震わせるだけで動けずいた。

(ああ……死ぬんだな、私は……)

夏侯淵は、いともすんなりそれを受け入れた。恐怖はなかった、痛みもなかった。

だが後悔はあった。敬愛する主の、生きて帰ってこいという命を守れなかったこと。そして、一矢も報いることなく、この怪物、オオナズチに殺されること。その二つが、彼女の心残りであった。

しかし、既に身体は限界を迎え、彼女の意思に反して身じろぎすらとつてくれない。

オオナズチはそんな彼女の前で前肢をゆっくりと上げていく。

「やめろおおおおおっつっつ!!!!」

ザイユの叫びも虚しく、オオナズチはその前肢を、夏侯淵目掛け振り下ろした。それは、人が虫を潰すように、猫が目の前を通ったネズミを捕らえるように、自然な動作で振り下ろされた。

——その時、予想外の事が起こった。

「うおおおああああああああつっつっつっつっつ!!!」

突然響いた怒声と共に、オオナズチへと何かが飛び付き、それによりオオナズチは体

勢を崩し、振り下ろした前肢は夏侯淵から大きく離れたところに叩き付けられた。

「い、一体何が——?!」

オオナズチは自身に取り付いた存在を振り払おうと、その姿を明滅させながら暴れまわっている。

「あ、あれは——!」

夏侯淵は見覚えがあつた。いや、見覚えしかなかった。無謀にもオオナズチに飛び付いた、その人物に。

「あいつは……」

ザイユも同じだった。その人物に見覚えがあつた。確かに出会ってから日は浅く、戦鬪に集中していたため抜け落ちていたが、忘れてはいない。

「あ——」

◇

夏侯淵と別れてから、その場から逃げることもせず、さりとて戦いに戻ることもしせず、夏侯惇は膝を抱えて座り込んでいた。

（私は、何をしているのだ……華琳様に誓ったのに、この様とは……）

夏侯惇は己の現状を恥じた。主の前で、あの化け物を討ち取ると宣言しておいて、今の自分の姿はその真逆。だがそれも仕方ない。彼女の誇りと矜持は、あの瞬間に粉々に

碎けてしまったのだ。

（あの化け物の眼を見たとき、分かってしまった……アレは私とは、人とは生物としての格が違う、違いすぎる……）

夏侯惇はその時の事を鮮明に記憶している。夏侯惇を見るオオナズチの眼には、まるで敵意などはなかった。これが熊であれば、縄張りに侵入してきたと、威嚇なりなんなりして敵意をむき出しにする。しかしオオナズチは、自らの縄張りに入ってきたことなど気にも止めず、只人がちつぽけな虫を見るように、何の感情もない、捕食対象としてすら認識していない、冷たい視線で夏侯惇を見ていた。

夏侯惇は理解してしまった。オオナズチにとって、他の生物など取るに足らない存在であることを。

あの眼を思い出し、夏侯惇はビクリと、恐怖でその身体を震わせた。

（絶対に勝てない……アレは、人が立ち向かっていい存在ではない……い！）

夏侯惇がそう畏怖の念を抱くのも無理はない。ザイユも言っていたが、オオナズチを始め、古龍とは自然の化身、自然の驚異そのものである。そんな存在に戦いを挑む、それが間違いだと思うのは正しい。今ここで逃げたとしても、誰も責めはしないだろう

しかし、彼女には気がかりなことがあった。妹である夏侯淵のことだ。自身をここまですべて連れてきた後、ザイユの元へと戻り、オオナズチとの戦いに赴いた彼女のことが気に

なり、逃げ出さずにこの場所に留まっていた。

(随分と時間が経つが、秋蘭は無事なのだろうか？もしかしたら、もう……)

最悪の事態を想像しそうになったが、首をブンブンと横に振ってその考えを振り払う。夏侯淵の冷静さは、彼女も知っている。故に、危なくなったらすぐに引き返すだろう、と思うことにした。

次に考えたのは、オオナズチとの交戦経験があると語った男、ザイユの事だ。

(あの男に助けられなければ、私の命はあそこで終わっていた。あ奴は、恐ろしくないのか？あの化け物が……)

思い出すのはオオナズチに潰されそうになった瞬間、臆することなく自身を助け出し、そのままオオナズチと対峙したザイユの姿。夏侯惇の安否を聞いた後、一度も振り返ることなく自分と夏侯淵が退避する時間を稼ぐため、オオナズチへと斬りかかっていった。その背中はとてつもなく大きく、頼もしさを夏侯惇に感じさせた。

(戦ったことがある、という言葉は、恐らく真実だったのだろう。なら、後は任せておけば……)

経験者に任せておけばいい。そう思い腰を上げた夏侯惇は、夏侯淵が戻っていったのは逆の方角、森の出口に向かって歩き始める。

(これでいい。もう華琳様の前に顔は出せないが、後の事は秋蘭が——)

そこまで考えてしまいそうになったとき、ズキリ、と夏侯惇の胸が痛んだ。何故、何故が原因で痛んだのか。ザイユのおかげで外傷は一つもない。では何故。任せてしまうという罪悪感か？逃げ出した臆病者という汚名を被ることへの恐怖か？

夏侯惇の胸を痛めたものの正体。それは――。

「……私は、秋蘭を、華琳様を見捨てて、自分一人だけ生き延びようとしていたのか……？」

それは、主である曹操、そして、妹である夏侯淵の事。もしザイユと夏侯淵が敗れた場合、オオナズチはどういう行動をとるか。報復のため、街を襲撃するかもしれない。そうなればどうなるかは、想像に難くない。家屋は破壊され、人々は殺され、街の悉くが蹂躪される。その中にはもちろん、主である曹操も含まれる。

姿を消すオオナズチ相手では、何時、何処から襲撃してくるか予想するのも難しい。下手をすれば、抵抗することもできずに街は滅ぶ。

胸の痛みが増す。ギリリと軋む音がする程歯を噛み締め、爪が食い込むほど拳を握りしめた。

◇　そして、彼女は駆け出した。方角は森の奥に向けて……。

◇　「姉者っ!？」

オオナズチへと飛びかかり、夏侯淵の危機を救ったのは、序盤で戦意喪失したかに思えた、夏侯惇であった。

「ぐううっ!!」

激しく動くオオナズチから振り下ろされまいと、必死にしがみつく。

その姿は先程までとは違う意味で普段の夏侯惇からは想像できない、泥臭く、しかしどこか熱を感じさせる姿だ。

「モンスターに乗った、だど?」

その光景に、ザイユは暫し呆然としていた。それもそのはず、モンスターとは人間にとつて驚異そのもの。特に古龍となればその力はとてつもない。その古龍の上にしがみつき、乗るといふ状況は、ザイユの常識では考えられないことであった。

すぐに気を戻すと、ザイユは夏侯惇に向かって叫ぶ。

「危険だ!すぐに降りろ!!」

だが聞こえてないのか、夏侯惇はオオナズチの首にしがみついたまま離れない。だがこれはチャンスでもある。ザイユは夏侯淵に駆け寄り、彼女を助け起こす。

「無事か、夏侯淵?」

「ああ……まだ力が入らんがな」

ザイユはポーチから回復薬の入った筒を取り出して夏侯淵に飲ませる。

何とか自分の足で立てるまで回復した夏侯淵は、自身を助け、いまだ暴れまわるオオナズチにしがみつくと夏侯惇に視線を向ける。

(別れたときは、心が折れてしまったのかと思ったが……信じていたぞ、姉者)

「しかし、あのようになられては、下手に近づけん」

「私も、今の状態で、姉者に当たらないよう狙いをつける自信はない。かといって姉者が振り落とされるのを待つ訳にも……」

ここままで、いつか夏侯惇は振り落とされ、怒ったオオナズチにいと容易く潰されてしまうだろう。それだけはなんとしても避けたい。しかし、手段がないのも事実。

だが、とうとう夏侯惇は、只しがみついているだけではない。ゆつくりとだが、首から頭に移動している。

(くっ……なんとという力だ……今にも、振り落とされそうだ)

夏侯惇は万力の如く力を込めているが、それでも心許ない。しかも掌から汗が滲んできており、一瞬でも気を緩めれば滑り落ちてしまう。

状況は最悪。しかし夏侯惇はそれでもオオナズチに食らい付いている。

(確かに私は、視線だけでこの化け物に屈した。その時点で私は死んだも同然……だが私は……！)

既に握力は限界に達しており、気力だけで耐えている。

そして頭部に登り詰めたとき、己の獲物を取り出した。

(秋蘭を、華琳様を……やらせてたまるかあっ!!)

逆手に構え、勢いよく剣を下ろす。狙いは一点、硬い表皮に守られていない、生物共通の弱点。

「うううおおおおおっつっつ!!!!」

振り下ろされた剣は真つ直ぐにオオナズチの、その露出した

「ギヤアアオオオオオオオオ—— ツツツ!!!!」

——ギョロリと突き出た、眼球へと突き刺さった。

夏侯惇は更にズブリと深く刺し込んでいく。だが、眼球を潰された激痛によりオオナズチが更に大きく暴れたことで、剣は眼球から抜け、夏侯惇の身体はオオナズチの上から振り落とされた。しかし幸運なことに、夏侯惇の身体は大きく吹き飛ばされたことで、オオナズチとの間に距離ができ、その後の追撃が来ることはなかった。

すぐさまザイユと夏侯淵が駆け寄り、夏侯惇を助け起こす。

「おいつ大丈夫か!!しっかりしろ!!」

「姉者つ!!聞こえていたら返事をしてくれ!!」

「うぐあつかはっ……はあ、はあ……しゅ、うら、ん……か?」

妹の声に反応してか、息も絶え絶えな様子で応える。普段であれば、地面に衝突する

瞬間に難なく受け身はとれていただろう。しかし今回は暴れまわるオオナズチによって地面に振り落とされたのだ。その勢い、衝撃はとてつもない。これがハンターであれば、強固な防具によって護られるが、夏侯惇にはそれが無い。

グイ、とザイユはポーチから取り出した回復薬を夏侯惇の口に流し込む。ダメージを負い消耗しているからなのか、夏侯惇は抵抗せずにそれを飲み込む。そのおかげで、何とか喋れるくらいには回復した。

「まったく無茶をする。オオナズチに飛び乗るなど、何を考えているんだ」

「仕方、無いだろう……秋蘭が襲われてるのを見て、身体が勝手に動いたのだからな……」

「姉者……だが、一歩間違えば姉者が——」

「……誇りも、心も粉々に砕かれた、私の身がどうなろうと構わん。華琳様と、お前を護れるのならな……」

「姉者……」

「奴と対峙してから、無様を晒しっぱなしだったんだ……一度くらい、カツコつけさせてくれ」

夏侯淵も、ザイユも何も言えなかった。ただ、ただ涙を流した。夏侯惇のやったことは、確かに無謀だ。下手をすれば死んでいた。しかし夏侯惇がああしなければ夏侯淵は

死んでいた。結果として、夏侯惇は妹を救ったのだ。我が身を顧みずに……。

未だオオナズチは片目を失ったことで混乱し、三人から離れたところで暴れている。その隙に、夏侯惇のダメージも幾分か回復した。

「姉者、本当に大丈夫なのか？」

「ああ……いや、正直まだ足が震える。だが、もう私は、奴から逃げない！」

「気概はいいな……来るぞ、気を抜くなよ」

三人の視線の先には、混乱から回復したオオナズチが、残った片方の眼で三人の方を睨んでいる。その眼はどこことなく、怒りで染まっているようにも見える。

「行くぞ、死ぬなよ二人とも」

「当然だ！」

「分かっているさー！」

そして、三人は各々行動を開始する。

「ギャアオツ！」

「フツ！」

最初にオオナズチへと肉薄したのはザイユ。振るわれたオオナズチの前肢を転がって回避し、起き上がりざまに大剣を抜刀、オオナズチの胸に叩きつける。

「はあっ!!」

夏侯淵はオオナズチから距離を取ったまま、随時位置を変えながらオオナズチへ向かって矢を射る。その悉くがオオナズチの負傷した眼球に殺到。嫌がったオオナズチはその身を振らせる。

「たああっ!!」

そして夏侯惇は、オオナズチの斜め後方に回り込み、後肢を斬り付けた。再開前に、ザイユから後肢を狙えと指示を受け、その通りにオオナズチの後肢を連続で斬り付ける。

表皮に弾かれると思ったが、その部位は先程までザイユが集中して狙っていた部位であり、その成果その表皮は傷つき、脆くなっていた。故に夏侯惇の剣でもある程度ダメージが通っている。

「避けろっ!」

「っ!!」

直後、オオナズチは毒ガスを噴出して飛び上がる。しかし、離れた所にいたため、予備動作を察知できた夏侯淵の指示のお陰でザイユは大剣で防御し、夏侯惇は飛び退いて回避できた。

空中に浮くオオナズチ目掛け、夏侯淵が矢を放つ。飛んできた矢を嫌がったのか、オオナズチはすぐに着地。その瞬間を狙い、ザイユが着地の瞬間下がった頭部目掛け大剣を振り下ろす。

ゴギンツ……と音をたてて衝突する。ザイユの大剣は、確かに切れ味は悪い。だが、それを補って余りある破壊力を秘めていた。

表皮こそ斬れないものの、強烈な一撃により、オオナズチは大きく仰け反った。

「ふんっ!!」

その隙を逃さず、夏侯惇が後肢を斬りつける。そして、関節部の比較的皮の柔らかい箇所を剣を突き立てた。

しかし、あくまで比較的であって、夏侯惇の剣では突き刺すことはできない。

だがダメージはある。

オオナズチは夏侯惇を排除しようと、その幅広の尻尾を叩き付ける。転がって回避したが、尻尾を叩きつけたことよって発生した風圧によって、夏侯惇は身体を硬直させてしまった。そこにオオナズチが襲いかかる。

「眼を塞げ!!」

ザイユの叫びが聞こえた直後、夏侯惇とオオナズチの間で、眩いばかりの閃光が走った。

閃光玉。光蟲という昆虫を素材にしたその玉は、使用すると視界を真っ白に染め上げるほどの閃光を放ち、モンスターとの視界を奪う。それは古龍であっても例外ではない。

下手をすれば人間の眼をも潰してしまうが、直前のザイユの注意によって眼を覆って

いたため、夏侯惇、夏侯淵の二人は無事であった。

「一体何をしたのだ!? 妖術か!？」

「質問はあとにしろ! 畳み掛けるぞ!!」

閃光玉を食らったオオナズチは、視界を奪われたせいかわりにキョロキョロと見回している。その機を逃すザイユ達ではない。

「はあっ!!」

隙だらけの後肢を夏侯惇が斬りつけ。

「しっ!!」

オオナズチに狙いを定めさせないため、夏侯淵が矢を放ち注意を引き。

「だあありやああああっっ!!」

下がった尻尾に、ザイユが強烈な一撃を連続して叩き込む。

やがて視界が戻ったオオナズチは、危険を感じたためか後方に飛び退いて距離をとった。

「まだあれだけ動けるのか……」

「だが、確実に消耗しているはずだ。正念場だぞ……」

三人が警戒する中、オオナズチは身を屈めて低く唸ったあと、姿を消した。

咄嗟にザイユと夏侯惇はその場から退避する。直後、先程までザイユらがいたところ

に空中で姿を現したオオナズチが飛び込んできた。

更にオオナズチは舌を横風ぎに振るい、ザイユと夏侯惇を近づけさせない。続けて離れた所にいる夏侯淵に舌を伸ばし、叩きつける。

「生憎と、それはもう見切ったぞー！」

だがしかし、紙一重のところまで夏侯淵はスライディングで躲し、舌の下に潜り込み、その体勢のまま弓を引き、伸びたオオナズチの舌に超至近距離から矢を突き刺した！

「ギイアアオツ!!」

予期せぬ攻撃に怯むオオナズチ。その隙を狙い、ザイユ達が動く。

好機を逃すまいと、夏侯惇はオオナズチへ駆ける。しかし、すでにオオナズチは体勢を立て直しつつある。夏侯惇も全速力を出しているが、このままでは間に合わない。

「乗れっ夏侯惇!!」

しかしその時！夏侯惇の進路上でザイユが大剣を構え、夏侯惇に向かって叫ぶ。

「ああっ!!」

ザイユの意図を直感で察した夏侯惇は、そのスピードを緩めることなく、両者の距離が縮まっていく。

タイミングを計ったザイユが、その巨大な大剣を自身の後ろから地面を擦るように、下から上へと振るう。そして夏侯惇も、その大剣が振り切られる前、絶好のタイミング

で大剣の腹に足を掛けた！

「どおりやああああああっっっ!!!」

ザイユは夏侯惇ごと大剣を渾身の力で振り上げ、それに合わせて夏侯惇が大剣の腹を蹴って跳躍。

次の瞬間、夏侯惇の身体は、自身の跳躍の勢いとザイユの強力によつて、高々と打ち上げられた！それと同時に、体勢を立て直したオオナズチが牽制のためか、毒ガスを噴出しながら空中へと浮かぶ。

だがしかし、夏侯惇の身体は既に空中にある！夏侯惇は自身の下方で羽ばたくオオナズチ、その頭部から突き出た一本の角に狙いを定め、落下の勢いに乗せて剣を振るう。

「ちええりやああああああっっっ!!!」

ガキーン。夏侯惇の剣とオオナズチの角が接触した瞬間、甲高い音を立て、その剣は中程から砕け、折れた。しかし、無駄ではなかった！

「ギャルルアアツ！」

まさかの上空からの、勢いを乗せた一撃によりオオナズチはバランスを崩し、地面へと落下した。

夏侯惇は着地の瞬間、今度はしっかりと受け身を取ったが、勢いが乗りすぎたせいかオオナズチと大きく距離が開いてしまう。

「ザイユっ!!」

「ザイユ殿っ!!」

「……ああ」

しかし、オオナズチの落下地点には、既にこの男がいた。

「任せろ」

一言、たった一言で応えたザイユだが、これ程力強い言葉もない。

ザイユはオオナズチの尻尾のすぐ傍で、その大剣を振り被って力を溜めている。ギリギリと、肉体の軋むような音が聞こえるが、それでもザイユは限界まで力を込め、それに呼応するように外殻の刃が開き、マグマの如き三本のラインが力強く輝く。

そして、張り詰めた弦が斬れたように、その力を解放。黒き神の力を宿した大剣が、渾身の力で以ってオオナズチの尻尾へと叩き付けられる。

大剣の刃が、その強固な表皮と接触した。その時!!

「ギルアアアアオオオオツツ!!」

ブチブチブチッ!という千切れる音とともに、オオナズチの尻尾が切断された。その痛みと衝撃に、オオナズチは大きく藻掻き、地面を這う。

「やった……」

「本当に、斬った……」

目の前の光景に呆然とする夏侯惇と夏侯淵。それもその筈、あれだけ強大な力を見せてつけてきた、古龍オオナズチの尻尾が斬れたのだ。人間が自然の驚異に一矢報いたのだ。

だが、それを成し遂げた当人、ザイユははまだ警戒を解かず、オオナズチから視線を外さない。手負いになったことで、より狂暴になる可能性があるのだ。その状況を理解したのか、二人もオオナズチを警戒する。

既にオオナズチは平静を取り戻し、残った片眼で三人を捉える。

「グルルルル……」

低く唸り声をあげ、オオナズチはその身を屈ませると翼をはばたき、跳躍の勢いも合わせて空中へと飛び上がる。

そのままオオナズチは上昇を続け、やがて森の上空に出ると、どこかへと飛んでいった。その方向には彼、彼女らが守ろうとしている陳留の街はない。

「逃げた……?」

「……終わった、のか?」

夏侯惇と夏侯淵がそう呟いた。信じられないのも無理はない。だが、確かに彼女たちは成し遂げた。やり遂げたのだ。

「……ああ。俺達の、勝ちだ」

ザイユがそう彼女たちに言う。数瞬の後、彼女たちは徐々に喜びが込み上げ、歓喜の叫びをあげながら、地面へと倒れ込んだ。

その様子を見て、ザイユは防具の奥で、笑みを浮かべたのだった。

——霞龍オオナズチ、撃退。クエスト成功。

狩りが終われば……

「それでは、我が領内を荒らす化け物、オオナズチを見事撃退した、三人の栄光を称え……乾杯！」

曹操が音頭を取り、全員が酒の入った杯を掲げて、祝宴が始まった。宴の主役は、陳留近隣の森に出没した、雷龍才オオナズチを苦戦の末撃退した、夏侯惇と夏侯淵、そしてザイユの三人。

各人は大いに飲み、騒ぎ、宴を楽しんでいる。特に主役である夏侯惇、夏侯淵の二人は注目の的だ。その中で、ザイユはというと……。

「……ふう」

離れた所に座り、一人静かに酒を飲んでいた。酒の種類はザイユにはよく分からな
い。フラヒヤビールのようなキレや黄金芋酒のような深さはないものの、場の雰囲気
お陰で十分に楽しめる味わいだと感じた。

「賑やかなのは嫌い？」

「……曹操か」

いつの間にか傍に来ていた曹操が問う。

「いや……悪くはない。むしろ懐かしさを感じる」

笑みを浮かべながらそう答えた。今のザイユは頭部防具を外しているため、その表情は曹操にもよく分かる。

「昔はよく、大きな狩りを終えると、仲間と酒を飲んで騒いでいた」

「なら、もつと楽しそうになさい。これは、あなたのための宴でもあるんだから」

それを聞いて、ザイユはフツと笑って、いまだ囲まれている二人へと視線を向ける。

「今回のオオナズチ戦、俺一人では難しかっただろう……二人のおかげだ。俺の力など、微々たるものにすぎん」

「そう、随分謙虚なのね。でも秋蘭からの報告では、あなたがいなければ命を落としていた、と聞いているのだけだ？」

「買ひ被り過ぎだ。俺は只、お前からの依頼をこなしたただけだ」

ザイユはハンターである。依頼を受ければそれを達成するために考え、行動する。地の利を活かし、モンスターの状態を活かす。今回のことも、依頼内容がそれであったからであって、それ以上でもそれ以下でもない。むしろ夏侯淵と夏侯惇に助けられた場面もある。

「だから、よ。あなたは私の依頼通り、オオナズチを撃退し、あの娘達を無事に連れて帰ってきた。十分称賛に値するわ」

「……そうか」

そう短く返し、酒を呷る。正直照れ隠しだ。

ザイユは意外にも、このように依頼主から直接礼を言われることに慣れていない。そもそも、依頼主とのやり取りはすべて村長やギルドが行い、ザイユらハンターはその中から斡旋された依頼を選んで受ける。報酬などもギルドから渡されるため、依頼主と顔を合わせないことの方が多い。

故に、こういう場合どうしたらいいかが分からないのだ。

「……もしかして、照れてる？」

しかし、誤魔化したつもりでも、目の前の少女にはバレバレだったようだ。

「……まあな」

「あら、案外素直ね」

「今更否定したところでどうにもならん」

意外そうな目をしている曹操に、ザイユはあっさりとそう言い放つ。

「仏頂面ばかりしているつまらない男かと思ったら、可愛いところあるのね」

「茶化すな。それより、気掛かりなことがある」

「……もしかして、オオナズチのこと？」

その言葉に、頷いて答える。

「でもアレは、あなた達が撃退したんじゃ」

「ああ、確かに奴は、俺達との戦闘によって傷つき逃げ去った。しかし、古龍に名を連ねるオオナズチが、あの程度で退くとは思えん」

古龍種は絶大な力を持つ。故に撃退するのも生半可なものではない。過去の記録には、ドンドルマの街を襲撃した古龍を撃退するために大勢のハンターが集い、少なくとも犠牲を出して漸く撃退したというものもある。

必ずしもその限りではないが、G級まで上り詰めたザイユの経験と直感が違和感を訴えていた。

「恐らくだが、あのオオナズチは何かと争い、既に消耗していたのだろう。それならあんなに容易く撃退できたのも頷ける」

「……まるでオオナズチと同等か、それ以上の存在がいる様な言い方ね」

「事実、アイツより強いモンスターはいる。まあ、只の憶測だから、あまり気にするな」
酒を煽りながら簡単に言うが、太守という立場にある曹操は気にせずにはいられない。オオナズチでさえとつともないのに、下手をすればそれ以上の驚異が現れるかもしれないのだ。果たしてその時、自分達は街を守れるのか。

しかしその心情を察してか、ザイユは曹操に向け言い放つ。

「またモンスターが現れたら、俺を呼べばいい。確実にとは言えんが、何とかしてやる

「わ」

「……ふふ、頼もしいこと言ってくれるわね」

「俺はハンターだからな。依頼があれば、何であろうと相手するさ」

「モンスターハンターとして当然の事であるが、それを知らぬ曹操にとって、その言葉はこれ以上ないほど頼もしく、大きく聞こえたことだろうか。」

「そうね……その時はまた、お願いするわ」

「そう言つて曹操は、杯を持っている手をザイユの方に伸ばし、ザイユもそれに返す。」

「チン。軽い音を鳴らし、曹操は臣下達の元へ戻つていった。」

「ザイユがまた一人で酒を飲み、料理を食していると、今度は夏侯淵が来て、ザイユの隣に腰かけた。」

「まずは、礼を言わせてくれ、ザイユ殿。お主がいなければ、オオナズチを撃退することはできず、私も姉者も命を落としていただろう」

「……曹操にも言つたが、それは買い被りというものだ。俺は、自分のやれることをやっただけだからな」

「まあ、お主ならそういうと思つていたがな。ならせめて、私の酌を受けてくれ。礼代わりといつては何だがな」

「……頂こう」

そう言つて夏侯淵は酒器を手に持ち、ザイユは自身の杯を夏侯淵の方に差し出す。トクトクと、杯に酒が注がれていく。ザイユはそれを、グイと喉に流し込む。

「いい飲みっぷりだな。さあ、もう一献」

「ああ。……ふう」

「見た目に違わず酒豪なのだな」

「酒がいいからな」

「ふつ、そうか。ところでザイユ殿、宴の席でも武器を着けたままなのは、ハンターとしての習慣か？」

至極当然の疑問だ。先にも言ったが、今のザイユは頭部を除き、防具を外さず大剣もすぐ近くの壁に立て掛けている。あの夏侯惇ですら、今は武器を外しているのに。

「まあ、そうだな。急な依頼にもすぐ出れるようにな」

「成る程。一つ気になっていたのだが、確かお主の鎧は狩った獲物の素材から作ったと言つていたな？」

「ああ。俺に限らず、ハンターの武器は大体がそうだ」

「なら、今回戦利品として持ち帰った、オオナズチの素材でも武器を作れるのか？」

結論を言えば可能である。しかし、この後にされた問いに関して、ザイユは首を横に降るしかない。

何故ならザイユはハンターであつて、加工屋ではないのだ。簡単な調合ならできるが、ボウガンにアタッチメントを付けるのにも加工屋に頼むしかないのに、一から作ることなど出来ない。

「そうか……すまないザイユ殿、変なことを訊いてしまつて」

「……夏侯惇にか？」

「……ああ」

雰囲気から理由を察したザイユがそう尋ねると、夏侯淵は静かに肯定した。

「オオナズチとの戦いで、姉者の七星餓狼は完全に砕けてしまった。どうせ新しく作るなら、と思つたのだが」

「……古龍の素材は、他のものよりも強靱だ。加工は大変だろうが、素材は十分獲得した。まあ、なんとかなるさ」

「……そうだな。何とかしてやるさ」

例え強大な力を持つ古龍とはいえ、攻撃を受ければ傷つき、皮は剥がれ、爪は折れる。今回など、尻尾の切断までやってのけたのだ。加工は難しいだろうし、時間はかかるだろうが、やれないことはない筈だ。

「そういえば、あの大剣はお主の鎧とは素材が違うようだ」

「ああ、あの大剣には俺の村の伝承で、黒き神と呼ばれたモンスター素材を使つてい

る」

「黒き、神？」

聞きなれない言葉に夏侯淵は首をかしげ、ザイユは視線を自身の大剣に向け、更に続ける。

「霸王剣クーネエムカム。災厄の名を持つ、霸竜アカムトルムの素材で作った大剣だ」

農場を整えよう

太陽が照らす中、ザイユは大剣の代わりに農具を手に、一人土を耕していた。当然のことながら、ザイユは農民ではない。しかしポケ村にいた頃は、村の農場を利用していたため、耕し方ぐらいなら理解している。

「ふう……」

一息つき、汗を拭う。普段使っている大剣に比べれば比喩にならないくらい軽いですが、それでもずっとやっていけば疲れはする。それでもその臂力のおかげか、普通よりもハイスピードで耕していた。

(曹操も気前がいいな。まさか屋敷の中を使っていたとは)

今ザイユが耕しているのは、曹操の居城の中にある土地である。薬草や虫の栽培・繁殖用にと、色々あつて借りることになった。

「しかし、まさかあんなことを言われるとはな……」

そう呟いたザイユが思い返すのは、今朝の事。

昨夜の酒もあり、いつもより遅めに起床したザイユは、ポーチからこんがり肉を取り出し、簡単な朝食を済ませ、日課である装備の点検をしていた。そこに夏侯淵が来て、曹

操からザイユを連れてくるよう命を受けたらしく、ザイユは夏侯淵に連れられて、共に通路を歩いていった。

「なあ夏侯淵、曹操からの呼び出しって、いったい何の用なんだ？」

「私も連れて来いと命じられただけで、内容までは聞いてないが、まあ悪い話ではないだろう」

彼女がそう言うなら、多分そうなのだろう。ザイユはそう思うことにして、夏侯淵の後ろについて歩く。もちろん装備はフルで着用している。背中には獲物である大剣を担いでいるが、ザイユの足取りは見た目の重量を感じさせない。が、その重量を受けた床板はミシミシと嫌な悲鳴を上げている。

「ついたぞ。今更だとは思いますが、失礼の無いようにな」

「善処はする」

夏侯淵が扉を空けた先、謁見の間ではオオナズチ戦に向かう前と同じく、曹操が奥に座してザイユが来るのを待っていた。その近くには夏侯惇を始め、全員ではないものの昨夜の宴会で見た顔ぶれが控えている。

「おはよう、ザイユ。昨夜はよく眠れたかしら？」

「ああ。快適すぎて逆に落ち着かなかったがな」

その不遜と感じられる言い方に、曹操の家臣達の一部が顔を顰める。ザイユとしては

褒めたつもりだったのだが。

「秋蘭から聞いたけど、あなたのその大剣、大層な謂れがあるそうね」

「……まあ、あるにはあるが」

「よければ、私にも教えてくれないかしら」

何でそんなのが気になるのか。ザイユは疑問に思ったものの、そういうこともあるだろうとあまり気にしないことにし、自身の大剣、霸王剣クーネエムカムについて話し始めた。

「夏侯淵にも話したが、この大剣はアカムトルムという飛竜の素材で作ったものだ」

「そのアカムトルムというのは？それも古龍の一種なの？」

「いや、アカムトルムは飛竜種で、古龍種ではない」

「だが……」と区切って、ザイユは更に続ける。

「奴の力は古龍にも匹敵する。驚異で言えば、先のオオナズチよりも上だ」

「にわかには信じられないわね」

「事実だ。オオナズチのような能力はないが、奴はその圧倒的な力だけで古龍級生物に分類された。ギルドでは覇竜の通称で呼ばれている」

その言葉に周囲がざわつく。しかし曹操は不適に笑うと、ザイユに向かってこう言い放った。

「霸竜、ね……それで、その圧倒的な力を持つ龍を、あなたは下したって訳ね」
「撃退しただけだ。俺の力では、それが関の山だったからな」

周囲のざわつきが増す。今この場にいる者の中には、実際にオオナズチと対峙していない者が多いが、その驚異は認識していた。それ以上の驚異的な存在を、この男は撃退したと言ったのだ。それに今のザイユの言い方では、それを単独で行ったようにも聞こえる為、尚更だ。

「それは、あなた一人で？」

察したのか、曹操が全員が気になっていたであろう事を尋ねる。ザイユはそれに、肯定で返した。

「ああ……俺しかいなかったからな」

もしこの場に、正しく霸竜の驚異を知る者がいれば、ザイユの心情を察することができたであろう。この場にいる者達は知らないし、気付けない。アカムトルムに一人で立ち向かうというのが、どういう事かを。

「しかし、それ程までに驚異的な力を持つ竜の素材で作った大剣、さぞかし名のある業物なのでしょね」

「コイツが業物？そんな訳がないだろう」

「あら、どうして？」

「コイツは切れ味が極端に悪い。下手をすれば小型モンスターにも弾かれる程にな」

意外なザイユの回答に、曹操は不思議そうな顔をする。そのような大剣なら、なぜ彼は使っているのか。というか、オオナズチの尻尾を斬ったのもその大剣ではなかったのか。

「だが、コイツにはそれを補って余りある破壊力がある。大概のモンスターの鱗や殻であれば、関係なく叩き壊せる」

「成程ね。切れ味よりも、一撃の重さに特化した大剣……その素材となった覇竜も強大な力を持っている。素材元の性質が出るのかしらね？」

「そうかもしれないな」

そう言って、ザイユは自身の大剣、その妖しく光る刀身に視線を向ける。

「コイツの刀身には、アカムトルムの力が宿っているらしい。だからなのか、コイツを携える者は、世に覇を称える運命を歩むと言われている。まあ、本当かどうかは知らんが」

「そう。世に覇を称える、ねえ……」

何やら目を細め、口角を吊り上げた曹操。その表情を見て、ザイユは変な違和感を感じたが、気のせいだろうと断じた。

「ありがとう、大変興味深い話だったわ」

「そうか」

「さて、それでは本題に入るわ……ザイユ」

曹操はその両眼でザイユをしつかりと捉える。鋭い眼光に射抜かれたザイユだが、飛竜種などの大型モンスターやそれこそ古龍種に比べればどうってことなく、全くプレッシャーを感じていないが、それでも目の前の少女が醸し出す王者の風格は感じ取れた。しかし、その曹操が次に言い放った言葉にはさすがのザイユも驚いた。

「この曹孟徳に仕えなさい」

「……」

「あなたほどの剛の者、このまま遊ばせておくのは惜しいわ。それに世に覇を称える大剣、面白いじゃない。是非とも私の為に役立ててもらえないかしら？」

一瞬、言っていることの意味を理解できなかった。それはザイユだけでなく、周りもそうであるようで、大きなざわめきが聞こえる。

何故そう考えたのであろうか。しかし、ザイユが疑問を返す前に、家臣の一人と思われる少女が曹操を問いたです。

「お、お姉様っ!!何を考えているのですかっ!!こんな得体のしれない輩を仕えさせようなどっ」

「栄華。私は今、ザイユと話しているのだけど」

「——っ!?で、ですが……」

二度目は言葉ではなく、視線で制され、少女はとりあえずこの場は引き下がった。

「……それで、ザイユ。あなたの返事は？ 勿論、それ相応の待遇は約束するわ。悪い話ではないと思うけど」

「折角の誘いだが、断らせてもらおう」

空気が変わった。先程までとは打って変わり、驚きと困惑に加え、殺気が混じっている。それらは全て、曹操の誘いを蹴ったザイユに向けられており、ザイユはそれを感じていないのか、それとも感じた上でなのか、変わらず平静を保っていた。

「あら、どうして？ 理由を聞かせて貰えるかしら？」

「仕えろということとは、軍人になれということだろう？ 俺はハンターだ。俺が狩るのはモンスターで、人ではない」

曹操の眼も、心なしか鋭くなっている、気がする。

しかしザイユはそれでも身震いの一つもせず、曹操の眼を見返している。

「それに宴会の時も言ったが、お前は俺を買い被りすぎている。俺の実力じゃ、期待に添えるような働きはできない」

「その時も言ったけど、それは謙遜が過ぎるわよ。確かに私は、あなたの実際の實力がどれ程ものかは知らない。だけどね、それでも人を見る目は確かだと自負しているわ。いかしらずザイユ、謙遜は確かに美德だけれど、それも過ぎれば侮辱になるわ」

「むう……」

曹操の尤もな言い分に流石のザイユも黙るしかない。

「特に、あなたと共に戦った二人に対しては、ね」

「……そうだな、確かにその通りだ。すまなかつたな」

そう言つて素直に頭を下げる。曹操も認める剛力とその厳つい見た目に反して、ザイユは自分に非があるのなら素直に謝罪できる人間なのである。その人柄に夏侯淵などは好感を持ったが、それ以外がどう感じたかは分からない。少なくとも数人は先のやり取りのせいでいい印象は持っていなかったようだが。

「だが、それでもやはり、お前の誘いを受けることはできない。俺はハンターとしての生き方に誇りを持っている、今更その生き方は変えられん」

「そう……残念だけど、仕方ないわね」

いくら評価されようとも、ザイユの気が変わることはない。これは曹操に限らず、誰が相手であろうとザイユはこう回答するだろう。

そもそもザイユにとって、兵士含む軍人というものはギルドを通じて依頼をしてくる存在であり、いままで直接的な接触をしたこともないのである。そんなのになれというのは無理がある。ちなみにドンドルマ等の街を警備しているガーディアン部隊は正確には軍隊ではなく、どちらかと言えば自警団に近い。

「すまないな。まあ、モンスター関連の依頼があれば、また呼んでくれ」

「そうね。その時が来たら、またお願いするわ」

これにてこの話は終わり。色々言いたいことがある面々もいるようだが、とりあえずこの場では大人しくしている。

「時間をとらせたわね。もう下がっていいわ」

「ああ。……………そうだ、忘れていた」

踵を返して下がろうとしたザイユが、何かを思い出したのか再び曹操の方に向き直った。

「何かしら?」

「依頼の報酬をまだ受け取っていないと思つてな」

この発言には流石の曹操や夏侯淵も目を白黒させた。

そりやそうだろう。誘いを断つてから舌の根も乾かぬうちのこの発言、普通だったらふてぶてしいことこの上ないだろう。

まあ、ところ変われば常識も変わる。彼女たちの常識が、ハンターの常識と同じとは限らない。というか違う。

「……………ぶつ、あつはつはつは!まさか、そんなことを今言うなんてね」

その中で曹操は笑った。何故笑っているのか、今しがた誘いを蹴った相手に対して、

遠慮なしに報酬の要求するその姿勢に、曹操は更にザイユへの興味を深めたからだ。古龍と渡り合う力、そして覇を称えると言われる大剣を持ちながら、富や権力、名声に興味がない。と思いきや報酬はしつかりと要求する。一体どういう人間なのだろうか。

だが、その曹操が笑っている理由が分からないザイユは首をかしげるばかり。

「ふふふ。それで、報酬だったわね。何か希望はあるかしら？」

「前にも言ったが、この地域での狩猟の許可が欲しい。それと、農地として使える土地も頼む」

「農地？何に使うの？」

「薬草やキノコの栽培がしたい。あとは蟲の繁殖だな」

先の狩りでは、オオナズチの能力はもちろんだが、アイテム不足にも苦しめられた。秘薬とまではいわないが、回復薬が十二分にあれば少しはましだっただろうと、撃退した今でもザイユはそう思っている。

「成程ね。だったら官舎近くの中庭を使うといいわ。秋蘭、後で案内してあげなさい」

「御意」

「すまん、助かる」

「お礼なんていいわ。あなたはそれだけのことをしたんだもの」

とは言うものの、曹操は内心で笑っていた。何故ならザイユが敷地内の土地を利用し

ている間は、実質手元に置いておけるといふことだ。その間に上手く籠絡すればいいと、曹操は考えていた。もつとも、恐らくほぼ間違ひなく無意味ではあるが。

「他に何か欲しいものはあるかしら？」

「いや、十分だ」

「そう、足りない物があつたら遠慮せず言いなさい。秋蘭、あとはお願いね」

「はい。ではザイユ殿、御案内します」

「ああ。では、失礼する」

そうして話を終えたザイユは、夏侯淵に付いて謁見の間を出た後、一度借りてた部屋に戻つた。葉草やキノコに蟲等、栽培する物を用意してから再び夏侯淵に付いて行つた。夏侯淵の案内に続いて暫く歩いていると、中々に大きな建物の中庭に到着した。

「ほう……」

「空いている所なら、自由に使つて構わない。だが、広さも土質も、農作には向いていないと思うが」

「いや、十分だ。あまり広くても持て余すし、土質はそんなに関係ない。こいつ等は生命力が強いからな、どこでも育つ」

ポーチから葉草等を取り出し、夏侯淵に見せる。見た目は普通の野草だが、それらは様々な成分があり、特定の素材と調合することで色々な薬になる。

「オオナズチとの戦いでは、お主の薬には助けられたが、この草が素材になるのか」
「ああ。これが栽培できるだけでも、狩りが大分楽になる。まあ、まずは耕さないといかんがな」

中庭の土は、固められているという訳ではないが、そのまま植えても上手くはいかないだろう。一度耕してからでなくては植えることはできない。

「農具なら倉庫にあったな。取ってくるから、少し待っていてくれ」

「いや、俺も手伝おう。他にも借りたいものあるからな、手は多い方がいいだろう」

その後、倉庫から農具を取り出し、他にもキノコの繁殖に使う丸太や蟲籠等を持って中庭に戻ったザイユは、仕事があるという夏侯淵を見送り、素材栽培の準備を始めた。

そして土を耕し終えて、今に至る。

「こんなものか……」

耕した畝は三つ、それらに早速植え始める。植えるのは薬草、ネンチャク草、そしてポーチの隅にあった赤色の種。この赤色の種は、これからの狩りで重要になるかもしれない、そんなアイテムだ。もちろん、街では売っているどころか、見かけることすらなかった物であり、ここで増やせれば色々楽になる……筈である。

その後、丸太にキノコを埋め込んだり、即席の蟲籠に光蟲の番を入れたりと、着々と素材アイテムを増やす準備を進めた。流石に暑かったのか、ヘルムを脱ぎ汗を拭う。

脱いだヘルムは地面に突き立てた農具に乗せ、そのまま一息入れる。

「こんなところか。後は数日待てば……」

「何してるつすかー?」

一段落終えて一服しようとしたザイユに、何者かが声をかけた。辺りを見回すものの、人の姿はない。

「こつち、こつちつすー」

「む?」

声のした方向、自身の頭上に目を向けると、近くに生えていた木の上に、見慣れぬ少女が腰かけてザイユを見下ろしていた。

曹操に似た明るい金髪を片側で纏め、身に着けた露出度の高い服装からは活発な印象を受ける。

「おじさん、昨日の宴会にいた人つすよねー?ここで何してるんすかー?」

「ああ。暫くここを農地として借りることになつてな、薬草などを植えていた。あとおじさんではない、俺はまだ32だ」

「えー?三十二は十分おじさんつすよー」

印象に違わぬ身軽さで少女は木の上から飛び降りると、ザイユの傍まで寄ってきた。

「おじさんつて、もしかしてあの化け物を退治した人つすか?」

「だからおじさんじゃ……まあ、いい。化け物とはオオナズチのことか？あれは俺だけの力じゃない、夏侯淵や夏侯惇の助けがあったからやれたんだ」

「でも、春姉え言つてたつすよ？化け物を退治できたのは、全部おじさんのお陰だ、つて。春蘭ねえがこんなこと言うなんて、滅多にないことつす！」

その言葉に面映ゆくなつたのか、ポリポリと頬を搔く。

「……ところで、君は？」

「あたし？あたしは曹仁つす！」

「曹仁か。曹操に似ているが、身内か？」

「そうつす！華琳姉えとは従姉妹つす！」

従姉妹とはいえ、あの曹操の身内とは思えないような活発な性格の曹仁。その後もザイユは、光蟲に興味を持った彼女から繁殖したら一匹欲しいとおねだりされたり、小腹が空いて一緒にこんがり肉を食べたりしながら過ごした。

「うーんつ、お腹いっぱいつす！天気もいいし、何だか眠くなつてきたつす……」

「確かにいい天気だな。俺は借りてた道具を返してくるが、お前は——」

と、そこで曹仁の方を振り返つたザイユは、驚きの光景を目の当たりにした！

「うんしょつと」

振り返つた視線の先で、曹仁は己の服に手をかけ脱ごうとしていた。ただでさえアレ

なのに、これ以上はヤバイ。

「おい待て、何故服を脱ぐ？」

「だって脱いだ方が全身にお日さまが当たるっすよ？」

「だからといって脱ぐな。恥ずかしいとか、思わないのか？」

「？」

口下手ながらも曹仁の脱衣を止めようとするが、全く堪えてない。

もし脱いでいるところを誰かに見られたら、ザイユとしては非常に不味い。特に曹操に見られたら、最悪追い出されるかもしれない。

それにここは全年齢で、R—18ではない。

しかしザイユの説得も虚しく、曹仁は脱ぐのを止めようとしなない。力づくで止めれば、それこそ何を言われるか……。

「姉さん、そこで何をしているの！」

その時、ザイユでも曹仁でもない第三者の声の中庭（兼ザイユの農場）に響き渡った。声のした方に視線を向けると、どことなくしっかり者といった印象の少女が、こちらに近づいてきていた。

「あ、柳琳！」

「やっと見つけたと思ったら……いつも言ってるでしょ！人前で服を脱がないでって」

「どうやらこの少女はザイユにとって味方になりそうだ。

ふうつ、とついザイユは安堵の溜め息を漏らす。

「えー、でもこんないい天気なんすよ、脱いだ方が絶対気持ちいいっすー!」

そう言つてさらに服を脱ごうとする曹仁を少女が必死に抑える。少女の様子からして、曹仁はいつもこんな感じなのだろうか。ザイユはそんなことを考えていた。

しかし、少女がいくら止めようとしても、曹仁は脱ぐのをやめる様子はない。のでザイユは思い付いた策を試すことにした。

「曹仁、いい加減止めないか。じゃないと光蟲が繁殖してもやらんぞ」

「うつ、それは嫌つす……」

「なら少なくとも今は服を着ている。そうすれば、俺も約束を守る」

「うう……わかつたつす……」

漸く服から手を離した曹仁。その様子を見て、そんなに光蟲が欲しかったのか、とザイユはそんな感想を抱いた。

「すみません、姉さんがご迷惑をお掛けして」

「いや、いい。そういえば君は？先程曹仁のことを姉さんと呼んでいたが？」

「申し遅れました。私は曹純、姉さん……曹仁の妹です。お話は聞いておりますわ、ザイユさん」

「曹純と名乗った少女は、曹仁の妹とは思えないほどしつかりしていた。印象としては、なんかこう、ほんわかしているようにザイユは感じた。

「そういうえば、朝のあの場にもいたな。色々迷惑をかけると思うが、よろしく頼む」

「いえ、御迷惑だなんて。こちらこそ、この度は領内を荒らす化け物を退治してくださって、ありがとうございます」

曹仁とは違い、丁寧な物腰の曹純。ザイユは無意識に二人を見比べた。

曹仁が姉で曹純が妹……逆じゃないのか？そう思ってしまった。

「?どうかなさいましたか?」

「ああ、いや……とここで、曹仁に用があるんじゃないのか?探していたみたいだったか」

「あ、そうでした。姉さん!」

その後、曹純が曹仁に説教をした後、曹仁を連れて戻っていった。

暫し呆けていたザイユだったが、農具を返しに行こうとしていたのを思い出し、農場

(仮)を後にした。

さて、この陳留の地では、どんなことがザイユを待ち受けているのだろうか。

陳留の日常くその一く

「ふんッ」

「ゴアッ!？」

振り下ろされた一撃は容易く肉と骨を砕き、一刀のもとにクマを叩き伏せる。

その張本人である男、ザイユは地面まで食い込んだ大剣を引き抜き、背中に納刀する。

「一撃とは……いや、流石だな」

「夏侯淵か」

振り向けば夏侯淵が声をかけながら歩いてきた。今回ザイユは夏侯淵と共に、近隣の農村に出没するクマの討伐にやって来た。

陳留に滞在して数日、ハンター活動の許可はもらえたものの、ザイユは依頼を受けることをできずにいた。この地には依頼を斡旋してくれるギルドは存在せず、直接受けようにも街の人から十分な信用を得ていない状態ではそれも難しいだろうという指摘もあり、暫くは農場をいじり、手持ちの肉で食いつないでいたのだが、それを見かねた夏侯淵が仕事を斡旋してくれた

働かざるもの食うべからず。ハンターの世界でもそれは常識である為、ありがたくそ

の話を受けることにして、今に至る。

「最近この手の問題が増えていてな、手伝ってくれて助かるよ」

「このくらい、大したことはない」

なんでもここ最近、クマやイノシシといった獣が、人里に来て畑などを荒らす、という事件が増えていられるらしく、オオナズチを撃退してから夏侯淵はその対応に追われていた。今回の件もその一つなのだが、ザイユが手伝ったお陰で普段よりも、というより一瞬で片が付いた。

「お前の謙遜は相変わらずだな。私は村の人達に報告をしてくる」

「分かった。俺はコイツを解体している、終わったら教えてくれ」

そうして村の人達のもとに向かった夏侯淵を見送り、ザイユは剥ぎ取りナイフを取り出すと、クマの解体を始める。毛皮を剥ぎ、肉を削ぎ落とし、うまい具合に解体していく。

そのうちに報告を終えた夏侯淵が戻ってきて、彼女の部下達と共に街へと戻る。その際、ザイユは剥ぎ取った肉以外の素材を夏侯淵に預けた。

こう言っただけだが、ザイユにとってクマの素材は特に必要のないものである。毛皮は耐寒性はあるが、強度が足らず、爪や骨も同じ理由で使えない。骨は虫あみにしてもよかったが、光蟲は現在繁殖中であるし、他に必要な虫もない。

ザイユとしては売却したかったのだが、買い取ってくれるところに心当たりもない。そこで夏侯淵がまた助け舟を出してくれた。ザイユが狩った素材を代わりに売却してくれるというのだ。

「すまんな、何から何まで世話になって」

「構わんさ。こちらこそ助かったからな」

なんにせよ、これでこの地方の金が手に入る。金が無ければ装備や薬品どころか、食材も買えない。流石のザイユでも毎日こんがり肉では飽きる。美味いけど。

「……しかし、本当に乗らなくていいのか？」

「ああ。歩いている方が性に合うし、そもそも乗れん」

現在は陳留の街へと帰投する途中であるが、夏侯淵はウマに乗っているのだが、ザイユは歩いて移動している。

元々ザイユは移動にはアプトノスやポポが引く車に乗って移動していたため、騎乗などは経験がない。御者アイルーに任せていたため、手綱を握ることもできない。

まあ一番の理由としては、ウマを見たことないというのと、そもそも装備が重すぎるというものが。

「馬を見たことがないと言ったときは、流石に冗談かと思っただぞ」

「地域が変われば生息しているのも違うさ」

「そういうものか」

「似ているのならいるがな」

「そうなのか？」

ザイユのいたところにも、ウマに似たモンスターは確かにいる。いや、正確に言うとうマもいるらしいのだが、一般的ではないためザイユは知らないだけなのだ。

「ああ。キリンというモンスターがウマに似ている」

「麒麟？春秋や礼記に記されている伝説の？」

「こつちではどうかは知らんが、俺のいた地方ではキリンは“幻獣”と呼ばれ、雷を操るモンスターだ。滅多に目撃されないが、伝説と呼ばれる程ではない」

「いや、雷を操るといっただけでも十分だと思っただが」

「そんなのフルフルだってやってる。それに、天候を操る奴は他にもいるからな、珍しくない」

フルフルが何なのかは分からなかったが、雷という自然現象を操る力を持つ生物が珍しくないという言葉には、流石の夏侯淵も引いた。だが、先日のオオナズチを思い出し、少し納得もした。

◆
その後も他愛もない話をしながら、街へと戻ったのだった。

城内農場にて、ザイユは目の前にある虫籠の中を覗いていた。虫籠の中では光蟲が繁殖に成功したのか数が増えており、それを見たザイユは満足げに頷いた。これにより閃光玉を補充できる目処がついた。

「ほえ、きれいっす〜!」

視界の端で曹仁が手元の光蟲を眺めながら感嘆の声をあげている。

約束通り、ザイユは繁殖して増えた光蟲の一匹を曹仁にあげた。光蟲は曹仁の手の中で淡い光を発している。

「気に入ったようで何よりだ」

「おじさん、ありがとうっす!」

「……だからおじさんではない」

何度も訂正しているが、どうも曹仁にとってザイユはもうおじさんという認識で決まってしまうているらしい。

「すみません、姉さんがわがままを言ってしまって」

「気にしなくていい。もともとそういう約束だったし、これからどんどん増えるからな。」

「一匹ぐらいどうってことない」

これには流石の曹純も苦笑い。確かに光蟲は綺麗だが、結局は蟲であるし、それが増えるとなれば、女性にとってはきついものがあるだろう。

だが光蟲は閃光玉の素材で、ハンターにとってはかなり需要が高い。申し訳ないがここは我慢してもらおうしかない。

「そ、そうですか。そんなに増やして、どうするんですか？」

「光蟲は閃光玉の素材になる。いくらいても困ることはない」

「閃光玉、ですか？」

「ああ。こいつらは驚いた時や、絶命時に強い閃光を発する。それを利用し、モンスターの眼を眩ませる」

そう言つて虫籠から光蟲を一匹取り出し、軽く外殻を叩く。すると目が眩むほどではないが、光蟲から閃光が発せられた。

「成程……」

「あとは使いやすいするために、素材玉と調合すれば完成だ」

「しかし、少しかわいそうな気がしますね」

「モンスターとの戦闘では、そんな事は言っていられない。狩るか狩られるか、だ」

実際には閃光玉を使用すると、玉が割れて光蟲は逃げていくのだが、そのまま死んでしまう個体もある。それはそれで仕方ないことだ。弱肉強食、単純だが自然界ではそれが絶対の掟なのだ。

「……あの、ザイユさん」

「どうした？」

「ザイユさんは、ずっとあのような化け物と戦ってきたのですか？」

ふと、曹純が思ってた疑問を口にする。少し前まで、領内に居座っていた古龍オオナズチ。それを撃退したザイユ。夏侯淵からは、化け物退治の専門家（実際には少し違うが）と聞いてはいたが、ザイユ自身は狩りで生計を立てているという。普通狩りと言えば、イノシシやシカ、あとは鳥などを獲るが、どうもザイユの言う『狩り』とは少し違うように感じた。

「ああ。だが、年中相手したわけじゃない。時には野草の採取や鉱石の採掘、魚釣りなどもした」

「そうなんですか？」

「そういう依頼もあるからな。だが基本的には狩猟の依頼の方が多い」

ギルドを通じて、ハンターへは多数の依頼が来る。その中には村に迫るモンスターを何とかしてほしいというものや、珍味の採取など本当に多種多様だ。どこかの王族や、貴族からの依頼もあるが、大抵は碌なものではない。

「特に俺が住んでいた村は極地にあつたから、物流も乏しく、常にモンスターの脅威に晒されていた。狩らなくては生活ができない……それが俺達の日常だ」

「そうだったのですか……」

曹純は言葉を失った。化け物——モンスターの脅威と隣り合わせの生活、生き残るためには強大なモンスターと戦うしかない。ザイユの、その村の日常は、そのような過酷なものであるなどは、想像もしていなかった。

「おじさん、柳琳、何話してるっすか？」

「姉さん……えっと」

「いや、大した話ではないさ」

二人が話しているの気になったのか、曹仁がトテトテと歩いてきた。曹純が何と言おうか考えてると、ザイユがバツサリと曹仁に言った。

ちなみにおじさん呼びについては、もう半ば諦めている。

「そうすか？それよりお腹空いたっす！一緒に飯に行くっす！」

そう言った曹仁の腹からは、腹の虫が鳴いてる音が聞こえる。空を見上げれば、太陽が昼時を示す位置まで上がっていた。

「もうそんな時間か。そろそろ飯にするか」

「飯にするっす！ほら、柳琳も行くっすよ！」

「え、ええ……」

意見がまとまり、三人は食堂に向かう。最近の夏侯淵の手伝いの功績のおかげで、ザ

イユも利用できるようになった。そんなザイユを、一歩引いた位置から曹純は見つめていた。

今のザイユの雰囲気からは、先程語った過酷な環境で生きていたとは思えない。しかし、それが曹純は気になった。

(先程の話は嘘とは思えない。けど、辛い話という感じでもなかった。ザイユさん、あなたは一体……)

曹純の疑問をよそに、ザイユは久しぶりにこんがり肉以外が食えると、内心楽しみにしていた。

そして、その食事に曹純らが驚くのは、また別の話。

陳留の日常～その二～

「おじさーん！ご飯に行くつすー！」

光蟲の件で懐いたのか、曹仁は最近よくザイユのところに来ては遊んだり、一緒に食事をしたりしている。今回も妹の曹純と共に、その誘いに来たのだが……。

「すまん、遠慮する」

返ってきたのは遠慮と言う断り文句。これには二人も吃驚。

「ど、どうしたんですかザイユさん？体調でも悪いんですか？」

「いや、そういうわけではないんだが……」

グウウウウ

といったところで、巨大な腹の虫の音が鳴ってしまう。これでは腹が減ってないというごまかしも出来なくなってしまった。

「……お腹、鳴ってるつすよ？」

「むう……」

人にもよるが、ハンターは総じて健啖家である。ザイユもその例に漏れないのだが、その彼が食事を遠慮するとは……何か理由があるに違いない。

「何かあったんですか？」

「ううむ……実はな」

そう切り出して、ザイユは話し始めた。

「ちよつとそこの貴方！」

「？」

丁度朝と昼の間くらいの時、いつものように農場として借りている中庭の傍らでザイユが武器の整備をしていたところ、急に声をかけられた。

気の強そうな声がした方に振り向くと、ぬいぐるみを抱えた金髪の少女が立っていた。

「あー、えつと……何の用だ？」

「何の用ですつて……！ 散々城内の食糧を食べ荒らしておいて、よくそんな白々しいことが言えますわね！」

頭に？を浮かべて首を傾げるザイユ。それを見て少女はその端正な顔に青筋を浮かべ、さらに憤慨する。

「そんな顔をして、とぼけても無駄ですわ！貴方が来てからというもの、我が家の台所は火の車……どう責任をとってくれますの!？」

「いや、そんなこと言われても……曹操から許可はもらっているぞ」

「だまらっしゃい！例えお姉様は許しても、この曹洪子廉が許しませんわ!!」

激昂する少女——曹洪の前に、さしものザイユもたじたじになる。

「えっと、すまなかつた。ここの飯が美味くて、ついな」

「ふん……貴方はお姉様の温情で当家に居候している身なのですから、少しは弁えなさい——」

「ああ、すまん」

「まったく、お姉様も何を考えているのかしら……」

そうブツブツ言いながら、曹洪は中庭兼ザイユの農場を離れていった。残されたザイユは、流石に無遠慮が過ぎたかと内心反省し、とりあえず装備と農場の手入れに戻った。そしてお昼時になって、曹仁達がやってきたというわけである。

「成る程、栄華ちゃんが……」

「ああ。という理由だ曹仁、すまんな」

「華琳姉えから許可は貰ってるのに、栄華も意地悪つすねー!」

曹純もそう思ったが、曹洪の言うことも理解できるのだ。何せザイユの食量と言ったら、通常の兵士の倍程度では済まないのだから。詳しい量は分からないが、数日で一月分は消費しているだろう。これでは経理を担当している曹洪でなくとも文句を言いたくなる。

だがザイユは、夏侯淵らと共闘して、それまで領内にのさばっていたオオナズチを撃退した、いわば恩人ともいえる存在。おまけに謙虚な人柄である故、曹純をはじめ、誰もツッコめなかつたのだが、我慢の限界が来た曹洪がザイユへ注意しに来た、というわけだ。

「そう言つてやるな。無遠慮だった俺が悪いんだ、暫くは手元の食料で何とかするさ」

「大丈夫なんですか? ザイユさん、料理とかできるんですか?」

「肉焼きセツトがある。こんがり肉は結構腹持ちいいからな」

「は、はあ……」

それを料理と言つていいかはさておき、流星G級まで上り詰めただけあつて、ザイユの肉焼きの腕前は確かだ。曹純たちもご馳走になったことがあるが、ただ丸焼きにしただけなのに何故か美味しかったのを覚えている。だが、だからと言つてそればかり食べ

ていては体に良くないし、絶対足りなくなる。

「そういうわけだ曹仁。暫くは一緒に飯は行けん」

「むうく……それじゃ寂しいっす！柳琳、何か言い案はないっすか？」

「え?!そ、そうですねえ……」

急に言われてもそう簡単には案など出てこない。うーんうーんと曹純は頭を捻るが、やはりそれでも出てこない。

「せめて依頼でもあれば、食い扶持くらいは稼げるんだがな」

「まだ秋姉えのお手伝いしか、おじさんの仕事ないっすからねー」

「ああ。まあまだ信用が足りないだろうから、仕方ないがな」

いくら曹操のお墨付きとはいえ、陳留に来てまだ日の浅いザイユは、夏侯淵や目の前の曹仁たちぐらいついかまだ交流がない。最近では夏侯淵の手伝いをこなしているからか、彼女の部下たちとは少し打ち解けたようだが……そもそもハンターに依頼するほどの事例が少なすぎると言うのも原因の一つである。

「あつ」

二人が会話しているうちに、何かを思い付いたのか曹純は手のひらをポンと叩いた。

「では単純な方法ですが、こうするのはどうでしょうか？」

「?」

一体何を思い付いたのだろうか。

（数日後）

「な、な、な——」

曹洪は目の前の光景に絶句していた。

この日、彼女はいつものように仕事をしていたのだが、その最中に曹仁に無理矢理連れ出された。無論抵抗しようとはしたものの、勢いに流されてしまつて、ここまで来てしまつた。どうせ大した用事ではないだろうと思つていた彼女の目に入つてきたのは……。

「何なのですかっ?!これはっ!」

解体済みの獣の肉や毛皮等が、荷車に山積みになされている光景だつた。それも一台や二台ではない。それらがずらりとそびえる様に並んでいた。

「ふっふっふ、どうつすか栄華?これ全部おじさんが取つてきたんすよ!」

「おじさん?……まさかあの男が?」

曹仁の言う通り、これらは全部ザイユがここ数日フィールドに出て狩つてきたものだ。何故そんなことをしたのかというと、数日前の曹純の提案によるものだ。

「柳琳が言つてたつす、おじさんの食べ過ぎで食料が無くなりそうなら、おじさんに直接獲つてきてもらえばいいつて」

「柳琳さんが？で、ですが、本当にこの量をあの男が？」

確かに獲ってきた量はかなりのものだが、ザイユは村にいた頃、大型モンスター狩猟だけでなくフィールドに自生する野草や魚、モンスターの肉やキモといった食材となる素材の納品依頼もこなしていた。

中には飛竜の卵の納品といった依頼もあった。それに比べれば正直楽な仕事である。

「へえ、確かにこれは凄いわね」

「お、お姉さま?!」

「あつ、華琳ねえ！」

気付けばいつの間にか曹操もこの場に来ていた。彼女は目の前の光景に驚きつつも感嘆している様子である。

「これだけの働きを見せられては、認めないわけにはいかないわね。栄華？」

「うう……はい」

こうして、ザイユは無事食堂の利用権を得たのであった。

「やったつすー！そういえばおじさんは？」

ちなみにこの間、当の本人であるザイユはというと。

「……」 グルグル

「あの、ザイユさん。いいんですか、農場こにいて？」

「依頼は終わっている。納品物に関しては、君にも確認してもらったから問題はない。……焼けたぞ、食べるか？」

「え、あ………いただきます」

農場で肉を焼いていた。その近くには曹純の姿もある。獲ってきた食材を曹純に確認してもらった後、ザイユは仕事は終わったと言わんばかりに農場へと戻ったのだ。た。

そして自分用に確保していた肉を焼いているという訳だ。いつも通りと言えども通りだが……。自分の事なのに無頓着すぎやしないだろうか？

「………」ムグムグ



「………ふう」

練兵場の傍らでヘルムを脱ぎ一息つく。日課の鍛錬をこなしたザイユの額にはうっすらと汗が浮かび、疲労の色が見える。

「お疲れのようだな、ザイユ殿」

声をかけたのは夏侯淵。彼女もまた自身の鍛錬のため、練兵場で腕を磨いていた。

「慣れたことだ。お前も、随分熱が入っているようだな」

「オオナズチとの戦いで、自分の力不足を痛感したからな。姉者も同じだ」

そう言つて自嘲するように笑つた夏侯淵の視線の先では、訓練用の剣を振るう夏侯惇の姿があつた。

「いつまたオオナズチが、もしくはそれに匹敵する化け物が襲つてくるか分からぬからな。もしその時が訪れたとして、無様を晒すようなことはしたくない」

「そうか……」

「だが、いくら鍛えたとしても恐らく無駄なのだろう。ザイユ殿？」

「それは……」

ザイユはそれ以上言えなかつた。確かに夏侯淵の言う通り、いくら彼女たちが鍛錬を積んだとしても、モンスターに太刀打ちできない。その明確な理由を、彼女は理解していた。

「私たちの武器は人と戦うための物だ。あのような化け物相手では、通用しない。そうだろうか？」

「……ああ、その通りだ」

自身の持つ弓を見ながら言つたその言葉に、ザイユは申し訳なさそうに目を伏せながら肯定した。

「小型モンスターであれば問題ないだろう。だが大型モンスター、特にオオナズチをはじめとした古龍には、余程弱いところを狙わなくては、虫が指した程度の効果しかないだろう」

「やはり、か」

「鉱石をふんだんに用いた武器であれば多少は通用するが、やはりモンスターを倒すにはモンスターの素材を使った武器の方が効果的だ」

もちろん、鉱石系の武器でもG級装備ともなれば高い効果を発揮するが、希少な鉱石を多く必要とするため、今の状況では現実的ではない。そもそも加工できる者がいるのかどうか。

「オオナズチの尻尾を加工できれば、完全とは言えないまでも、マシンものが作れるとは思うが」

「正直に言つて、そちらも芳しくない。どうにか加工できないか調べてはいるが……」

通常の大型モンスターならともかく、古龍であるオオナズチの素材を加工するのは簡単ではない。

尻尾の解体はザイユが手伝ったお陰で、難なく終わっているが、そこから先はザイユも知識がないためどうすることもできない。

「よしんば加工方法が分かったとしても、素材はギリギリ足りるか足りないかだ。無駄

「使いはできんぞ?」

「分かつているさ。素材を集めるために、また戦うのは御免だ」

尻尾をまるごと回収できたお陰で、皮や尻尾といった素材、更にはメランジエ鉱石も確保することができた。しかし、近接のナズチ武器を生産するには、爪や角といった素材が必要であり、それらは今回、端材のようなものしか手に入っていない。

「安心しろ。その時は俺だけで行く」

「なんだと? お主正気か?」

「あの時は回復薬といったアイテム不足もあつて苦戦したが、今回は農地を借りれたお陰で、次は万全の状態で挑めるからな。問題はない」

「ううむ、そうは言ってもだな……」

頼もしい台詞だが、夏侯淵もオオナズチの強さを知っているだけに、その厚意を素直に受け取るわけにもいかない。

そんな二人に近づくと人影が一つ。

「おじさーん」

「徐晃か、どうした?」

ザイユが陳留の街を訪れてから、大分日が経った。そんなある日、夏侯淵達が連れてきたのが、この徐晃だ。

詳しくは省くが、なんやかんやあって拾われたとか。

そうして曹操の仲間になった徐晃だが、意外にもザイユに懐いている。その理由とは……。

「あれやってー」

「分かった。よつと」

あれ、とはなんなのだろうか？

ザイユは再びヘルムを被り、傍らに立ててあつた大剣を手に取ると、徐晃のもとに向かう。

「じゃあ、いくぞ」

「うんー」

そう言つてザイユは手に持った大剣を振りかぶり、地面を抉るように下段から上段へと斬り上げた。

……徐晃目掛けて。

「フンッ！」

「わああー……」

刃を寝かせているので斬り裂くことはないが、ザイユの怪力で下段から斬り上げられれば、当然徐晃の小さい体は高く打ち上げられることになる。

みるみる内にその高さは延びていき、暫くして上昇が止まると、数秒の浮遊感の後重力に従って落下を始めた。

「よつと」ポス

「ふわあゝ」

地面に衝突する前に、落下地点に先回りしたザイユが徐晃をキャッチした。これがハンターであれば地面に落ちても平気だが、彼女はハンターではない。武人であるため鍛えてはいるものの、ザイユからしてみればまだ小さい子供に見える故、受け止めないわけにいかない。

いつまでも抱えてるわけにも行かず、そつと徐晃を地面に下ろす。

「満足したか？」

「もう一回」

「……分かった」

どうやら一回では足りないらしい。ザイユは大剣を振りかぶり、徐晃は再び空へと打ち上げられた。

なんでも彼女の夢が、鳥のように空を飛ぶことらしく、誰かからザイユが夏侯惇を打ち上げた話を聞いたのか、こうしてねだってくるというわけだ。

「あーっ!? 香風ずるいっすーっ! おじさんあたしもー!」

「……」

その後は徐晃に加え曹仁も混ざってきて、大忙しなザイユであった。

「……ふふ。ザイユ殿もすっかり溶け込んだようだな」

そう呟いて、一人微笑む夏侯淵であった。

◇

神の使いが降り立った。

民衆の間では、最近そのような噂が広がっている。戦乱の世を治めるために使わされたとか、現皇帝の霊帝が神の怒りに触れたとか、このような不遜な噂もまことしやかにささやかれている。

切っ掛けは、一人の農民だった。ある朝、雷の落ちる音で目が覚めたその農民は、確認に向かった先にある自分の畑で、その生物を目撃した。

純白の鬣を持ち、神々しく輝くその存在を。

突如として雷鳴が響き、気づいたらそれは姿を消していた。

それを聞いた商人や旅の武芸者達により、この話は広がっていったというわけだ。

その生物は一体なんだったのだろうか？

雷鳴と共に現れ、幻の如く消えていく。

いつしか人はそれを”幻獣”と呼ぶようになった。

第二章 因縁、動き出す時代

黄巾党

曹操の元で世話になってから暫く経った。その間近くの沛国というところの相が謁見に来たり、賊の討伐に出陣したり、新しい仲間が増えたりしていたが、ザイユはいつも通り過ごしていた。曹洪や、新しく陣営に加わった荀彧からは厳しい目を向けられたが、モンスター以外は相手にできないので、仕方がない。

そんなある日の夜。曹操に呼び出されたザイユは、ある事について質問を受けていた。

「コウキントウ？最近よく聞くが、なんだそれは？」

「簡単に言えば、大規模な賊の集まりよ。黄色い布を身に付けていることから、黄巾党と呼ばれているわ」

「ほう」

なんでもこの度、朝廷から黄巾党討伐の命が下り、曹操達のところからも軍を出すことになったそうだ。

要するに自分達の手に負えないから丸投げする、という事だ。

そんなことはどうでもいい。ザイユの一番の疑問は別にある。

「話はなんとなく分かったが、その会議に何故俺が呼ばれたんだ？」

「今回の件、あなたにも手伝ってもらおうと思つてね」

益々訳がわからなかった。確かにザイユは曹操のところへ世話になつてゐるが、配下になつたわけではない。そもそも以前、モンスターしか相手にしないと云つた筈だ。

「前にも言つたが、俺が狩るのはモンスターだけだ。人間相手にする仕事ならお断りだ」
「分かつてゐるわ、ここからが本題よ。あなた、確かここに来る前に旅芸人と一緒だつたつて言つてたわよね」

「ああ。僅かな時間だつたが、彼女たちには大変世話になつた。元気にしてゐるだろうか
気になるが、それと何が関係が？」

この地域に流れ着いて、右も左も分からない頃にザイユは彼女たちに助けてもらつた。

ロクなお礼もできずに別れてしまつたため、ある程度稼げている今、ちゃんとしたお礼をしたいと考えていた。

しかし、その彼女たちが今の話に関係あるのだろうか。ザイユは疑問に思つた。

「彼女たちの名前は何かといつたかしら？」

「天……張角、張宝、張梁の三姉妹だが……」

うっかり真名の方を言いそうになったザイユだが、すぐに修正した為か、特に突っ込まれることはなかった。

だが、彼女達の名前を聞いた曹操はやっぱりといった様子で軽くため息を吐き、周囲の人達もぎわめきだした。

「……………」

「実はなザイユ殿、その黄巾党の首魁の名前が……………」

ついていけず頭に疑問符を浮かべるザイユに、曹操に代わって近くにいた夏侯淵が答える。

「張角というらしいのだ」

「……………何だと」

これには流石のザイユも驚き、すぐには言葉が出なかった。

「何かの間違いではないのか？アイツらがそんな大それたことをすると思えないんだが」

「こちらとしても、そこはなんとも言えん。捕らえた賊を尋問しても、誰一人として口を割らなかつたからな」

腕を組んで頭を捻るザイユだが、やはり彼女達が賊の首魁になるなどありえないと言
う結論になった。

「なら、同一人物ではないという可能性もある、か」

「確かにそうね。でも最近の調査で、黄巾の蜂起があつた村の大半で、三人組の旅芸人が目撃されていたという報告が上がっているわ」

「嘘だろ、といった表情で曹操の話を書く。といつても、ヘルムを被っているせいで表情はよく分からないのだが。」

「だとしてもだ。彼女達がそんな事をしている目的は何だ？」

「それが分からないのよね。いっその事、大陸制覇の野望でも持っていてくれれば、遠慮なく叩き潰せるのだけれど……そうなれば、あなたが黙つてないでしょう？」

「当然だ。彼女達には恩があるからな」

それを聞き、ハアと溜め息を吐く曹操。現状を考えれば、曹操の言う事が正しいのだろうが、流石に恩がある彼女達がそうされるのを見過ごすほどザイユは冷血漢ではない。い。

「それに、下手な潰し方をすれば、余計に手が付けられない事態になりかねないわ。そこで貴方に手伝ってもらいたいのよ」

「やつと本題か。何だ？」

曹操は一度、フウ、と息を吐いてから続けた。

「ザイユ、貴方には使者として張角のもとに出向き、投降するよう説得してもらいたいの

「よ」

「……構わんが、いいのか?」

何というトンデモな提案か!しかしザイユは顔色一つ、声色一つ変えずに答える。

「ええ。さつきも言ったとおり、下手なことをすれば後々面倒なことになるかもしれない。だったら面識のあるあなたに行ってもらえば、穏便に解決できると思つてね」

「……なる程な。分かった、できる限りはやつてみよう」

そう簡単に行くとは思えないが、それで余計な血が流れないのであれば、とザイユはその提案を了承する。

「引き受けてくれて助かるわ。首魁さえ何とかすれば、あとの処理はだいぶ楽になるからね」

「そういうものか」

どう処理するのか少し気になったザイユだが、彼女達が助かるのなら、まあいいかと、これ以上は深く考えないことにした。

「それで、彼女達は今どこにいるんだ?」

「それが、未だ掴めていないんです。今まで現れた黄巾党は散発的でしたから」

「……成程。地道に探すしかない、か」

代わって説明した曹純の言葉に、ザイユは軽くため息を漏らした。これでは解決する

のはいつになる事やら……。

「華琳姉え、大変つすー!」

と、ザイユ達が頭を捻っているところに、曹仁が飛び込んできた。

「どうしたの、華命」

「ええつと、陳留の隣の都で、また黄色い布の人が出てきたつて報告が届いたつす! それも、たくさん!」

曹仁の話聞いた、広間にいた面々は今までにない事態にざわめきだし、すぐさま軍議が始まった。

結論として、徐晃とこれまた最近仲間になった許緒の二人が、夏侯淵と曹純の隊を率いて先遣隊として向かうことになった。

「……」

話の流れから一人とり残されたザイユは、対人戦では俺の出る幕はないな、邪魔しては悪いと、広間の出入り口に向かい歩こうとした。

しかしその時、ある単語がザイユの耳に止まった。

「雷には気を付けるつすよ柳琳」

(……雷?)

普段であれば、特段気にならないのだが、この時だけは何故か耳に残った。

ザイユは足を止め、彼女達の話に耳を傾ける。

「あの噂の事ね。大丈夫よ姉さん、今は晴れてて、雲一つないもの」

「でもでも！噂では雲がなくても落ちてきたらしいっすよ！それも人めがけて」

「何かの見間違いだろう。それに雷なぞ、そう人に当たるものではない」

何やら興奮気味の曹仁を、曹純と夏侯淵の二人が宥めてるようだが、それよりもその話の内容がザイユは気になった。

（雷……まさか）

考え込むザイユをよそに、軍議は終わり、全員がその場から姿を消した。

残っているのはザイユと曹操のみ。

「どうしたの、ザイユ？」

「……なあ曹操」

何やら考え込んでいるザイユを不思議に思ったのか、曹操がザイユに声をかける。

丁度いい、とザイユは先程聞こえた話について、曹操に尋ねた。

「ああ。最近、民の間で雲ももないのに雷が落ちてくる、なんて噂が立っていてね」

「もう少し詳しい内容は分からないか？」

「そうねえ、たしかその目撃者は、馬を見たって聞いたわね」

「ウマ？」

確か……と、少し思いつくような素振りを見せてから、曹操は更に続ける。

「普通の馬の倍近い白い巨軀に、白い鬣を靡かせていたらしいわ。民衆の間では、神の使い、だなんて呼ばれているとか」

話を聞いて、ザイユはあるモンスターを思い浮かべていた。しかし、これだけで断定するにはまだ早い。

しかし、続く曹操の言葉で、ザイユの疑問は確信へと変わった。

「ああそれと、額には一本の角が生えていたらしいわ」

「……何だと」

ザイユは確信した。曹操の話を聞いて、そのモンスターの存在を確信した。

「何人かが目撃したらしいけど、雷と共にその姿を消したのだとか」

「……曹操」

それまで聞きに徹していたザイユが、曹操に向けて口を開いた。

「今回の出撃、俺も行かせてもらおう」

その提案に、曹操は少し驚いたふうに、目を丸くした。

「どういう風の吹き回し？まさか、この噂を真に受けた訳じゃないわよね」

「そのまさかだ。曹操、もしその噂が本当であれば、彼女達が危ない」

「……どういふ事」

空気が少し重くなった。

真剣な面持ちのザイユの発言に、曹操もまた、何かを感じ取ったようだ。

「その噂の正体、恐らく俺の知るモンスターだ」

「何ですって？」

「もしそのモンスターに遭遇したら、いくら夏侯淵達とはいえ、全滅する可能性がある」

その発言に曹操の視線が鋭くなるのを感じたが、ザイユは構わず続ける。

「ヤツの力は強力だ。それに非常に気性が荒い。遭遇したらまず戦闘は避けられない」

「……貴方がそこまで言うなんて、その化け物は一体」

ザイユは曹操に視線を合わせ、曹操の問いに答えた。

「幻獣キリン。雷を自在に操る、オオナズチと同じ古龍種のモンスターだ」

相対、感じる者

まだ夜も明けぬ頃。ザイユは賊討伐に向かう夏侯淵らに同行し、彼女の率いる隊の馬車に揺られていた。

「しかし、どういう風の吹き回しだ？お主が賊討伐に同行するとは」

「……」

夏侯淵の問い掛けに、ザイユは無言で空を見上げ、曹操とのやり取りを思い出していた。

「麒麟って、それは伝説上の生き物でしょう？」

ザイユからここ最近耳にする噂の正体について聞かされた曹操は怪訝そうな顔をしたが、それも無理はないだろう。

「キリンだ。こつちではどう扱われているか知らんが、お前が知っているのは別物と考えたほうがいい」

「そうは言われてもね……」

彼女にとってキリンとは、礼記という書物に記された麒麟のことであり、それは瑞獣

という神聖な生き物とされている。

その知識があるからこそ、キリンが出るかもしれないということの危険性がいまいちピンときていないのだろうか。

「奴は古龍の中では小型の部類だが、その危険性は神出鬼没さと相まって、多くのハンターが犠牲になっている」

「確かに話を聞く限りでは危険な存在のようだけど、噂が出始めてから犠牲が出たという話は聞かないわよ」

「遠目で見ただけなら、奴も敵視はしない。だがもし、気が立っているときに遭遇したりしたら、確実に広範囲に被害が出る」

「ザイユの話を聞いた曹操は口元に手を当てて、何かを考え込んでいるのか黙り込んでしまった。」

「……貴方の話が本当なら、そのキリンにかかれば村一つ消すのなんてわけないってことよね」

「ついでにお前の部下達もな」

「そんなこと言わなくていいのよ……分かったわ。ザイユ、貴方に依頼をするわ」

曹操はザイユに向き直ると、ビシッ！と指を指して彼に告げた。

「部隊に同行して、もしキリンがいた場合これを討伐、もしくは撃退して、街の人達及び

私の可愛い部下達を守りなさい」

「構わんが、賊との戦闘には関与しないぞ。それに報酬はどうする？」

「賊に関してはもとよりそういう契約だから構わないわ。報酬は無事依頼を達成したら、貴方の望むものを授けるわ。そのほうが分かりやすいでしょう？」

ハンターギルドの依頼ではありえない報酬の決め方に、ザイユはヘルムの中で溜息を一つ吐いた。

「分かった。準備ができ次第、夏侯淵達に合流する」

「ええ。お願いね」

それからすぐに、ザイユは準備を整え、出発する直前の夏侯淵の隊に合流した。

馬車に乗り込んだ際、馬車の床板が悲鳴を上げていたが、それは関係のない話だろう。

と、このような事情により、本来は賊討伐などには関与しないザイユが夏侯淵達に同行することになった。

しかし、余計な心配はさせないよう、同行した理由については曹操の依頼のことはボカして伝えた。

「少し気になることがあってな。何もなければそれでいい」

「そうか。だが黄巾党はかなりの数だと聞く。お主の矜持は理解するが……」

「分かっている。確かにハンターとして人を斬ることは出来ないが、降りかかる火の粉を払うくらいは出来る」

そう答えたザイユを見て、夏侯淵は一瞬意外そうな表情をしたが、フツと短く笑うと「そうか」と一言だけ言ってその視線を馬車の進行方向へと向けた。

その後、これといった会話もしないうちに、目的地である街に到着した。

動きを止めた馬車から夏侯淵が降り、続いてザイユも降りようとしたのだが、何故か夏侯淵に止められた。

「ザイユ殿は、私が呼ぶまで待っていてくれ」

「何故だ？」

「……自分の格好を鑑みてくれ」

至極真つ当な意見である。ザイユの格好はいつものディアブロX装備一式に霸王剣クーネエムカム。街の人達に余計な威圧感を与えてしまうのは必然。ザイユは一人、馬車の中で待機することとなった。

「……装備の点検でもするか」

大剣とポーチを取り外し、一つ一つ点検していく。

回復アイテムや閃光玉などは、農場のお陰で必要な分は揃えられるが、今回に限って言えば不足していると言った方がいい。

(キリンに閃光玉は効かん。爆弾を作りたかったが、爆薬はおろか、原料の火薬草も二トロダケも入手できなかった。今回も厳しい狩りになりそうだ……)

ふう……とため息を吐きながら、砥石で大剣を研ぐ。この砥石は夏侯淵に頼んで調達してもらったものだが、多少研ぎ具合に違いがあるだけで、使い心地は変わらない。

研ぎ終わった大剣を立て掛けたところで、夏侯淵が馬車の幌を開けてザイユに声を掛けてきた。気付かぬうちに結構時間が経っていたらしい。

「街の者達への説明は終わった。紹介するから来てくれ」

「分かった」

大剣を背負い直し、馬車から降りて夏侯淵に着いていく。村人達の視線が突き刺さりながら少し歩くと、一軒の家が見えてきた。

先に入った夏侯淵に続いて中に入ると、「ヒエツ」という小さい悲鳴が聞こえてきた。声の方に視線を向ければ、眼鏡をかけた小柄な少女がもう一人の少女の背中に隠れていた。

「夏侯淵殿、そちらの御仁は？」

白髪なのか銀髪なのか、薄い髪色の少女が尋ねる。

「彼が先程話したザイユだ。今回はある目的があつて着いてきたらしい」

「ある目的？」

訝しんだ目で彼女はザイユを観察するが、同時にザイユも彼女を観察していた。

動きやすくするためか、胸当てに手甲などといった最低限の装備に身を包み、露出している部分からは鍛え上げられた靱やかな筋肉が覗いている。

見るものが見れば相当な武人と思うだろうが、彼はモンスターハンター。

そこそこに鍛えている。ザイユが彼女に抱いた感想はそれだけだ。

「ザイユ殿。彼女達は義勇軍の者だ。何か聞きたいことがあれば、彼女達に訊くといい」
「分かった」

彼の短い返事を聞いた夏侯淵は、賊の襲撃に備えるため、仲間達の元へと向かった。

残されたザイユと彼女達の間には微妙な空気が流れたが、そんなのは気にせずザイユは彼女達へと話しかけた。

「夏侯淵から聞いてると思うが、俺はザイユ。ハンターだ」

「私は義勇軍の楽進と申します。こちらは李典と于禁」

（何や変なおっさんやな）

（そうなの。あんな鎧着てるなんて、絶対変わり者なの）

簡素な自己紹介を終えたザイユは、楽進以外の2名からの視線に気づくことなく、話を進めることにした。

「早速君達に訊きたい。この辺で……雷を操るウマ？が出たことはないか？噂でもいい

「い

ザイユの話を聞いた三人は少し驚いたように目を丸くし、それぞれ顔を見合わせる。

「それって、神の使い様のこと？」

「奴はそんな大層な存在じゃない」

于禁と呼ばれた少女の言葉を、ザイユはバツサリと否定した。しかしその言い方が気になったようで、今度は李典がザイユに向かって訊く。

「その言い方、何やソイツについてよー知つとるみたいやな？」

「まあな。同種だった場合、だが」

肯定するザイユの言葉を聞いた三人は、再び顔を見合わせ何やら小声で相談を始めた。

そして相談が終わったのか、楽進がザイユに静かな口調で話し始めた。

「丁度、昨日の話です」

「ふむ」

「私は賊の襲撃に備える為、修練がてら朝の見回りをしていました。そして丁度外周を一周し、そろそろ戻ろうとした時です」

無意識であろう、話しながら楽進は拳を握っていた。

「気配を感じ、振り向いた時には既にアレはいました。白く輝く馬体もそうですが、何よ

り目を引いたのは……その額から生えた、一本の角」

ゴクリ。誰かの生唾を飲む音がやけに大きく聞こえる。

「どこから来たのか、そもそもいつの間に現れたのか。そんな疑問が出たのは、アレが雷に包まれ、姿を消した後でした。情けないことに、あの時私はアレの神々しさに目を奪われ、そして……その存在に恐怖し、動くことはおろか、考えることすら出来ませんでした」

拳をさらに強く握りしめながら、楽進は当時の心境を吐露した。この身一つを武器にし、己の武を高めている楽進にとって、悔しいものなのだろう。

「教えて下さい。アレは、一体何なのですか？」

尋ねた楽進だけでなく、李典と于禁も固唾をのんでザイユの答えを待っている。

「……話を聞く限り、ソイツは間違いなくキリンだ」

「麒麟……伝説の瑞獣の？」

「違う。確かに滅多に目撃されないが、キリンはそんな大層な存在じゃない。古龍種に属するただのモンスターだ」

「こりゆう？」

「モンスターって何や？」

後ろの二人が騒がしくなるが、ザイユは気にせず続ける。

「奴は雷を操る。おまけに気性が荒く、好戦的な個体が多い」

「それでは何故、あのキリンは私に何もせず、あの場を去ったのですか?」

「……恐らく、ほっといても問題はないと判断したのだろう。運がいい」

不意に、楽進の様子が変わった気がした。具体的に言うとは先程までは自身の不甲斐なさに震えていたのが、今は怒りの感情が出てきているといった感じだ。

その証拠に、李典はあちゃーといった様子で額を抑え、于禁はあわあわしている。

「……ザイユ殿。あなたの考えでは、私ではそのキリンにとつて脅威とならないから見逃された。そう言っているように聞こえるのですが」

「その通りだ」

アツサリと肯定するザイユ。それによって楽進の怒気が更に強まったようだが、そんなのは気にせず、ザイユは更に続けて言い放つ。

「熟練のハンターですら、キリンに大怪我を負わされることもある。奴も古龍種だから。無事を喜びこそすれ、相手にされないのを恥じることはない」

「だが! 私にも武人としての誇りがある。恐怖に震え、情けをかけられたなど!」

語気を強める楽進に対し、ザイユの様子は変わらず、至つて普通に立っている。

「お前の気持ちは理解できなくもない。だが相手は古龍だ。次は挑みかかろうなど、馬鹿なこととは考えるな」

そう言い放ち、ザイユは踵を返してこの場を去ろうとする。だがそれに待ったをかけたのは、楽進を抑えた李典だ。

「ちよい待ち！おつちゃんはうちにキリンつちゅー奴のこと聞いてどないするつもりなんや？ただの興味本位か？」

李典の問いかけにザイユは足を止め、視線だけを彼女達の方に振り向けてから答えた。

「キリンの出現に備える。キリンは神出鬼没だが、また現れないとも限らん」
「何やて？」

再びキリンが現れるかもしれない。その可能性に李典だけでなく楽進と于禁も目を見開いて驚いている。

「現れなければそれでいい。だがもしもの時に備えがないのでは、笑い話にもならん」
「そうかもしれないけど……つかあんだ、キリンと戦うつもりなんか？」

「いや……戦うつもりはない」
「だが」と区切りを入れ、ザイユは三人の方に振り返ってから続きを言い放つ。

「奴を狩るつもりではいる」

その言葉に三人は言葉を失った。ザイユはキリンと戦うつもりはないと答えた。だが直後、キリンを狩るつもりだと言った。その意味が一瞬分からなかった。

「狩るって、あんた戦うつもりはない言うてたやないか!？」

「ああ、奴とは戦わん。だから狩ると言っている」

「同じ事やないか!」

楽進を抑えていたのはどこへやら、今度は李典が声を荒げてザイユに詰め寄った。

「戦いとは互いに敵意を持ち、倒し、殺し合うものだ」

「まあ、そうやな」

「だが狩りは違う。モンスターは脅威だが、同時に貴重な自然の恵みでもある。その為自然に感謝し、使える手は全て使い全力で挑む。それが狩りだ」

「淡々と語るザイユ。楽進達は聞いてて何か感じるところがあつたのか、静かに彼の話を聞いていた。」

「……つまらない話をしてしまったな。ともかく、キリンが出たら俺に任せておけ」

「ま、待つてくれ!あの存在に一人で向かうなんて、恐ろしくないのか?」

その問い掛けは、実際にキリンを目撃し、その存在を間近で感じた楽進、彼女の心から出たものだった。

「そういう依頼だからな。俺はハンターだ。依頼があればこなす、それだけだ」

「だからといって……」

「それに、恐怖はある。自然への恐怖があるからこそ、同時に恵みへの感謝も生まれる。」

俺はそう教わった」

そう言うとザイユは話は終わりだと言わんばかりに再び踵を返し、この場を後にした。

三人は彼を引き止めることもせず、離れていくザイユの背中を見送っていた。
「ザイユ殿……あなたは……」

楽進の呟きに返す者は既におらず、静寂の中に消えていった。

雷電

黄巾党を名乗る賊が確認された街に、本隊に先んじて救援に来た夏侯淵達は、黄巾党の襲撃に備える準備をしていた。

それと同時に、キリンの情報を得たザイユは、キリンが現れた時に備えるため、彼女達とは別行動をしていた。

「む、これは……」

街の外を回り、キリンの痕跡を探していたザイユだが、ある場所に差し掛かった時、野草に白い毛が残っているのを見つけた。

調べようと手を伸ばすと、バチツと音を立てて弾かれた。

「帯電している、キリンの体毛で間違いないか……」

体毛が落ちていた周りを探る。するとやはりというべきか、キリンの足跡らしきものも見つかった。恐らくここで楽進がキリンを目撃したのだろう。

これ以外の痕跡は見つからなかったものの、それはザイユにとって想定内。何故なら、キリンは「健脚の古龍」とも呼ばれており、現実離れした行動力を有している。

(だが、遠くに行った訳でもないだろうな)

楽進の話によれば、キリンが現れたのは昨日の朝。楽観視はできない。

ふと視線を街の方へと向ける。その視線の先では夏侯淵の部下と思われる兵士達が忙しなく動き、賊の襲撃への備えを進めている。

ザイユはほんの少しだけその様子を眺めた後、再びキリンの痕跡を探し始めた。

興味が無いのか、はたまた邪魔をしないようにするためか。ヘルムの奥で彼は何を考えているのだろうか。

「ザイユ殿」

ふと、声をかけられた。聞き覚えのある声だ。その人物が誰か察したザイユは振り返らずに返す。

「夏侯淵か。何のようだ？」

「いやなに、ただ様子を見に來ただけだ」

「そうか」

こちらを振り返らず、黙々と手を動かしながら返事を返す彼の姿に、夏侯淵はついため息を吐く。

「そつちの方はどうだ？」

「ああ、順調だ。これなら本隊到着まで持ち堪えられるだろう」

「そうか」

「……モンスターか？」

不意に問いかけられたその言葉に、流石のザイユも手を止めた。

「……気づいていたか」

「最初からな。お主が出撃に同行する理由など、それ以外にあるまい」

ザイユはふう、と一息はいてから立ち上がり、夏侯淵に向き直る。

「同行が決まった段階では、可能性の話でしかなかった。だが楽進の話と、こいつが見つかったことで確信が変わった」

そう言つてザイユが差し出した手には、先程見つけたキリンの体毛が握られていた。

「これは？」

「キリンの体毛だ。昨日現れたと楽進が話していたから、その時のものだろう」

「キリン……以前お前が話していた、雷を操るモンスターか」

無言で首肯するザイユに、夏侯淵は呆れたような表情でため息を吐く。

「何故伝えなかつた？」

「確証がなかつたからな。いたずらに不安を煽るようなことはしたくない」

「今回の同行は、華琳様からの依頼か？」

「半分はな。もう半分は俺の意思だ」

「そ、そうか」

ザイユの返答に何故か夏侯淵は言葉を詰まらせ、一つ咳払いをしてから再びザイユが持つキリンの体毛について尋ねる

「しかし、この体毛は本当にキリンのものなのか？」

「触ってみる」

言われるままその毛に触ると、バチツと音を立てて蒼白い電気が走り夏侯淵の手を弾く。

弾かれた手を抑えながら、驚いた表情で夏侯淵はザイユへと視線を向ける。

「な、何だ今のは!？」

「これが証拠だ。キリンは雷を操るため、体毛は抜け落ちてから暫くは帯電している」

「成る程……確かにこれ以上ない証拠だな。だが雷を帯びていることは言っておいてほしかったぞ」

「……すまない」

謝罪するザイユに夏侯淵は再びため息を吐き、然しザイユらしいと少しだけ口角を上げた。

「ところでザイユ殿。キリンの毛が落ちていたということとは」

「……確証はないが、もし奴がここを縄張りの一部とみなしていた場合、戦いが始まればほぼ確実に現れるだろう」

「ザイユから告げられた、これから起こりうる事態に夏侯淵は知らずのうちに奥歯を噛む。」

「キリンは好戦的な古龍だ。もしそうなれば、下手をすれば敵味方関係なくかなりの被害が出るだろう」

「だろうな……分かった。もしキリンが現れたら、速やかに兵達を退かせよう」

「頼む。それと夏侯淵」

ザイユは一呼吸おいて、再び彼女へと告げる。

「キリンの相手は俺だけです。お前も退避していてくれ」

「何?」

「勘違いしないでくれ。お前の腕前はオオナズチ戦で十二分に理解している。ただ今回は相性が悪い」

その言い方に怪訝そうな顔をする夏侯淵に、ザイユは説明を続ける。

「キリンは雷を操ると言ったが、それは比喩などではない。奴は雷を攻撃、防御に利用している」

「そこまで意図的に操れるのか!」

驚き、目を見開く夏侯淵。ザイユは彼女の問い掛けに首肯で返し、続きを話す。

「キリンからどれだけ離れていようとも、奴は狙って雷を落とす。予兆を完全に捉えら

れるなら別だが、そうでないなら手を出さない方がいい」

「むう……分かった。今回ばかりはお主に任せる」

「ああ。任せろ」

一言。とても短い一言だが、これがどれほど心強いかを彼女は知っている。

二人の会話はそこまでで、夏侯淵は部隊の指揮に、ザイユはキリンの痕跡の調査へとそれぞれ戻っていった。

再び一人になり、キリンの足跡を更に調べていくザイユ。数歩ほどある足跡の最後の痕跡は、他の足跡とは違っていた。

「跳んだか。この踏み込みの方角だと……」

跳躍痕から視線を移した先、街から離れた位置に森があるのを視認したザイユはそこへ向けて歩き出した。

途中地を鳴らすような音が聞こえたが、彼は一瞬も足を止めず、一目も振り向かずに歩み進む。



森に入ったザイユは痕跡を探しながら、奥へと向けて足を進めていた。

森の中は草花が揺れる音すら聞こえてくる程静寂に包まれており、そのことがザイユの警戒心を強くしていた。

何故なら、鳥や獣といったものの気配が周囲からは全くと言っていい程感じられなかったのだ。

勿論、偶々そうだということもあるが、ザイユのハンターとしての勘が言っていた、ここには何かがあると。

周囲を警戒しながら更に奥へと進んでいくと、開けた場所へと出た。中心には池があり、近づいて確認してみると底が見える程澄んでおり、飲水としても利用できそうだ。

「少し休むか」

池の畔にしゃがみ、水をすくって飲み込む。スツとした清涼感が喉を通り、ザイユの乾きを潤していく。

その感覚に思わずため息を吐き、もう一すくいしようとしたところで、ザイユは動きを止め、瞬時にその場を飛び退いた。その瞬間！

ピシャアアンツ!!

先程までザイユが立っていた場所に雷が落ちてきた。咄嗟に避けたので無事だったが、あと少し動くのが遅ければ大きく負傷してしまっていただろう。

明らかに自然に落ちてきたものではない、気配を感じた方向に視線を向けると、そこにソレはいた。

「ブルル……」

「……出たか」

見上げる程の巨軀、全身を覆う迸る雷のエネルギーにより発光している白い体毛、そして何より目を引くのは、頭部から生えた一本の角。

”幻獣” キリンがザイユの目の前に姿を現した。

ザイユは視線をキリンへと向けたまま自然に大剣の柄を掴み、抜刀。キリンの方も既に臨戦態勢であり、森がざわつく程の緊張感が一人と一頭の間を奔る。

「——っ!!」

張った糸が切れたかのように、状況は動き出した。キリンは大地を蹴って突進し、ザイユはそれを迎撃せんと踏み込み大剣を振りかぶる。

そして、両者が激突した瞬間、森が大きく揺れた。

◇

ザイユが森に向かっていている頃、襲撃に備える夏侯淵達曹操軍と義勇軍達。そこに偵察からの報告が届き、頭に黄色い布を巻いた軍勢、黄巾党が接近していると報告を受けた。そして、それに間違いはなく、暫く後目に見える位置まで迫ってきたのを確認した彼女達は迎撃の体制を整える。

そして、戦が始まった。

「ちいっ！分かつとつたけど、こうも数が多いとかなわんな……!」

いつでも迎え撃つ準備と覚悟を決めていた彼女達だったが、それでもやはりこうもすぐに仕掛けてきたとあつては多少なりとも兵達は動揺してしまう。

「真桜ちゃんっ！大変なの！」

「何や、どないしたんっ!？」

そんな中、于禁が慌てた様子で李典のもとへと駆け寄ってきた。迫ってくる黄巾党の雑兵を蹴散らし、于禁の話に耳を傾ける。

「風ちゃんか、どこかに行っちゃったの!？」

「な、何やてーっ!？」

その直後、街から離れた森に雷が落ちたが、戦場の喧騒に紛れ気にするものは少なかった。

白き靈獣

「ぐっ!!」

ザイユの体が大きく弾かれる。なんとかバランスを取り、大剣を正面に構える。彼の視線の先には、”幻獣”キリンがその頭角から蒼白い雷を奔らせていた。

そして、キリンが大きく嘶いて立ち上がると同時、ザイユは大剣を一度納刀してキリンの周囲を回るように走り出した。その直後、落雷がザイユを追うように地面を焼いていく。

「フンッ!!」

落雷が収まった瞬間、ザイユはキリンへ向かって一気に駆け出し、一気に抜刀。勢いを乗せた一撃をキリンの首元へと叩きつける。

しかし、振り抜かれた大剣はキリンの頑丈な皮膚によって阻まれ、弾かれてしまった。その隙を突くようにキリンが角を突き上げてくるが、ザイユは地面を転がることで避ける。立ち上がると同時に大剣を横薙ぎに振り回し、キリンの頭部へと叩きつける。またもや弾かれるものの、流星のキリンも頭部に直撃を受けては堪らないようで、怯み唸り声を上げていた。

その間に体制を立て直し、再び大剣を振り落とす。キリンの角へと直撃した一撃は強烈で、ガキインと甲高い音を立てたが角を折るまでは行かない。

「ヒイインッ！」

「がつ!？」

追撃を加えようとするザイユをキリンは角を突き上げて弾き飛ばす。

防具によりダメージは抑えられたが、弾き飛ばされたザイユの体は地面を転がる。地面に指を引つ掛けることで無理やり止め、素早く立ち上がるがそこにキリンが真っ直ぐ突進してきた。

横つ飛びで躲し、キリンの振り向きに合わせて力を溜めた一撃を叩き込み、更に間髪入れずに下から斬り上げる。

大剣の重さとキリンの体重が合計されたとてもない負荷がザイユの両腕にかかるが、ザイユは脅威の膂力でキリンを打ち上げ、キリンの巨体を吹き飛ばし地面へと倒れさせた。

そして、地面を転がって空いた距離を埋めると大剣を振りかぶって力を溜める。そして、力が限界まで溜められたことを知らせるように大剣の外殻が開き、マグマの如きライオンが現れ、張り詰めた糸が切れたようにザイユは己が大剣をキリンの首目掛けて振り下ろした。

「ディイヤツ!!」

鈍い音が森に響く。振り下ろされた大剣はキリンの首に叩きつけられ、途轍もないダメージを与えた。その手応えに、ザイユはヘルムの奥で舌打ちを打つ。

普通のモンスター等であればこの一撃で仕留められただろうが、相手は古龍に名を連ねるキリン。頑丈で韌やかな皮膚に阻まれ、ダメージは完全に通らない。

「ブルイーン!」

「くっ!?!」

暴れて起き出したキリンから咄嗟に距離を取り、それでも視線だけはキリンから外さずに警戒する。

キリンは起き上がると低く唸り声を上げ、その双眼はザイユを睨んでいるように感じられる。

「ヒイーンッ!」

大きく嘶いて後ろ足で立ち上がったキリンを雷が直撃した。その閃光に咄嗟に目を庇ったザイユが再びキリンを見ると、キリンの鬣が帯電し、青白く発光していた。更にはキリンの呼吸も荒くなっている。つまり、怒り状態だ。

「面倒だな。だが、やるしかない」

そう呟き、ザイユは大剣を再び構える。狩りはまだこれからだ。



次第に激しさを増していくザイユとキリンの攻防。その様子を離れた茂みから覗く人影がいた。

「な、何だあれは……何故一人で戦える……う？」

そう口に出したのは、こっそりとザイユの後をつけてきた楽進だ。

彼女はザイユが森に向かうのを目撃し、もしかしてと思い街を離れて彼の後を追ってきたのだ。

そして、彼女の予想通りザイユが向かった先にキリンは現れた。然し、眼の前で起きていることは彼女の理解を超えていた。

何せ落雷を躲したと思えば、あの巨体の突進を大剣の腹で受け止め、更にはキリンを斬り上げてふっ飛ばしたのだ。

これだけでザイユの実力を測るには十分であった。

（あの男からは武人のような気は感じない。だのにこの隙の無さは何だ!? 一体どんな修羅場をくぐり抜ければ、あのような——!?!）

楽進が感じた通り、ザイユは武人ではない。ザイユはハンターとして、モンスターを狩り続けてきた。その数は十や百では圧倒的に足りない。その実践の数々が、ザイユの狩りの腕前を培ってきた。

そして、ザイユはキリンの狩獵も一度や二度ではない程経験しており、それによりキリンの動きをある程度予測した立ち回りを可能としていた。

何ら特別なことではない。ある程度経験を積んだハンターであれば当然のこと。然しそんなことを知るはずもない楽進にとって、キリンと相對しているザイユは何か得体の知れないもののように感じられた。

そのせいか、楽進がふと自身の手に視線を落とすと、その手は細かく震えていた。

(まさか、怖いのか私は……。いや、これは……！)

ぐつと握り拳を作ると、ジワツと手汗が吹き出ているのを感じる。

暫し目を閉じる。震えていたのは恐怖からではない。深く呼吸をし、再び目を開いたときには震えは止まり、彼女の眼はいつもの武人の眼へと戻っていた。

そして視線を戻した先で、ザイユがキリンの突進により吹き飛ばされたのが目に入った瞬間、彼女は茂みから飛び出した。

◇

地面を蹴って転がりながらキリンの攻撃を躰し、隙について斬りつける。

単純だが、こと相手が古龍に名を連ねるモンスターとあつては、そう簡単ではない。

(やはり、コイツでは厳しいな)

加えて今のザイユの装備は霸王劍クーネエムカム。一撃の重さに特化した大剣であ

り、更には無属性であるためキリンを相手にするには向いていない。

本来なら装備を変えて挑むところなのだが、生憎ザイユは自身の他の装備全てを元居た村に置いて来てしまっている。

(だがダメージは通っている。ならば問題はない)

然しそれでも手が無い訳では無い。相性が悪かろうが攻撃を続ければ必ず倒せる。

だからこそザイユは僅かな隙を見逃さず、攻撃を続けている。

キリンの角が発光した。ザイユはすぐさまその場から転がって落雷を躲すが、立ち上がり体勢を立て直そうとした瞬間に飛び込んできたキリンの突進に反応できず、まともに受けて弾き飛ばされてしまった。

「ガアッ!？」

ザイユの体が地面を転がる。漸く止まり、立ち上がろうとした時には、キリンが再び雷を落とそうとしていた。

油断した、避けられそうもない。内心独り言ちるとこれから襲い来るであろうダメージに備え奥歯を食いしぼる。

然し、結論を言えば雷が落とされることはなかった。

「ハアアアッ!!」

掛け声とともに楽進が飛び出し、キリンへと飛び蹴りを見舞った。

当然、その程度でキリンの体勢は崩れない。だが動揺はさせたのか、僅かだが落雷までの隙ができる。

それを逃さず、ザイユはその場から転がり、ギリギリで雷を躲すことができた。

「ザイユ殿っ！」

「すまん、助かった。だが何故ここにいる？」

駆け寄ってきた楽進に向け、視線をキリンへと向けたまままず先程の礼を伝えてから問いかける。

キリンも警戒しているようで、唸り声上げるだけで攻撃の挙動は見せていない。

「ここへ向かうザイユ殿の姿が見え、後をつけてきました。……無茶なお願いだとは分かっています。私も共に戦わせてください」

「その装備では危険だ。武器もなしに戦えるほど、奴は甘い相手ではない」

「それでも！私にの武人としての誇りがあります……このまま引き下がるなどできませんー！」

そう答えた楽進の目を見たザイユは、彼女の覚悟を感じ取ったのかそれ以上は何も言わず、キリンへと視線を戻して大剣を構えなおす。

「……奴の角が発光したら雷が落ちる前兆だ。見逃すなよ」

「ザイユ殿……！感謝します！」

「礼はいい……来るぞー！」

大きな嘶きと共に、キリンの角が眩い程に輝く。

二人はその場から咄嗟に飛び退き、落雷を躲すと楽進はそのままキリンへと向かい、ザイユは一度納刀してから駆け出す。

「ハアアアアアッ!!」

楽進の雄叫びが響く。

彼女が鍛えてきた武は、果たして幻獣を相手に実を結ぶのだろうか。

それを確かめる為、楽進は己の拳を振るう。

狩り場の空気が、今動き出す。